関西学院考古

No. 6

目　　次

═調査報告═

滋賀県東浅井郡浅井町北野遺跡発掘調査概要報告

……関西学院大学考古学研究会……1

長尾山の古墳群（Ⅲ）——雲雀山西尾根古墳群——

……関西学院大学考古学研究会……33

═資料紹介═

宝塚市雲雀丘古墳群C北群4号墳出土の須恵器

……直宮憲一……45

西宮市満池谷墓地内奥畑古墳について

……古川久雄……47

五色塚古墳出土の古式土師器とその編年的位置づけ

……兼康保明……56

═研究ノート═

横穴式石室の平面企画について——長尾山丘陵の横穴式石室を中心として——

……岡野慶隆……64

1980.3

関西学院大学考古学研究会

調 査 報 告

滋賀県東浅井郡浅井町北野遺跡発掘調査概要報告

関西学院大学考古学研究会

Ⅰ　調査の目的と動機

滋賀県では農業基盤整備の一環として各地でほ場整備事業が行なわれている。東浅井郡浅井町大字北野においてもほ場整備事業が行なわれることとなったが、かって土器片が採集され、北野天満宮付近から出土したと伝えられる石棒が、浅井町公民館に保管されていることなどから遺跡の存在が予想された。

このため、工事に先だって遺跡の有無を確認することを目的とし、滋賀県教育委員会が調査を実施した。調査はまずトレンチ発掘による方法をとり、発掘はほ場整備事業によって削平を受ける部分についてトレンチを設定し、遺構が確認されたものについてはトレンチを拡張した。関西学院大学考古学研究会は、調査地区の東半部を担当し、７月１１日から８月１２日まで行なった。西半部については滋賀県教育委員会が行なった。

ここでは北野遺跡発掘調査のうち当研究会が担当した東半部についてまとめた。全体の報告書は追って滋賀県教育委員会から刊行される予定である。

調査にあたっては、滋賀県教育委員会、浅井町教育委員会、北野老人会をはじめとする地元の方々、北口考古学会の御援助、御協力をいただいた。記して謝したい。　（納谷）

Ⅱ　位置と環境

(1)　位置と地理的環境

北野遺跡は滋賀県東浅井郡浅井町大字北野に所在する（第１、２図）。滋賀県は旧来の近江国の領域をそのまま継承しているが、琵琶湖を中心に四方を山に囲まれた地形により、地理的にも歴史的にも単一の地域を形成している。東浅井郡は琵琶湖の北に位置し、伊香郡などとともに湖北と呼ばれる地方である。当地方は県境となる分水嶺から派生する山地と湖岸に展開する沖積平野からなる。この沖積平野は坂田郡より西流する姉川とこれに北から合流する高時川の二河川を中心にしてひろがっている。

北野遺跡は姉川の一支流である田川の上流に位置し、平野部が山にはいり込んだ谷の標高約１３０ｍにある。この谷は標高１８０ｍ付近を谷口として高度を下げるとともに扇形に広がり、標

高１０５ｍ前後まで緩やかな傾斜面（勾配約30／1000）をなしている（第３図）。このうち標高約１２０ｍより上では傾斜がやや急で等高線も扇状に中央が張り出すのに対し、これより下は比較的緩やかになる。そして、田川より南では谷の東側の尾根が西に屈折してのびるため、わずかに高くなっている。地形は標高約１２０ｍより上は扇状地と考えられ、高畑・野田などの集落はその裾部にあたる。このように田川の上流は北から南に傾く緩斜面をなすが、東西を山に挾まれ、かつ、南は東から突き出た丘陵尾根に囲まれた盆地となっており、地形的にひとつの小地域を形成している。古代の田根郷、中世の田根荘は、まさにこの地に相当し、明治２２年から昭和２９年に至るまで施行されていた行政区画上の田根村もほぼこれにあたる①。

第１図　北野遺跡の位置

現在、この盆地内には谷頭の谷口、東側山裾の竜安寺・小室・上野・木尾、西側山裾の池奥・瓜生、中央の北野・高畑・力丸・野田といった計１２の集落が点在する。これらは扇状地と山裾に集中し、扇状地下方は全く集落の分布をみない。集落周辺と田川沿いの微高地のほかは水田利用が主である。この地区は西池をはじめとした溜池が多いことで特異である。盆地中央を流れる田川が奥行きのごく浅い谷に源を発しているため、集水面積が狭いこと、扇状地の地形から河川は伏流水となりやすいことにより河川の流水量が少ないことに起因すると考えられる。当地区の歴史を考えるとき、こうした扇状地という地形を充分認識し、これが開発に大きく作用したことを考えねばならない。

(2)　考古学的環境（第２図）

当地区の考古学的環境は、縄文・弥生時代についてはほとんどその実態がわかっていない。わずかに高畑・瓜生から出土したという大型蛤刃石斧がその痕跡をとどめているにすぎない②。古墳時代にはいると、盆地の周囲の丘陵を中心に後期古墳が点在するようになる。東側には古墳が少なく、竜安寺と小室に孝徳の宮古墳・宮山古墳がそれぞれ単独で分布するのみである。西側には１０数基の群集墳である瓜生古墳群・田川古墳群がある。南側の丘陵から平地にかけては、大人塚古墳群（４基）・木尾古墳群（数基）・城山古墳群（１０基）が分布する。一方、この丘陵の西側の沖積地には、埴輪をもち周涅をめぐらした径６０ｍの岡の腰古墳③をはじめとして、狐塚古墳・亀塚古墳などの単独墳と弓月野古墳群（６基）・平塚古墳群④（７基）の小規模な群集墳があ

る。浅井中学校遺跡も遺物からみて、後期古墳と考えてよいであろう。このように当地区では、前・中期の古墳の存在は知られておらず、後期に至ってはじめて古墳の成立をみるのであるが、岡の腰古墳以外はいずれも小規模で、群集規模も小さい傾向にある。なお木尾の内野神古窯址は6世紀末から7世紀初頭の短期間、操業していたようである。⑤

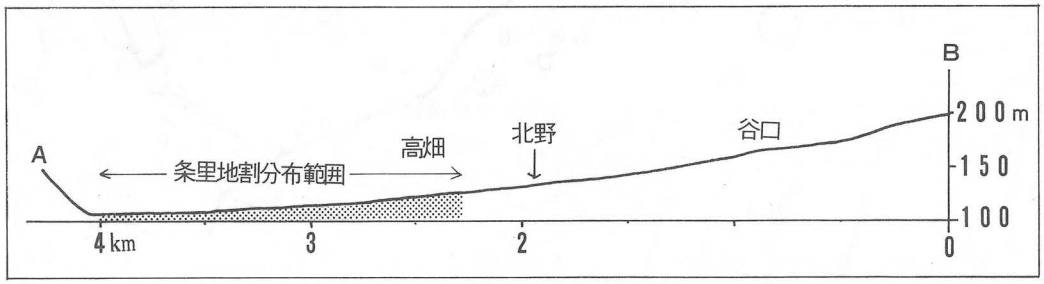
第2図　北野遺跡周辺の遺跡分布図

歴史時代では白鳳期の鬼瓦が出土した八島廃寺⑥がある。鬼瓦の出土は滋賀県内では珍しく、全国的にみてもごく少ない。当廃寺は丘陵裾部に近い平地に立地しており、瓦窯もこれに近接した丘陵に存在する。飛鳥・白鳳期の寺院は古代の要路に面した丘陵・台地端部に立地する場合が多い⑦が、当廃寺も全く同様である。いま国道３６５号線として美濃の不破関から山越えして北西方向に走る道路に八島廃寺は面している。壬申の乱の際、天武方の一手は不破関より湖西の高島三尾城を攻めており⑧、東海道から北陸道へぬける近道であるこの経路を北上したと推定される。白鳳期すでにこの地が要路にあたっていたこと、寺院を造営しうる在地豪族が存在したことは注目されよう。

(3)　古代の田根郷

『和名抄』によれば、浅井郡は岡本・田根・湯次・大井・川道・丁野・綿部・速水・益田・新居・都宇・朝日・塩津の１３郷からなり、大郡であった⑨。明治に編成された田根村は、須賀谷と田川を除いて中世の田根荘を継承しており、古代における田根郷もほぼこれにあたるものと考えられる。田根の地名はすでに天武紀元年八月条に「浅井田根」とみえており⑩、『和名抄』を２世紀以上遡る時代から存在したことがわかる。田根郷の周辺では湯次郷と丁野郷がある。湯次郷は浅井町の大字湯次の位置から、田川と姉川に挟まれた地区と考えられ、丁野郷は湖北町の大字丁野の存在から小谷山の西麓の地区にあたるであろう。湯次郷は明治の湯次村（はじめは湯田村）に継承されていると推定されるが、これには山ノ前・尊勝寺・平塚・八島・西野・尊野・内保などが含まれる。古代における田根郷と湯次郷の境界を推定した場合、のちの湯次村と田根村のそれがほぼこれに相当すると考えられる。さきの東海道から北陸道に向かう交通路沿いに岡の腰古墳をはじめとした古墳が多く点在することは、この周辺が墓域であり、さほど水田開発が進展しておらず、田根郷と湯次郷を分離していたことを示すのではないだろうか。内保西方の姉川北岸沿いは福良の森と呼ばれ、現在でもそのおもかげを残す未墾地であるが、八島・平塚・尊勝寺などは田川の河床よりかなり高く大規模な人工灌漑を必要とするところであるため、水田開発が遅れていたと思われる。

ところで近江は条里地割が良好に遺存する地域としてよく知られているが、東浅井郡もその例外ではない。北から約１４度西に偏った方位を示す条里地割は平野部のほぼ全域に認められ、田



第３図　地形断面図（図２Ａ－Ｂ）高さ：長さ＝２：５

根の盆地にも及んでいる。1/25000の地図上で辿れる条里地割は第４図のごとくであり、標高１２０ｍ付近まで看取することができる。これより高い扇状地上は明確でない。傾斜もやや急で、小さな起伏に富む扇状地は平坦地を造成するのが困難であり、水田に適さない土地条件からも開発は遅れ、条里が施行されなかったと思われる[11]。復元された条里は木尾の西で６条・７条の１里となり、西へ２里・３里となってゆく[12]。ここで注目されるのは、田川が条里地割に符合していることである。すなわち、６条２里の西から２町の界線上を南流し、６条と７条の界線上でこれに沿うように直角に西へ屈折して西流する。河川流路が条里に符合することは、流路が条里制に規制されたもので、人工的に設定されたことを示す。条里地割が施行された後は、灌漑・排水などの水利施設もこれに適応するような方法がとられなければならない。田川の場合は少ない河川の

第４図　条里地割分布図（１～３里内のみ１町方格を記入）

水を有効に利用するために、盆地の中央に流路を導くことにより、水田に引水できる造作がなされている。条里地割に合致する６条２里中の流路では、これに沿って自然堤防状に高くなっており、川の両側に水を導入するのに都合のよい構造となっている。また盆地の東側を流れる小河川は地元で堀川と称され、小堀遠州が造成したという伝承を残しているが、北野の天満宮付近から水田面より２ｍ程度高い堤をもった天井川であることからも、扇状地の伏流水を利用した人工灌漑用水路であると考えられる。盆地の東辺を中心に灌漑する設備であろう。

以上のように、田根郷の盆地南半部は条里地割が明瞭に遺存し、水田とこれにかかわる諸施設が一定の企画性のもとに設定されているが、この地割の施行年代については、通説のように大化以後、少なくとも奈良時代に求められるかどうかは、近年の条里地割の調査例からみても即断できない。例えば昭和５４年に発掘がされた高島郡高島町鴨遺跡では、現条里の下にこれと異なる方位を示す埋没した地割が検出され、埋没条里に伴う遺物の年代から、現条里が平安時代後半以前には遡りえないことが明らかにされた。[13] 条里地割から奈良時代の開発を語ることはなお慎重に検討されるべきであろう。

一方、田根郷内は溜池が多く分布しており、１０数を数える。近年でも旱魃に見舞われる地域であり、古くから灌漑用水の確保のために溜池が築造されたのである。扇状地上にそれらのほとんどが分布することは、これらが水量の少ない河川を補い、地下水位の低い土地条件を克服すべく築造されたことを示唆する。高畑の西方の谷をせきとめた西池は特に大きく６町ばかりの広さをもつ。この池は灌漑に利用できる川のない盆地西辺を潤すのに大きな役割を果たす。溜池の築造年代も決定できる資料がないが、谷をせきとめ常時水を貯えるためには強固な堤を必要とするものであり、この築堤技術は６世紀末頃日本に移入されたといわれている。[14] 古墳時代には普及しておらず、当地区においても扇状地上の開発が進展したのちの築造にかかるものであろう。

水田開発の視点から田根郷を概観すれば、このように北野を中心とした扇状地上と、扇裾より低い部分とでは、土地条件に大きな相違があり、ために開発の時期や方法も異なるのである。早くから水田開発が進展したのは、南半部の低い部分であり、のちに北半部の扇状地が開発され、これに伴って溜池が築かれていったものと考えてよいだろう。古墳の分布が南半部にほとんど偏ることは、こうした開発の進行過程を暗示するものである。今回の調査でみられた北野の水田は、扇状地特有の砂礫土上に厚い粘質土の基盤（心土）をしつらえることによって支えられた扇状地の水田構造を象徴するものであり、開発に多大な困難を伴なったことを推測させるに充分である。田根の古代における開発の歴史はいまだ明らかではないが、こうした地理的条件を認識して、今後究明されるべきであろう。中世に至り、古代田根郷は田根荘として延暦寺の荘園に編入されるけれども、その中心は盆地南半部の生産性の高い水田にあったのではないだろうか。　（坂井）

＜註＞

① 『角川地名大辞典』２５滋賀県の「田根」の項。以下地誌についてはこれを参考にした。

② 『滋賀県遺跡目録』（滋賀県教育委員会　昭和４０年）

以下、特に参考文献を提示しない遺跡はこれによった。

③　山崎秀二「浅井町岡の腰古墳、浄土寺跡調査報告」（『ほ場整備事業関係遺跡調査報告』滋賀県教育委員会　昭和５０年）

④　山崎前掲書付載「平塚古墳群調査報告」

⑤　当研究会採集資料による。

⑥　石田茂作・稲垣晋也『飛鳥白鳳の古瓦』（東京美術　昭和４５年）

⑦　大津京周辺の白鳳寺院については松浦俊和氏が検討を加えておられる（「古道と遺跡 ── 近江国滋賀郡の白鳳寺院分布から ── 」『史想』１８　昭和５４年）。

⑧　『日本書紀』天武天皇元年７月２２日条

⑨　現在、伊香郡の所管になっている西浅井町は、東浅井郡に対応する名称をもつこと、塩津が和名抄で浅井郡に編入されていることから浅井郡所管であったと考えられる。

⑩　「斬右大臣中臣連金於浅井田根」
天武方はこの一ケ月前に大津宮周辺で中臣連金を捕えているが、何故田根で処刑したかはわからない。令制下では処刑が市で執行された（獄令決大辟条）ことを勘案すれば、田根が衆目に触れる交通路に位置していたことと関連して興味深い。

⑪　谷岡武雄『平野の開発』（古今書院　昭和３９年）
金田章裕「東大寺領荘園の景観と開発」（『古代の地方史』4　朝倉書店　昭和５３年）

⑫　条里の復元は『角川地名大辞典』２５の「資料編　滋賀県条里遺構分布図」によった。

⑬　丸山竜平氏御教示。

⑭　野上丈助「河内における地溝開発についての覚書」（『羽曳野史』3）

Ⅲ　調査の経過

調査は昭和５４年７月１０日より１ケ月間の予定で開始され、予定通り８月１２日の終了に至った。以下、調査日誌抄をもって調査の経過とする。

調査日誌抄

昭和54年７月10日　晴れ

夕刻より調査関係者が木尾の宿舎に集合し、今回の発掘調査についての最終的な打ち合わせを行なう。

７月11日　曇り一時雨

午前９時、調査器材を現地に搬入。ユンボの到着とともに作業を開始し、Ｔ１（トレンチ№１。以下同じ）～Ｔ７まで順次掘り進む（第５図）。Ｔ１及びＴ６で多数の遺物検出。

７月12日　雨時々曇り

発掘調査は中止し、Ｔ１～Ｔ６の南壁土層図をとる（第６図）。

７月13日　曇り

Ｔ８～Ｔ１２調査。Ｔ１２にて住居址と思われる遺構を検出。

第5図　調査風景

7月14日　　曇り一時雨

Ｔ１２を北へ向って拡張したが遺構は確認されなかった。関学ＯＢの坂井氏来援。

7月16日　　曇り

Ｔ１３～Ｔ１８を設定。遺構、遺物とも確認されず。

7月17日　　曇り時々雨

Ｔ１９～Ｔ２９を設定（Ｔ１２・Ｔ２１をＡ地区とする。）。Ｔ２１でピット群を確認。

7月18日　　晴れ

Ｔ２１・Ｔ２９拡張。Ｔ３０～Ｔ３３設定。Ｔ２１拡張部にピット、Ｔ３２で鉱滓１点と土師器片を検出。

7月19日　　曇り時々晴れ

Ｔ３２・Ｔ３３拡張。ピット群を検出。Ｔ２２～Ｔ２９を清掃し写真撮影。

7月20日　　曇り時々晴れ

Ｔ３２・Ｔ３３をさらに拡張し多数のピットを検出。Ｔ３４～Ｔ３６を設定し土層確認と写真撮影。

7月21日　　曇り時々晴れ

Ｔ３１～Ｔ３３のピットを掘り下げる。Ｔ３２・Ｔ３３の拡張部を各々Ｔ３８・Ｔ３７とする。

7月23日　　曇り後晴れ

Ｔ３２・Ｔ３３・Ｔ３８のピットを掘る。Ｔ３１を拡張したところ方形土壙が確認され、青白磁、土師質皿など出土。土壙墓と思われる。

7月24日　　曇りのち晴

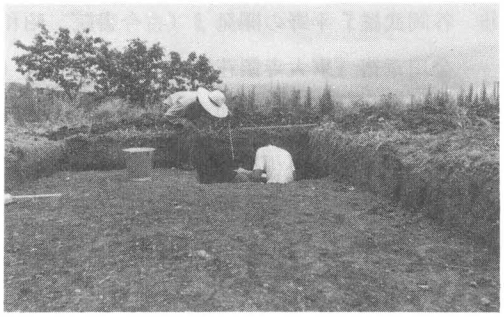
Ｔ３１拡張、Ｔ３９設定（以下Ｔ３０～Ｔ３３及びＴ３７～Ｔ４０をＢ地区と称する。）、Ｂ地区を精査し写真撮影を行なう。Ｔ３９の土坑より鉄滓出土。

7月25日　　晴れ

土壙墓の調査及び写真撮影終了。Ｂ地区精査。Ｔ３０の拡張をし新たにＴ４０設定。

7月26日　　晴れ

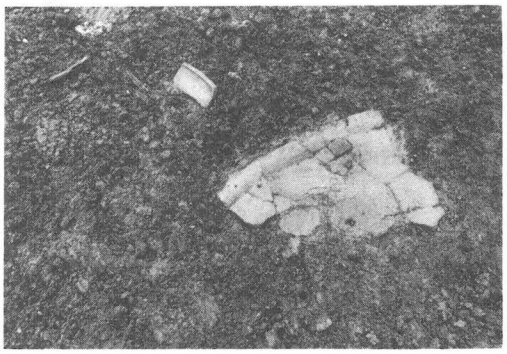
Ｔ４１～Ｔ４４を設定。Ｔ３２～Ｔ３８間セクション除去。



第6図　調査風景

7月27日　　晴れ

Ｔ１～Ｔ２間を掘開しＴ４５とする。長甕・大型鉢出土（第７図）。Ｔ３０～Ｔ３７間及びＴ３３～Ｔ３７間セクション除去。Ｔ２１西壁土層図をとる。



第7図　T45 遺物出土状況

第8図　北野遺跡　トレンチ配置図

7月28日　曇りのち雨

Ｔ１２拡張。Ｂ地区精査及び北壁土層の実測。午後より土器洗浄。

7月30日　晴れ

Ｔ２１拡張。Ａ・Ｂ地区精査。Ｂ地区南北セクション除去。Ｂ地区西半の平面略測図をとる。

7月31日　晴れ

Ａ・Ｂ地区精査。Ｂ地区東西中央セクション除去作業開始。調査参加者全員で記念撮影。

8月1日　晴れ

東西中央セクション除去。トレンチ配置図の平板実測のためトラバースを組む。西宮市教育委員会の古川氏来援。

8月2日　晴れ

Ｔ１２を清掃し写真撮影。Ｔ２１拡張部の精査。昨日にひき続きトラバースを組む。午後より土器洗浄。遺跡の全景写真を撮る。

8月3日　晴れ

Ｔ２１の精査と写真撮影。Ｂ地区の住居址を検討する。遺物洗浄と整理。

8月4日　晴れ

Ａ地区を清掃し終了写真を撮る。Ｂ地区の清掃。トレンチ配置図の作成を始める。北口考古学会の岡野氏・北山氏・坂井氏来援。

8月6日　雨のち曇り

Ｔ２１西壁土層図をとる。トレンチ配置図の作成完了。浅井町役場にて現地説明会の打ち合わせ。

8月8日　晴れ

Ｂ地区を清掃し終了写真撮影。Ｔ１２遺構平面実測終了後ピットを完掘し遺構のレベルをとる。

8月9日　晴れ

Ｔ２１の遺構のレベルをとる。Ｂ地区西半の遺構平面実測を開始する。午後８時より北野公会堂において現地説明会を行なう。

8月10日　晴れ

Ｂ地区西半の平面実測終了。レベルをとる。ひき続きＢ地区東半の遺構平面実測を行なう（第９図）。

第９図　Ｂ地区実測風景

8月11日　晴れ

Ｂ地区東半の平面実測終了。レベルをとる。

8月12日　晴れ

遺構の最終的な確認。調査器材と図面の整理をもって現地での調査を終了する。

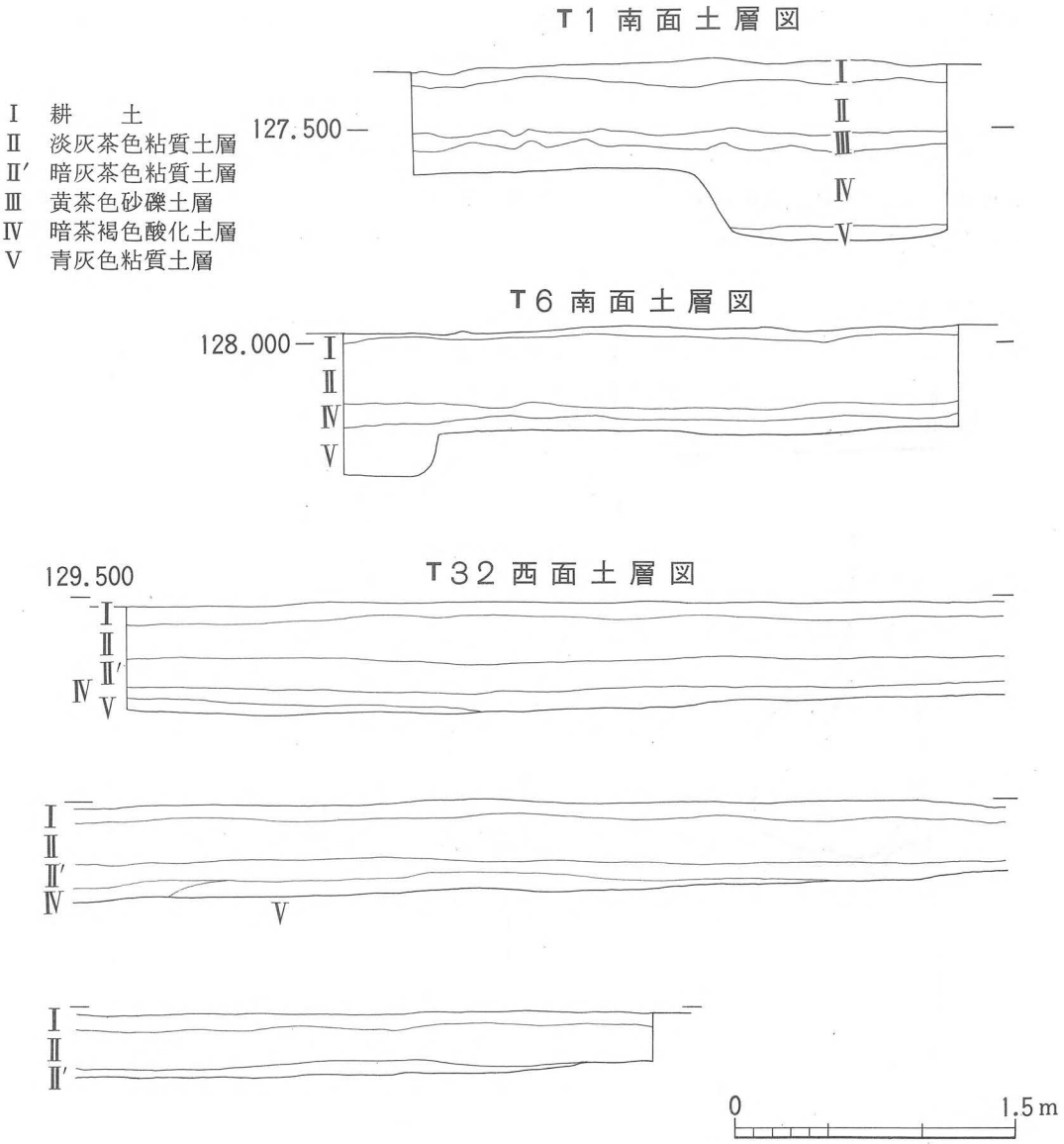
（中村）

Ⅳ　調査の結果

1　層序　（第１０図）

調査地区はすべて水田である。ここでは発掘した４５箇所のトレンチのうち最も典型的な堆積状態を示すＴ１南壁と遺物出土量の多いＴ６南壁・Ｔ３２西壁の土層をみていくこととする。

基本層序は、Ⅰ黒灰色粘質土層（耕土）、Ⅱ淡灰茶色粘質土層（心土）、Ⅲ黄茶色砂礫土層、



第10図　Ｔ１，Ｔ６，Ｔ32 土層図

Ⅳ暗茶褐色酸化粘質土層、Ⅴ青灰色粘質土層の５層である。

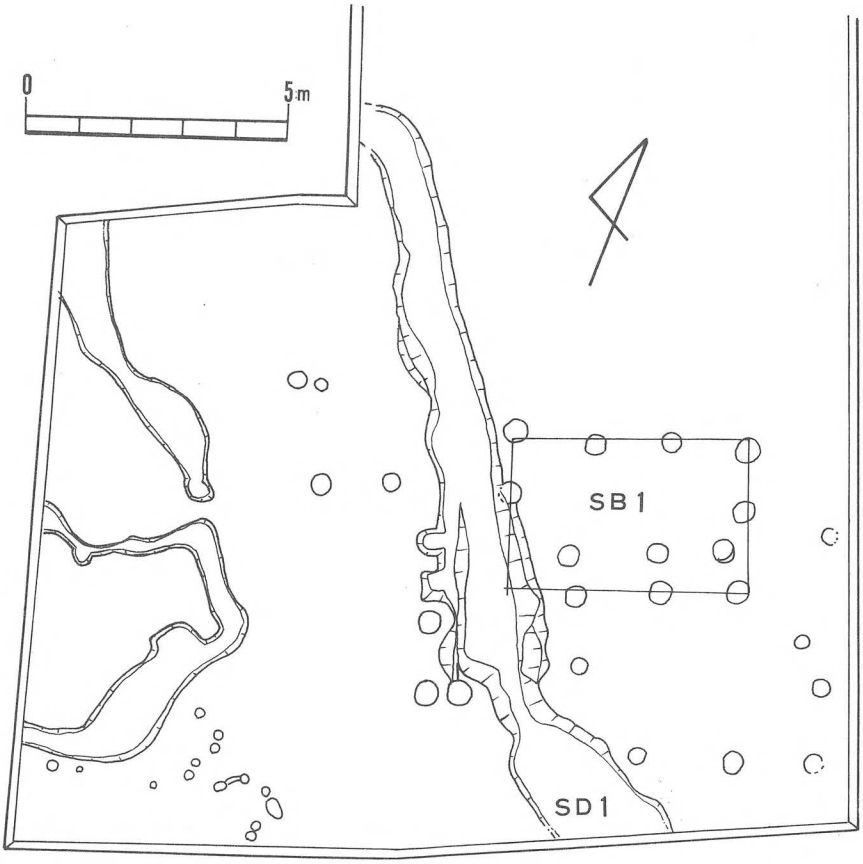
第Ⅰ層の耕土は全体に薄く約１０㎝の厚さである。第Ⅱ層の心土は淡灰茶色を呈する粘質土層で約３０㎝の厚さである。Ｔ３２では暗灰茶色を呈する部分も確認できた（第Ⅱ′層）。第Ⅲ層は黄茶色の砂礫土層である。この層はＴ１南壁では約１０㎝の厚さで確認できるが、北に進むに従いこの層は希薄になり、Ｔ３では第Ⅲ層は確認されない。第Ⅳ層は酸化され暗茶褐色を呈し、第Ⅴ層は滞水のために還元され、青灰色となる。遺物包含層はⅢ層・Ⅳ層・Ⅴ層である。（中野）

２　遺　構

本調査において検出した遺構は、掘立柱建物址（ＳＢ１～８）、溝（ＳＤ１～４）、土壙（ＳＫ１～４）、土壙墓（ＳＫ５）である。以下地区及び遺構別に述べる。

⑴　Ａ地区（第１１・１２図・図版３）

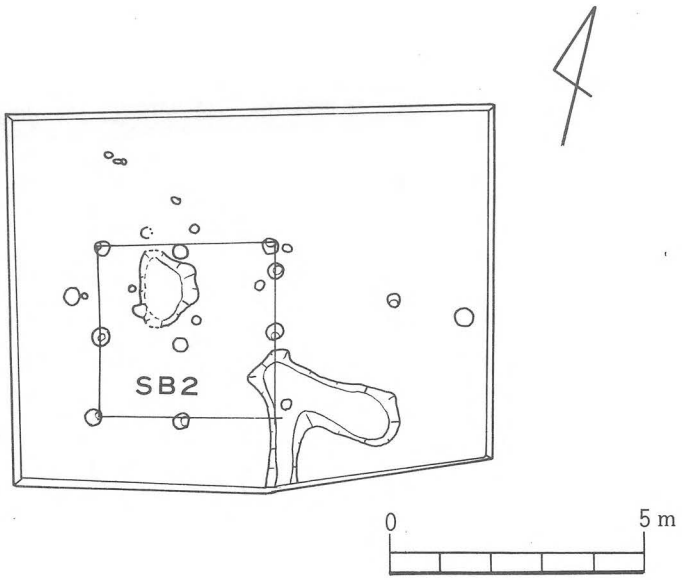
Ａ地区では掘立柱建物遺構２棟（ＳＢ１・２）と溝（ＳＤ１）を確認した。しかし調査区域が限定されていて２つの掘立柱建物遺構の周辺を全面的に発掘していないこと、２つの建物間にかな



第11図　Ｔ12 遺構平面図

りの距離があること、遺物がほとんど検出されていないことなどから建物の時期等の関係は不明である。

ＳＢ１（第１３図）　Ｔ１２の南部に位置し、西端部をＳＤ１に切り込まれているために全体の規模は明らかではないが、３間×２間の住居址と考えられる。柱穴はほぼ円形で、径約４０㎝、深さ１６～２０㎝である。柱穴の埋土は黒灰色粘質土で、微量の土師器が検出されたが、建物の時期を決めるにはいたらなかった。



第12図　Ｔ21 遺構平面図

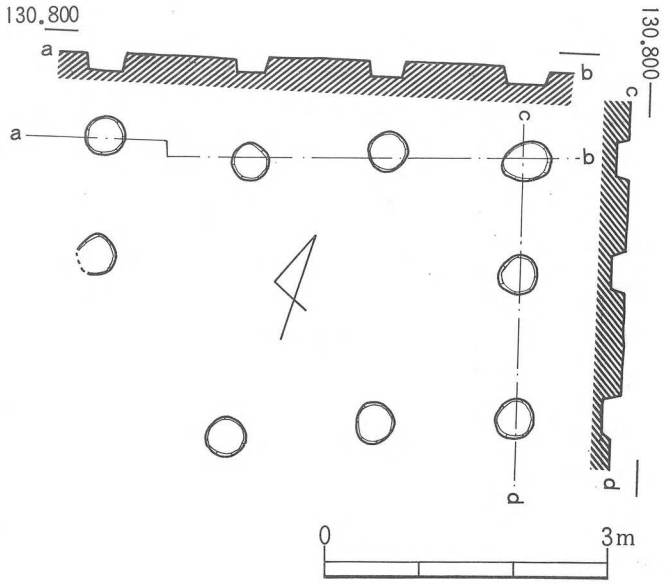
ＳＢ２（第１４図）　Ｔ２１の西部に位置し、束柱の存在から２間×２間の倉庫址と考えることができる。柱穴はほぼ円形で、径３０～３６㎝、深さ１６～２４㎝で、黒灰色粘質土が堆積し、土師器片を少量包含していた。

ＳＤ１　Ｔ１２を北西から南東へ伸びる幅９０～２００㎝、深さ約３５㎝のＵ字溝で約１５ｍにわたって確認することができた。溝内には赤褐色砂礫土が堆積していたが、遺物は全く検出されなかった。この溝はＳＢ１の西端部の柱穴を切り込んでいるため、ＳＢ１の廃絶後につくられたものと考えられる。（納谷）

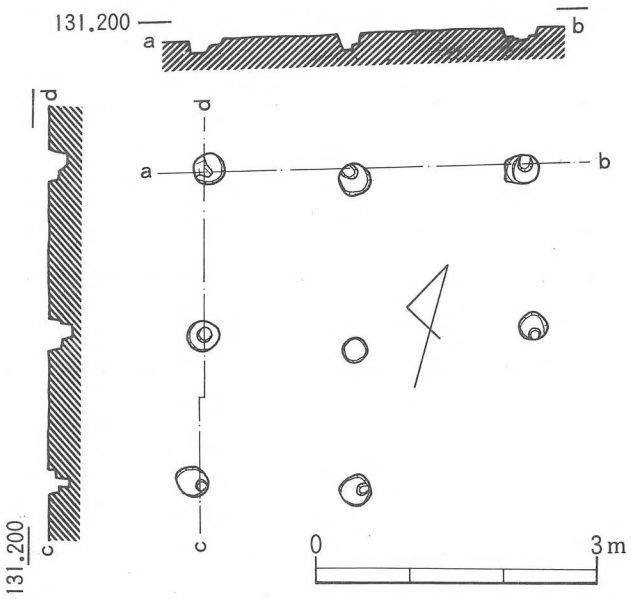
⑵　Ｂ地区（第１５図・図版４・５・６・７・８・９・１０）

Ｂ地区では広汎な範囲にわたり調査を行ない、掘立柱建物遺構６棟（ＳＢ３～８）、溝（ＳＤ２～４）、土壙（ＳＫ１～４）、土壙墓（ＳＫ５）を検出した。

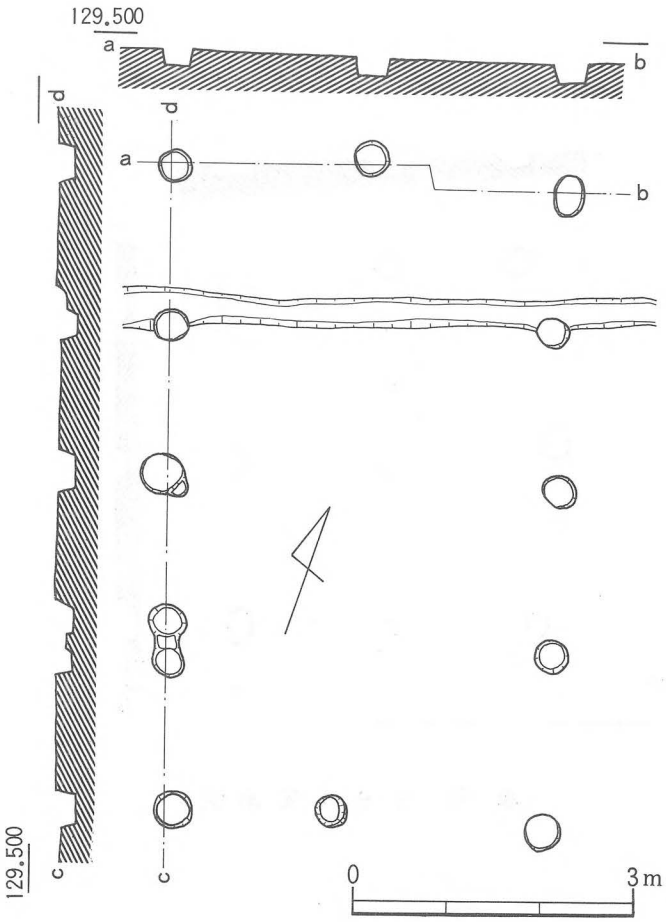
ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ５（第１６・１７・１８図）　この３棟は建物の主軸の方向からみて同時に併立していたものと考えられる。ＳＢ３はその規模から考えて３棟の中心建物（母屋）と思われる。ＳＢ４・ＳＢ５は柱穴の間隔が均一でなく平面ではややいびつな感じを与え、ともに束柱が存在することから倉庫址と考えられる。これら３棟の柱穴はほぼ円形で、径約４０㎝、深さ１５～２０㎝、柱穴内には黒灰色粘質土が堆積していた。遺物はＳＢ５東半部の２つのピットから少量の土師器片を検出したのみであり、３棟の時期の決め手となる資料はないが周囲の青灰色粘質土層から出土する須恵器から考えて、藤原京の時代を中心とした時期の建物であると考えられよう。



第13図　ＳＢ１実測図



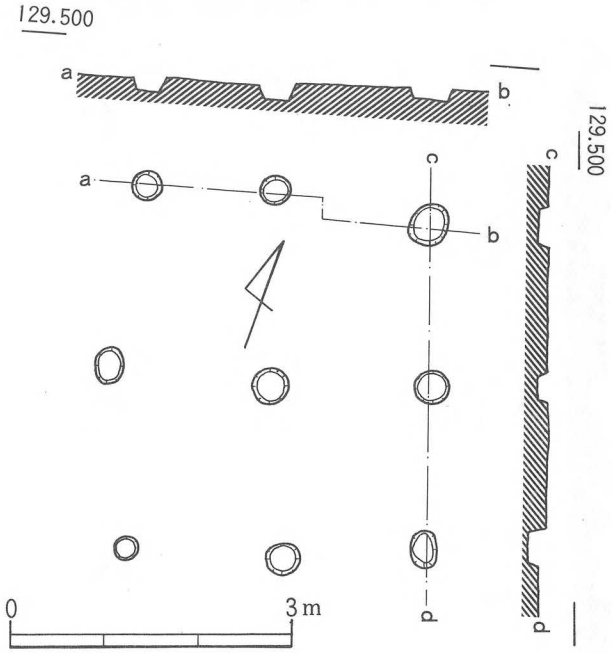
第14図　ＳＢ２実測図



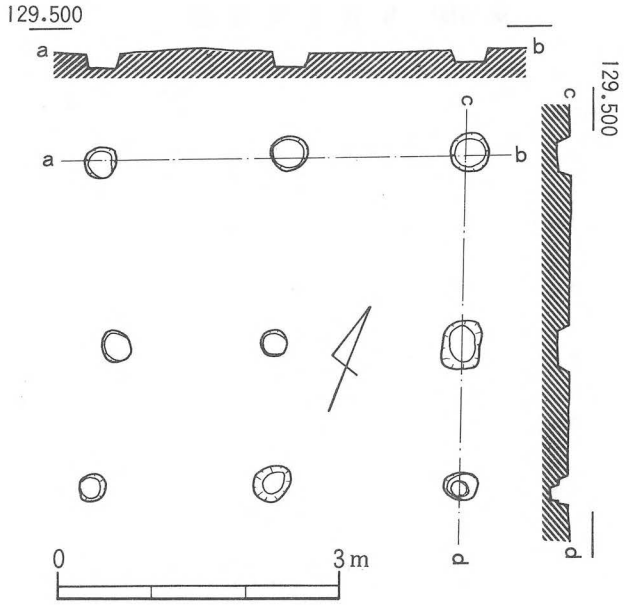
第16図　ＳＢ３実測図

番号	種別	桁行 間（柱間）	梁行 間（柱間）	方位	関連建物	備考
ＳＢ 1	屋	3間　4.8 m（1.6 m）	2間　3.0 m（1.5 m）	南北棟 N73°E		溝によって切られている。
ＳＢ 2	倉	2間　3.4 m（1.7 m）	2間　3.4 m（1.7 m）	南北棟 N77°E		柱の痕跡がある。
ＳＢ 3	屋	4間　6.8 m（1.7 m）	2間　4.2 m（2.1 m）	南北棟 N17°W	4・5	
ＳＢ 4	倉	2間　3.7 m（1.85 m）	2間　3.3 m（1.65 m）	南北棟 N29°W		梁間に差がある。 束柱が存在する。
ＳＢ 5	倉	2間　4.0 m（2.0 m）	2間　3.6 m（1.8 m）	南北棟 N20°W		東側の柱穴から土師器片が出土。 梁間に差がある。束柱が存在する。
ＳＢ 6	倉？	4間　5.6 m（1.4 m）	1間　1.7 m（1.7 m）	南北棟 N18°W		
ＳＢ 7	倉	1間　2.6 m（2.6 m）	1間　2.6 m（2.6 m）	南北棟 N 9°E		
ＳＢ 8	屋	3間　6.3 m（2.1 m）	2間　3.3 m（1.65 m）	東西棟 N76°E		西側の梁行・中央の柱穴が検出されず、 柱穴から土師質皿の小片が出土。

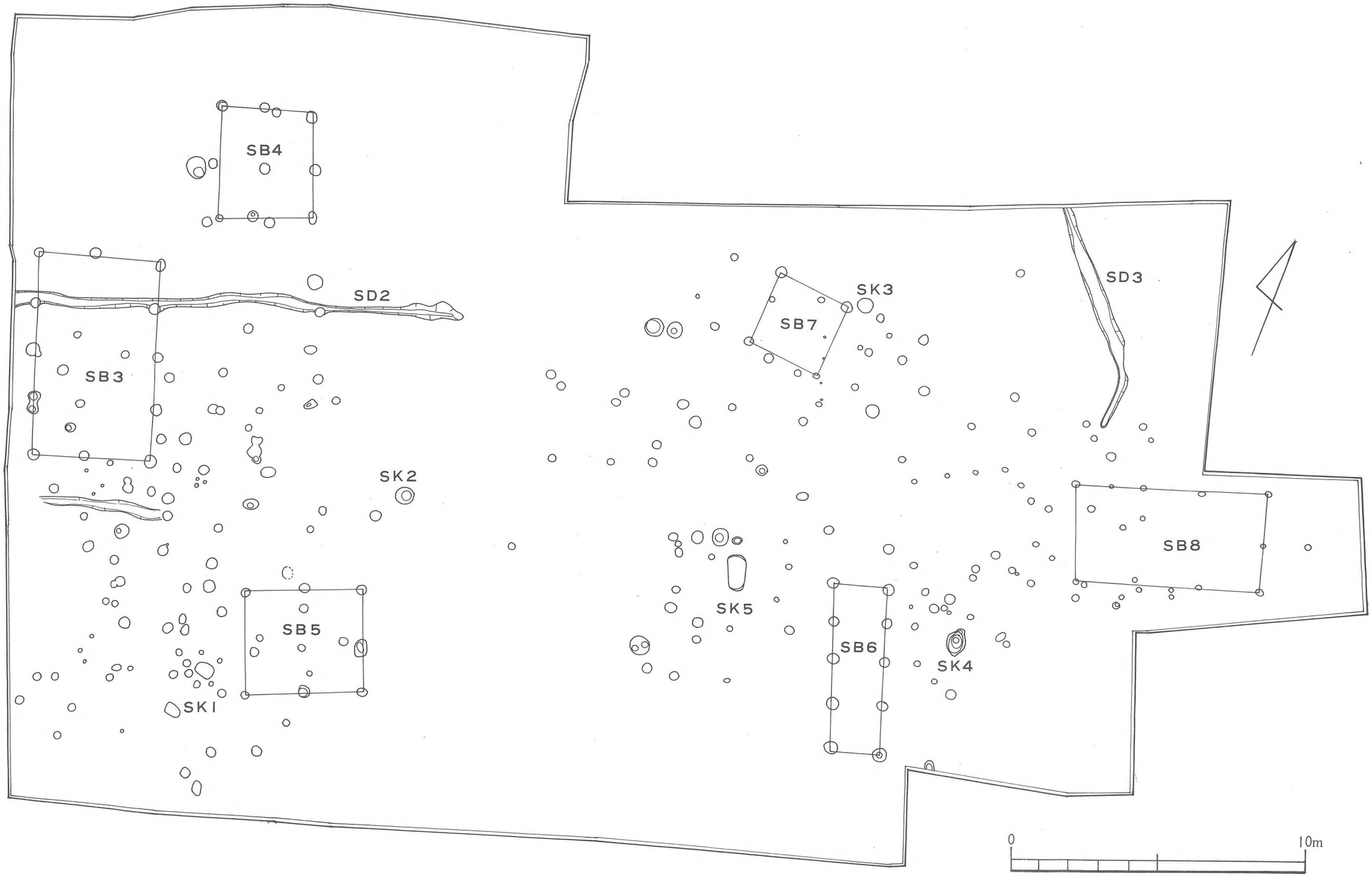
第１表　建物跡一覧



第17図　ＳＢ４実測図



第18図　ＳＢ５実測図

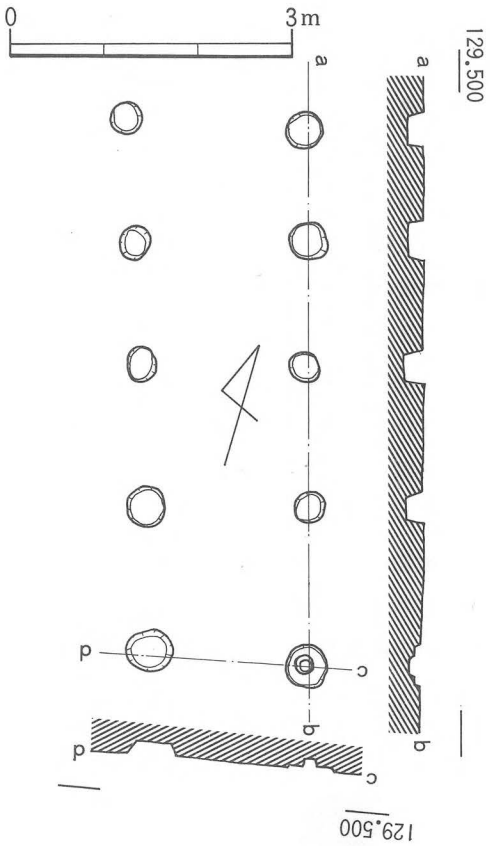


第15図　B地区遺構平面図

ＳＢ６（第１９図）　Ｂ地区のほぼ中央に位置する。４間×１間という特異なプランをもち、規模や平面形からみて住居とするのは不適当で、倉庫・納屋等を思わせる。柱穴はほぼ円形で径約４０㎝、深さ５～２０㎝、柱穴内には黒灰色粘質土が堆積していた。遺物は検出できなかったが、主軸の方向や柱穴の大きさなどから考えて、ＳＢ３～５と同時代の建物と思われる。

ＳＢ７　Ｂ地区の中央に位置し、１間×１間であることから倉庫と思われる。柱穴はほぼ円形で径約２０㎝、柱穴内には黒灰色粘質土が堆積していた。遺物は検出されなかったため時期は不明である。

ＳＢ８　Ｂ地区の東端に位置し、３間×２間で束柱が存在しないことから住居と思われる。柱穴はほぼ円形で径２０～３０㎝、深さ１０～１５㎝、柱穴内には黒灰色粘質土が堆積していた。遺物は土師質皿の細片を検出したにとどまった。時期は柱穴内から出土した土師質皿から鎌倉時代に比定できる。



第19図　ＳＢ６実測図

ＳＤ２　Ｂ地区の西半部（Ｔ３３、Ｔ３７）を西から東へのびる幅約３０㎝、深さ１０㎝のＵ字溝で約１５ｍにわたって確認された。溝内の層位は単層で黒灰色粘質土が堆積していたが遺物は包含していなかった。ＳＢ３の柱穴を切り込んでいるため、ＳＢ３の廃絶後につくられたものと考えられよう。

ＳＤ３　Ｂ地区の東半部の北（Ｔ４０）からＳＢ８にのびる幅２５～５０㎝、深さ５～１０㎝のＵ字溝で約８ｍにわたって検出した。溝内の層位は単層で黒灰色粘質土が堆積していたが遺物の包含はみられない。

ＳＫ１　ＳＢ５の西１ｍに位置する。東西６５㎝、南北５５㎝、深さ７０㎝を測り、平面形は楕円形を呈する。土壙内の埋土は２層に分かれ、上層には黒灰色粘質土、下層には灰色砂質土が堆積しており、土師器片を包含していた。

ＳＫ２　ＳＢ５の北東部に位置する。径５５㎝、深さ２５㎝を測り、平面形はほぼ円形を呈する。土壙内には黒灰色粘質土が単層で堆積し、須恵器蓋（遺物番号６）、土師器の細片を包含していた。

ＳＫ３　ＳＢ７の東に位置する。径５５㎝、深さ６０㎝を測り、平面形はほぼ円形を呈する。土壙内の埋土は２層に分かれ、上層には黒灰色粘質土、下層には灰色粘質土が堆積しており上層

からは土師質皿の細片、鉄滓、下層からは土師器片数点を検出した。

ＳＫ４　ＳＢ６の東２ｍに位置する。東西７０㎝、南北１００㎝を測り、平面形は楕円形を呈する。土壙内には黒灰色粘質土が単層で堆積し、土師器片、須恵器片を包含していた。（木谷）

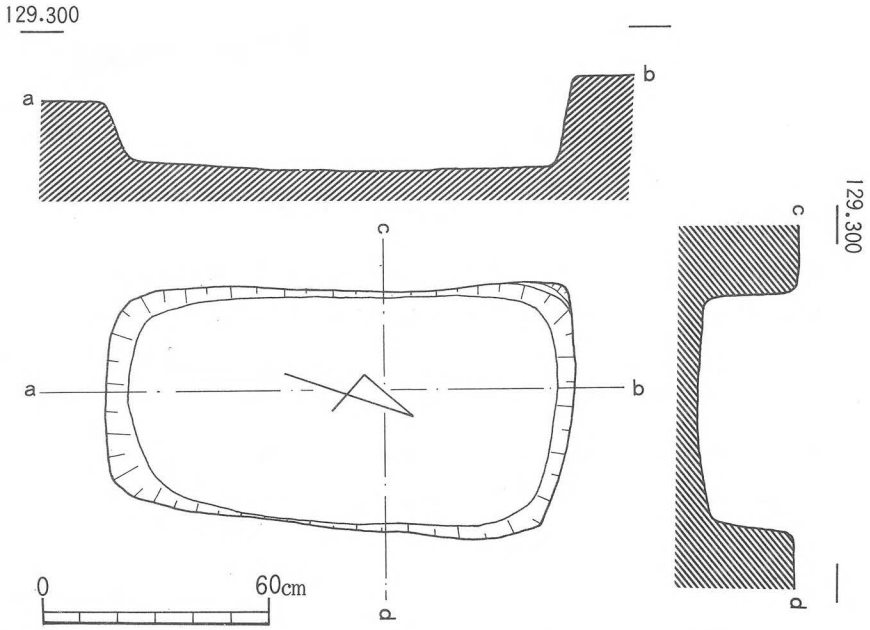
ＳＫ５（土壙墓・第２０図）　本土壙墓はＢ地区Ｔ３１の南半部にあり、掘立柱遺構ＳＢ４の西側1.5ｍ、ＳＢ８の西方１５ｍに位置する。

遺構の主軸はＮ－１９°－Ｗをとり、規模は南北で長さ１２０㎝、東西で長さ５５㎝を測り、墓壙の形状は長方形であるが、短辺は北辺が６０㎝に対し南辺は５０㎝のやや台形状を呈する。深さは約２０㎝で掘り方はほぼ垂直におちるが南辺・北辺は緩やかな傾斜面をもつ。

遺構内の埋土は暗茶褐色の単一層である。

検出された遺物は土師質皿、羽釜、須恵器、山茶椀、中国製磁器である。その出土状況は遺構面からほぼ一様に検出され、レベル別にみた場合、上層（０㎝～５㎝）、中層（５㎝～１５㎝）、下層（１５㎝～２０㎝）に区分すると、上・下層に濃密であるが、中層は希薄である。（第２表）

出土遺物は中国製磁器と山茶椀を除きすべて小破片であり、完形のものは認められなかった。故意に打ち砕かれた可能性も考えられる。また、出土した遺物のなかに６世紀末～７世紀初頭の須恵器の小破片があるが、墓壙を掘り込んだ際に混入した可能性がある。　（三谷）



第20図　ＳＫ５（土壙墓）実測図

３　小　結

掘立柱建物遺構はＡ地区・Ｂ地区あわせて８棟検出された。８棟は７世紀末頃から８世紀初頭を中心とした時代の建物（ＳＢ３・４・５・６）、平安時代末期～鎌倉時代の建物（ＳＢ８）、時期不明の建物（ＳＢ１・２・７）の３つに分けることができる。このうち、ＳＢ３・４・５は主軸の方向が一致し、隣接して構築されているので１つのまとまりとして把握することができる。

層位 遺物	上層		中層		下層		セクション内	
	0～5㎝		5～15㎝		15～20㎝			
	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数
土師質皿	63	20	21	5	52	15	36	12
羽釜	12	1	3	0	11	0	12	1
須恵器	3	1	1	1	2	1	4	2
山茶椀	3	1	1	0	0	0	0	0
青白磁	2	1	0	0	0	0	0	0

※　個体数は口縁部などから想定した。

第2表　土壙墓（ＳＫ５）出土遺物表

遺構の特徴は藤原京の時代を中心とした時期の建物に比べて、平安末～鎌倉時代の建物の柱穴が小さく、浅いことである。これは掘立柱構築の技術が進んだことを示すものと考えられよう。

Ｂ地区で検出した５ケ所の土壙のうち、ＳＫ１・２はいずれも比較的整った形をしており人為的なものと思われるが、出土した遺物は土壙内に堆積した土砂に包含されたもので、直接その性格を示す資料はない。ただ多くの鉄滓を検出したＳＫ３は性格を明確にはできないが、今後十分に検討する余地がある。

一方Ａ、Ｂ両地区で検出された溝状遺構は遺物が検出されなかったことから、時期は不明である。また、高低差をもたない。

Ｂ地区で検出された土壙墓（ＳＫ５）は出土遺物より時期は鎌倉時代前半期に比定できよう。壁面がほぼ垂直で長方形を呈し、底面が平坦であることなどにより、木棺が使用されたと想定できる。遺構の特徴として掘立柱遺構ＳＢ８に隣接した墓地である点が注目される。現在のところ、中世において住居に近接した墓地の類例は、大阪府高槻市宮田遺跡の例があげられる。

（三谷・木谷）

＜註＞

① 『高槻市史』　第一巻　（高槻市史編さん委員会昭和４８年）

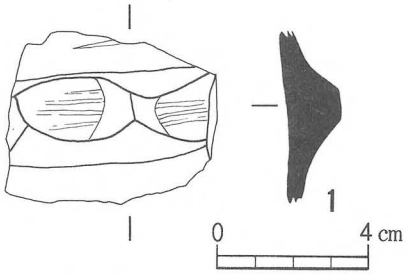
Ⅴ　出土遺物

今回の発掘調査において出土した遺物は、縄文式土器・石斧・須恵器・土師器・磁器・陶器・土師質皿・鉄滓などである。量的には須恵器・土師器・土師質皿が大部分を占める。出土遺物の総量は破片数で約１３００個、コンテナ約２箱分程度であり、試掘した４５ケ所のうち２５ケ所で遺物が確認された。しかし、そのほとんどが包含層ないし攪乱層からの出土で遺構に伴うものは、ＳＫ５以外では少ない。

ここでは遺物の種類・時代・器種ごとに概観し、個々の遺物については本章末の観察表に一括した。またＳＫ５出土の遺物は別途に観察表を作成し、写真図版の遺物番号は実測図図版の遺物番号と同一番号に統一した。

１　縄文式土器（第21図、図版14、遺物番号１）

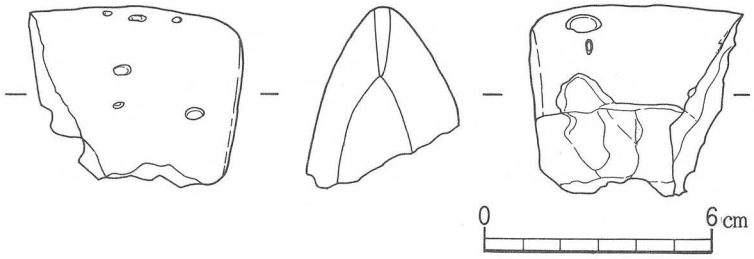
検出された縄文式土器は１０数点あるがすべて小破片であり、原形がうかがえるのはこの他に貼り付け凸帯を有する１点があるにすぎない。(1)は甕の体部の一部で貼り付け凸帯を有し、その上部を指で押さえて波状にし、更に条線を凸帯上に４条、体部に数条施し、外面をヘラ研磨している。胎土は径２㎜大の細砂を含み、色調は暗褐色を呈する。焼成はやや悪い。縄文時代後期のものと思われる。



第21図　縄文式土器実測図

２　石斧（第２２図、図版１４、遺物番号２）

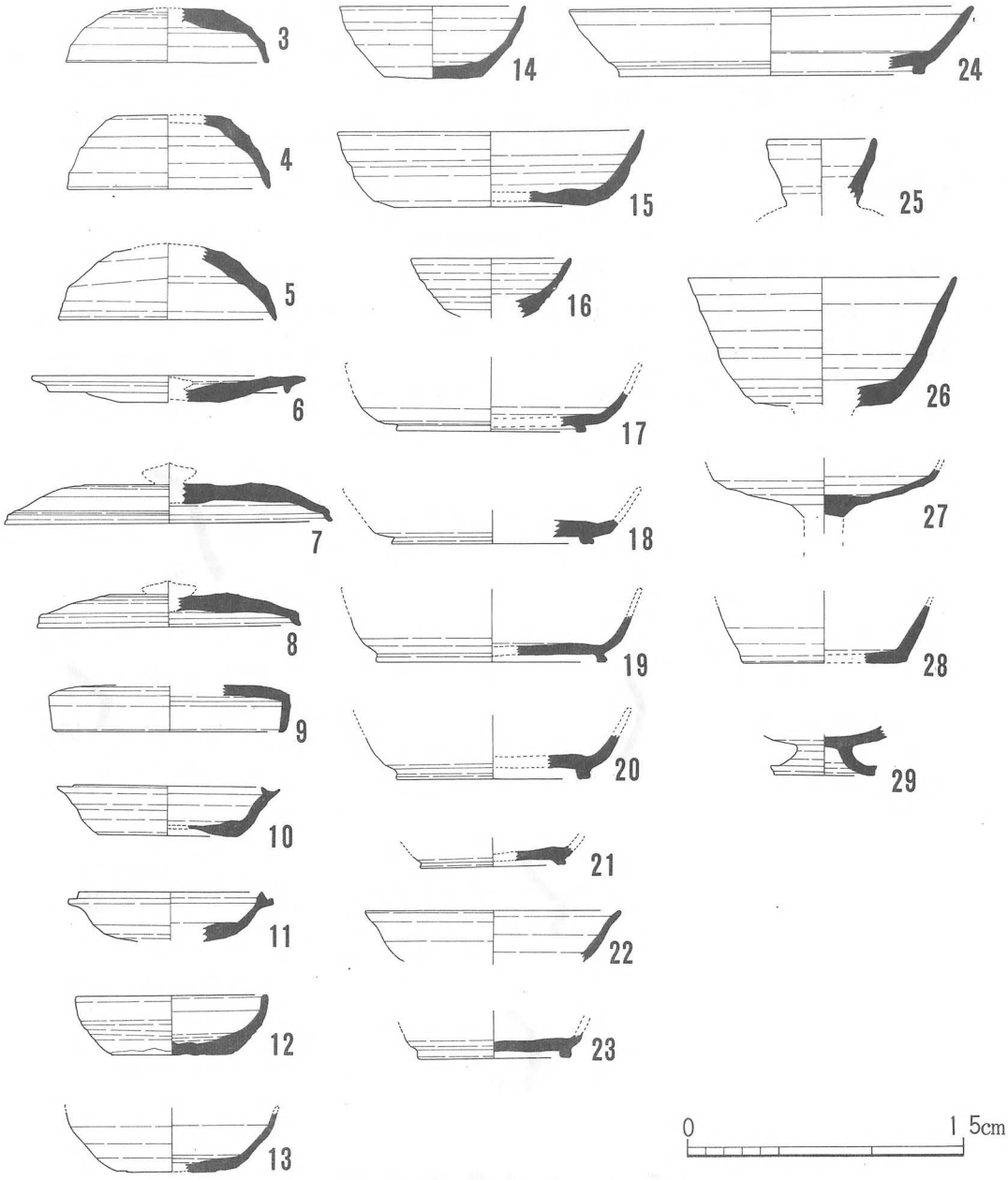
石斧が１点検出されており、大型蛤刃磨製石斧である。刃部は曲線凸状をなし、表裏面ともにゆるい凸状を呈し、側面は平坦で下方にしたがって内弯する。刃部先端は磨滅し平坦面を有する。残存面はすべてていねいに研磨されている。石材は安山岩を使用している。　（三谷）



第22図　石斧実測図

3　須恵器（第２３図、図版１１・１２・１３・１４）

須恵器はＴ１・Ｔ６・Ｂ地区を中心に出土し、そのほとんどを図化した。器種は杯蓋（３～８）、杯身（１０～２４）、提瓶（２５）、台付椀（２６）、高杯（２７）、台付瓶（２９）、薬壷の蓋（９）のほか器種不明の底部がある（２８）。これらは（６）を除いて、すべて包含層あるいは攪乱層よりの出土であり遺構にともなわない。



第23図　須恵器実測図

これらの遺物のうち最も時代の遡るものは杯蓋（３～５）、杯身（１０・１１）、提瓶（２５）であり陶邑ＴＫ２１７の初期に相当し、６世紀の終末に比定できる。

これにつづく時期として考えられるのは、ＳＫ２出土の杯蓋（６）と杯身（１２・１３）である。（６）は内面のかえりの部分が退化しており、７世紀の中葉頃のものと考えられる。

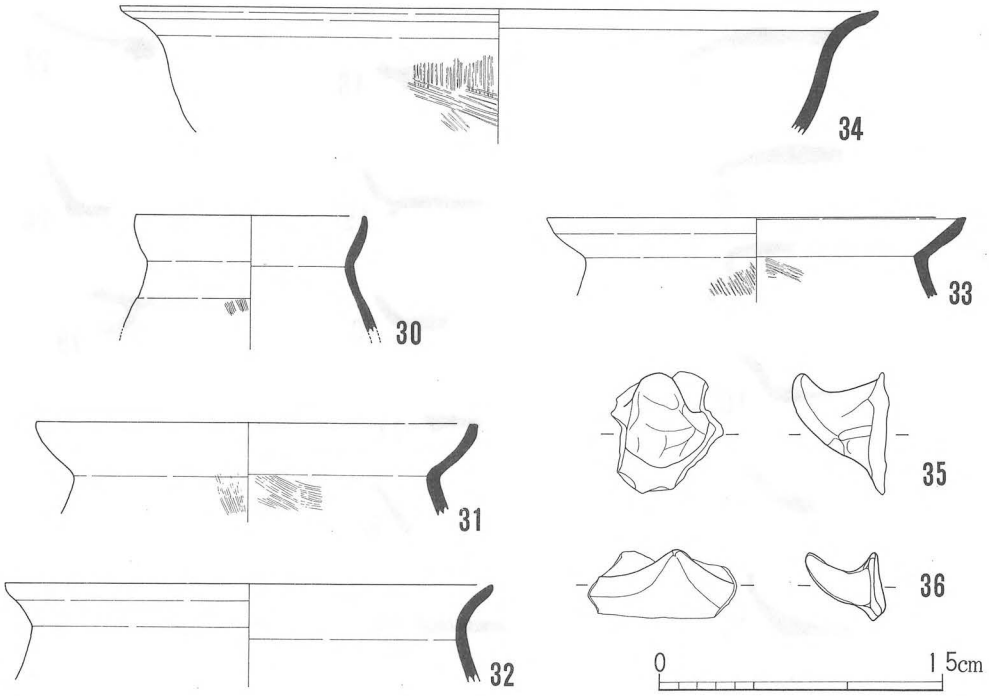
第３の時期を示すものは、杯蓋（７・８）、薬壷の蓋（９）、杯身（１５～２２）である。杯蓋の内面のかえりは消滅し、杯身には底部に断面長方形の高台をめぐらす。これらは陶邑ＭＴ２１に併行する時期を示し、７世紀末～８世紀初頭に比定できる。

第４の時期として考えられるものは、杯身（２３・２４）、台付椀（２６）、台付瓶（２９）でありこれらは奈良時代～平安時代初頭の時期を示す。

このように出土した須恵器には約２００年の時期差があるが、その中でも、７世紀末～８世紀初頭の須恵器の出土量が多い。（中野）

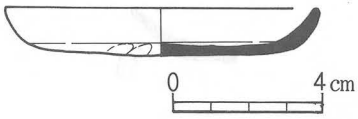
４　土師器（第２４図、図版１３・１４）

出土した土師器のうち実測可能なものは１０点に満たないが、器種は甕（３０～３３）・鉢（３４）・土師質皿（３７）の３種類と他に把手（３５・３６）がある。これらは一地区に集中して検出されていない。甕の口縁の形態はそれぞれ異っている。(30)はやや内弯し、それに対して３２は外反す



第24図　土師器実測図

る傾向にある。(31)と(33)は端部に面を持つ。体部まで残存するものは少ないが、いわゆる体部の張りが弱い長甕と呼ばれるものであると思われる。鉢は大型で、体部に刷毛目を施したのちに口縁部にヨコナデを行なっている。把手はいずれも貼り付けの手法を用いており、(35)は鍋か鉢、(36)は浅い鍋に貼付されたものであろう。これらは全て遺構に伴なわないため明確な時期を判断することはできないが、7世紀から8世紀のものと考えてよいだろう。



第25図　土師質皿実測図
（遺物番号 37）

土師質皿については、多数破片を確認したが図化し得たのはわずかに1点である。口径は8.3㎝を測り、底部外面には指圧痕が見られる。これは形態や手法の特徴より13世紀に比定できよう。

5　鉄　滓（図版14）

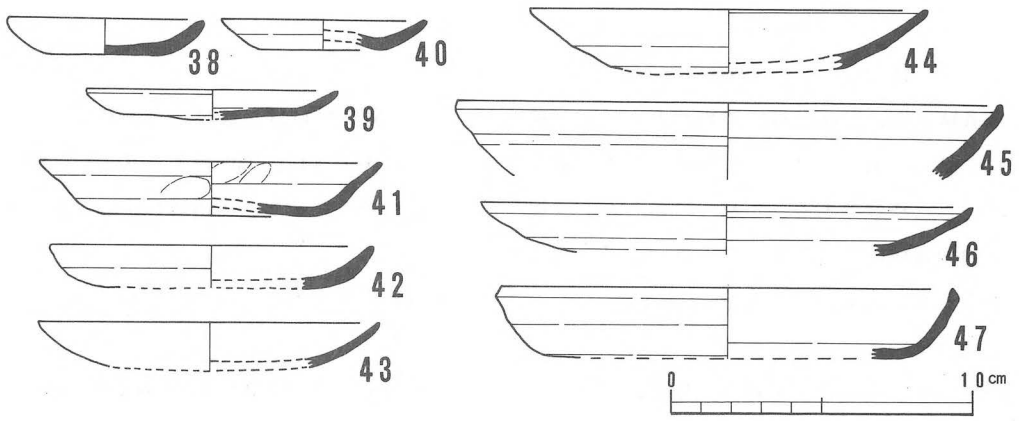
B地区のSK3より出土した7点の鉄滓はいずれも2×2㎝程度のものである。T24より出土した鉄滓（図版14）は大形で、出土時、緑灰色の銹の様なものが付着していた。このことから銅滓の可能性もあろう。　（土谷）

6　土壙墓内（SK5）　出土遺物（第25・26図、図版13・14）

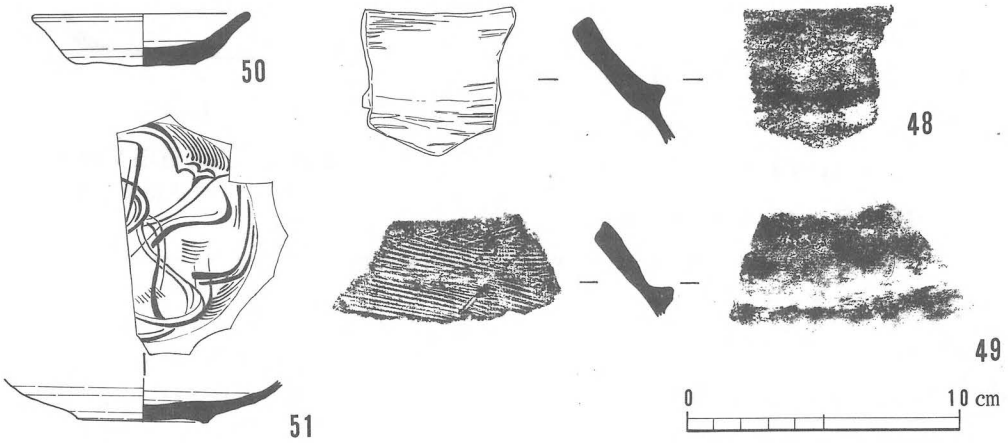
土壙墓（SK5）からは土師質皿・羽釜・須恵器・山茶椀・中国製磁器などが検出された。このうち土師質皿が最も多く、続いて羽釜・須恵器の順となっており、山茶椀・中国製磁器は各1個体ずつとなっている。須恵器以外はいずれも13世紀に比定できるものである。

(1)　土師質皿（38～47）

土師質皿は検出総数162片で個体数は約50個になるものと推定されるが、そのうち実測可能なものは約10点である。大きさから大皿（口径約15㎝）、中皿（約10㎝）、小皿（約7㎝）の3種類に大別できるが各々深さや形態は異なるものが多い。



第26図　土壙墓内出土土器Ⅰ（土師質皿）



第27図　土壙墓内出土土器Ⅱ

⑵　羽釜形土器（４８・４９）

羽釜形土器の検出総数は３８片で個体数は２点と推定される。両者とも同様な形態をとる。

⑶　須恵器

須恵器は杯と甕の小片を検出した。杯蓋と思われる１点と、器種不明の口縁部１点、甕は胴部のものが８点あり、内面に同心円タタキ目がみられるものと、タタキ目をナデて消すものがある。個体数は合計３点と推定される。検出した破片が小さいため時代は判定し難い。

⑷　山茶椀（５０）

山茶椀とは通称行基焼と呼ばれる東海地方で焼かれたものである。３分の２程遺存する１点と、同一個体の口縁部小片を２点検出した。

⑸　中国製磁器（５１）

底面以外に釉がかかっており、底部内面にへら様の施文具で文様を描く。色は青白色で文様の部分がやや濃くなる。　（三谷）

７　小　結

本遺跡からは多種多様の遺物が出土したが縄文式土器と石斧を除けば、ほぼ二つの時期に限定される傾向にある。ひとつは須恵器の陶邑ＭＴ２１の型式に代表され、７世紀末～８世紀初頭を中心とした時期である。これらはほとんど遺構に伴なうものではないが、当遺跡の中心である掘立柱建物遺構の時期を裏付ける遺物と考えられる。

もう一方の時期は、ＳＫ５出土遺物に代表される鎌倉時代前半のものであり、特にＢ地区東半からは土師質皿の出土量が多い。

以上のことから、本遺跡は長期間にわたって継続するものでなく、５００年以上隔てた２時期に集中して短期間営なまれたものであると考えられる。　（中野）

Ⅵ　まとめ

北野遺跡の発掘調査は、この調査にひき続いてさらに西側の部分を秋に調査が実施されている。そのため、遺跡の全体像を描くには、その後の調査における図面、遺物などの整理結果をまたねばならない。昭和５４年度に実施した北野遺跡の総合的な報告は、後日刊行予定の『ほ場整備関係遺跡調査報告書』Ⅶ（滋賀県教育委員会）にゆずり、ここでは我々の調査担当した地区で明らかになった点を列記するにとどめたい。

(1)　縄文時代の遺物

調査当初に予想された縄文時代の遺構、遺物は、微量ではあるが縄文式土器の破片と、磨製石斧が１点出土したのみであった。出土した土器はかなり磨滅していることから、さらに上流の地点から移動したものと推定される。このことから、付近に縄文時代の遺跡があることはほぼまちがいなかろう。

土器は、おそらく甕か深鉢で、凸帯の刻みが二枚貝腹縁による押引の手法を用いていることから、東海地方を中心に分布する縄文時代晩期 ── 五貫森式①のものであろう。同一手法の土器は、坂田郡伊吹町杉沢遺跡②からも出土が報告されている。

(2)　遺物の時期

主な出土遺物（須恵器、土師器など）の時期は、大きくⅠ期 ── ６世紀末、Ⅱ期 ── ７世紀末～８世紀初頭、Ⅲ期 ── １３世紀の三時期に分けられる。このことと歴史的な背景から見て、すでに６世紀末段階から当地域への定着が始まったものと理解してよいだろう。おそらく地理的状況から考えて、平野の開発が６世紀末ごろには扇状地の上半部にまでおよび、北野の地に新たな集落が営まれたものと推定される。

(3)　建物跡の時期と問題

検出された掘立柱の建物跡は、各トレンチより出土した土器から、Ⅱ期とⅢ期のものとみられるが、建物の大半はⅡ期のものである。

(a)　Ⅱ期の掘立柱建物は、各建物の規模や配置などからみて、集落跡として誤りはなかろう。ただ掘立柱建物は、比較的住居跡の調査例が多い湖北地方にあっては、類例にとぼしい。近接する地域で多くの住居跡が調査されている、伊香郡高月町保延寺大海道遺跡③、井ノ口遺跡④では、奈良～平安時代初頭まで竪穴式住居が営まれている。一方、北野遺跡例に近い年代を与えている掘立柱建物は、長浜市大東遺跡⑤に認められる。これについては坂田郡の郡衙が推定されているように、北野遺跡の建物群とは性格の異なるものかもしれない。こうしたことから考えると、おそらく湖北地方においては、奈良・平安時代前期ごろまで、竪穴式住居が集落に一般的なものであったとみてよいだろう。そうした観点にたてば、北野遺跡の掘立柱建物からなる集落跡は、湖北地方にあっては早い時期のものと言えよう。北野の立地と開発の開始時期を考える時、湖北地方で一早く先進的な建物構造による集落がこの地に営まれることに一つの意義を見るのである。

(b)　Ⅲ期の掘立柱建物は、Ⅱ期の建物と同一方向で、また現在の村を構成する建物とも方向

性については大きな違いはない。おそらく北野の集落は、Ⅱ期以来ほとんど同じ位置に、多少の場所の移動はあっても順次建て換えをくりかえしながら今日に至ったのであろう。

そうした点から、北野遺跡は、古代から中世、近世をへて現在に至る集落のあり方を知る好資料といえよう。それゆえに、ひき続きおこなわれた第Ⅱ次調査の結果が、一日も早く整理されることを期待するものである。

以上３点を今回の調査より導き出された結論としたい。　　（兼康保明）

＜註＞

① 杉原荘介・外山和夫「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡」（『考古学集刊』２－３、東京考古学会　昭和３９年）

② 小林行雄・藤岡謙二郎・中村春寿「近江坂田郡春照村杉沢遺跡 ── 縄文式土器合口甕棺発掘調査報告 ── 」（『考古学』９－５　東京考古学会　昭和１３年）

③ 丸山竜平・成瀬法途・勢田広行・本田修平「高月町保延寺大海道遺跡調査報告」（『ほ場整備事業関係遺跡調査報告』Ⅱ　滋賀県教育委員会　昭和５０年）

④ 田中勝弘「高月町井口遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ－Ⅱ　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和５２年）

⑥ 中谷雅治・鬼柳彰・大橋信弥・別所健二・松浦俊和「大東遺跡の発掘調査」（『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和４９年）

追記　大面積の調査に不慣な関西学院大学考古学研究会の諸君に、この調査をまかせた時、はたして無事１カ月間 ── しかも合宿しながら調査を完遂することができるかどうか一抹の不安があった。

炎天下の調査に従事し、とまどいながらも、自分達で考え、討議し、ここまでまとめあげた彼らに、調査開始時の私の不安はもうない。自分の眼で物を見、自分の足でしっかりと大地に立っている。報告書の細部については、今あえて語るまい。悪い点、改良すべき点があれがそれは本報告でなおせばよいだろう。

こうした彼らを身心ともに支えてくれたのは、地元北野の方々であり、彼らの先輩達であった。文末ではあるが、改めてお礼申しあげたい。

私達は、歴史を明らかにするため調査を行なった。だが、一年間のプロセスもまた、悠久たる歴史の１頁となり、いつまでも語りつがれて行くことだろう。

関西学院大学考古学研究会の諸君！　私は君達とともに７０年代最後の夏を、ともにすごし、かつ勉強したことを誇りに思う。今、最終校正を見ながら、諸君ら一人一人に満腔の敬意を表するものである。

１９８０・１・２　　於逢坂山麓瘋癲庵

第3表　須恵器観察表Ⅰ

番号	器種	法量 口径（底径）	器径	高さ	色調	胎土	焼成	技法の特色	備考
3	杯蓋	11.0	—	2.9	黒灰色	精良	堅緻	天井部外面は不調整、天井部と体部の稜に粘土が付着する。体部はヘラ削りののち軽くロクロナデを施す。体部内面はロクロナデ、その他は静止ナデである。	T33　第Ⅴ層 1/15 残存
4	杯蓋	10.6	—	4.0	外面暗青灰色 内面淡青灰色	良好	良好	天井部と体部の境い目にヘラ削りを施し、体部は内外面ともに強いロクロナデである。ロクロの回転方向は右回り。	T6　あげ土 1/8 残存
5	杯蓋	11.9	—	3.9	灰白色	良好	普通	体部外面及び口縁部内外面はロクロナデ、体部内面には静止ナデを施す。	T1　第Ⅲ層 1/8 残存
6	杯蓋	13.0	15.0	1.5	黒灰色	良好	普通	天井部外面はヘラ削り、中央には接合ナデを施す。口縁部はロクロナデ。内面のかえりの外側には接合ナデがみられる。体部内面はロクロナデ、その他は不調整である。	T38　ピット内（SK2） 1/5 残存
7	杯蓋	17.9	—	2.1	外面　黄灰色 内面　淡灰色	良好	堅緻	天井部外面は粗くヘラ削りを施したのち軽くナデを行なう。体部から口縁部にかけてロクロナデ、その他は静止ナデを施す。	T6　第Ⅴ層 1/6 残存
8	杯蓋	14.3	—	1.8	淡灰色	精良	堅緻	天井部外面は粗くヘラ削りを施したのち軽くナデを行なう。体部から口縁部にかけてロクロナデ、その他は静止ナデを施す。	T6　第Ⅴ層 1/8 残存 いびつに曲がっている。
9	薬壷の蓋	11.8	13.2	2.55	外面　青灰色 内面　淡灰色	精良	堅緻	天井部外面はヘラ削りののち軽くロクロナデを施す。体部及び口縁部は内外面ともロクロナデ、天井部内面は静止ナデを行なう。ロクロの回転方向は右回り。	T6　第Ⅴ層 1/6 残存 天井部の器肉は暗紫色を呈する。
10	杯身	10.2	12.2	2.65	外面　暗灰色 内面　淡灰色	良好	堅緻	底部にはヘラ削りを施すが中央部は静止ナデが見られる。体部及び口縁部は内外面ともロクロナデを施す。底部内面に弱いヘラ記号が見られる。	T33　第Ⅴ層 1/8 残存
11	杯身	10.0	11.2	2.7	淡青灰色	良好	堅緻	底部外面はヘラ削りののち軽くロクロナデ、内面は静止ナデを施す。その他はロクロナデを行なう。	T38　第Ⅴ層 1/12 残存

第3表　須恵器観察表Ⅱ

番号	器種	法量 口径（底径）	法量 器径	法量 高さ	色調	胎土	焼成	技法の特色	備考
12	杯身	10.5	—	3.2	青灰色	良好	堅緻	底部には粘土ひも巻き上げ痕が残る。底部内面は静止ナデ、体部から口縁部にかけて内外面ともにロクロナデを施す。ロクロの回転方向は右回り。	T32　第Ⅳ層 1/2 残存
13	杯身	11.4	—	3.2	灰白色	精良	不良	底部外面は不調整で粘土ひも巻き上げ痕が残る。底部内面は静止ナデ、体部は内外面ともにロクロナデを施す。	T23　あげ土 1/7 残存 ローリングが著しい。
14	杯身	10.0	—	3.9	暗灰色	良好	堅緻	底部外面は粘土ひも巻き上げ痕が残る。底部内面は静止ナデ、体部は内外面ともロクロナデを施す。見込みの部分に弱いヘラ記号が見られる。ロクロの回転方向は右回り。	T32　第Ⅴ層 1/4 残存
15	杯身	16.6	—	4.1	灰色	普通	良好	底部は不調整。底部と体部との境い目はヘラ削りを施したのち軽くロクロナデを行なう。体部中央にはゆるい凹線が見られる。ロクロの回転方向は右回り。	T33　第Ⅴ層 1/6 残存
16	杯身	8.8	—	3.2	暗灰色	良好	堅緻	体部及び口縁部は内外面とも強いロクロナデ、その他は静止ナデを施す。	T32　第Ⅴ層 1/10 残存 脚台がつく可能性がある。
17	杯身	10.3	—	2.2	外面　暗灰色 内面　灰色	精良	堅緻	貼り付け高台を持ち周辺に接合ナデを行なう。その他は全てロクロナデを施す。	T6　第Ⅴ層 1/12 残存 器肉は暗紫色を呈す。
18	杯身	11.0	—	1.3	暗灰色	径2㎜大の砂粒を散見	堅緻	貼り付け高台を持ち周辺に接合ナデを行なう。底部内面は静止ナデ、その他はロクロナデを施す。高台部外面の調整は不十分である。ロクロの回転方向は右回り。	T6　第Ⅱ層 1/6 残存
19	杯身	12.6	—	2.5	乳茶灰色	普通	不良	貼り付け高台を持ち周辺に接合ナデを行なう。その他は全てロクロナデを施す。	T6　第Ⅴ層 1/5 残存
20	杯身	10.4	—	2.3	淡灰色	良好	良好	貼り付け高台を持ち周辺に接合ナデを行なう。その他は全てロクロナデを施す。底部内面にロクロナデののち何かでえぐりこまれた痕が残る。	T6　第Ⅴ層 1/6 残存

第3表　須恵器観察表Ⅲ

番号	器種	法量 口径(底径)	法量 器径	法量 高さ	色調	胎土	焼成	技法の特色	備考
21	杯身	7.8	—	1.0	暗青灰色	径2㎜大の砂粒を散見	堅緻	貼り付け高台を持ち周辺に接合ナデを行なう。その他は全てロクロナデを施す。	T6　第Ⅱ層 1/6 残存
22	杯身	14.0	—	2.9	外面　淡灰色 内面　暗灰色	径2㎜大の砂粒を含む	堅緻	全てロクロナデである。	T6　第Ⅴ層 1/8 残存
23	杯身	8.4	—	1.4	暗青灰色	良好	堅緻	貼り付け高台を持ち周辺に接合ナデを行なう。底部外面は不調整、その他はロクロナデを施す。ロクロの回転方向は右回り。	T6　第Ⅱ層 1/5 残存
24	杯身	22.0	—	3.7	淡茶色	精良	不良	貼り付け高台を持ち周辺に接合ナデを行なう。その他は全てロクロナデを施す。	T6　第Ⅴ層 1/12 残存
25	提瓶	5.8	—	3.7	外面　暗灰色 内面　淡灰色	精良	堅緻	内外面ともロクロナデを行なう。外面のロクロナデは強い。	T1　第Ⅲ層 1/5 残存
26	台付椀	14.6	—	7.0	暗灰色	普通	良好	底部内面は静止ナデ、体部下半はヘラ削りを行なう。体部は内外面ともロクロナデである。ロクロの回転方向は右回り。	T33　第Ⅴ層 1/4 残存 脚台が付くものと思われる。
27	高杯	—	—	2.5	淡灰茶色	普通	不良	ローリングが著しいため技法の特色は不明。	T1　第Ⅲ層 1/4 残存
28	不明	8.8	—	3.1	灰白色	良好	不良	ローリングが著しいため技法の特色は不明。	T6　第Ⅴ層 1/5 残存
29	台付瓶	5.4	—	2.7	灰色	良好	堅緻	体部内面は静止ナデ、その他は全てロクロナデを行なう。	T1　第Ⅲ層 脚部完存

第4表　土師器観察表

番号	器種	法量 口径(底径)	法量 器径	法量 高さ	色調	胎土	焼成	技法の特色	備考
30	甕	12.2	—	6.0	淡黄茶色	普通	良好	口縁部から体部にかけてヨコナデを行ない、体部外面は縦に刷毛目を施す。内面はローリングにより不明。	T33　第V層 1/10 残存 ローリングが著しい。
31	甕	22.4	—	4.9	黄茶色　外面は黒っぽい	普通 金雲母片が混入	良好	口縁部内外面ともにヨコナデを行なう。体部内面は横に、外面は縦に刷毛目を施す。	T45　第Ⅲ層 1/8 残存 断面はサンドイッチ状に黒くなる。
32	甕	25.8	—	5.15	黄茶色　一部黒っぽい	良好	普通	残存部は全てヨコナデを行なう。	T1　第Ⅲ層 1/8 残存
33	甕	22.2	—	4.1	淡黄茶色	良好	良好	口縁部内外面ともにヨコナデを行なう。体部は内外面ともに斜めに刷毛目を施す。	T32　第V層 1/13 残存
34	鉢	40.0	—	6.6	外面暗黄茶色 一部黒っぽい 内面淡黄茶色	良好	普通	口縁部内外面ともにヨコナデを行なう。体部外面は縦に刷毛目を施したのち斜めに刷毛目を施す。縦の刷毛目は口縁部ヨコナデによって上部が消されている。	T45　第Ⅲ層 1/5 残存
35	不明	—	—	—	淡黄茶色	良好	良好	全体は指でなでられている。貼り付けの手法を用い、接合部は接合ナデを行なう。	T26　第V層 把手幅 4.2 cm 把手長 4.7 cm
36	鍋	—	—	—	黄茶色	良好	良好	全体は指でなでられている。貼り付けの手法を用いる。	T32　第V層
37	土師質皿	8.3	—	1.3	淡黄茶色	精良	普通	底部に指圧痕が見られる。内面及び体部外面はヨコナデを行なう。	T31　ピット内 2/3 残存

第5表　土壙墓内出土遺物Ⅰ

番号	器種	法量 口径（底径）	法量 器径	法量 高さ	色調	胎土	焼成	技法の特色	備考
38	土師質皿	8.4	—	1.0	淡黄茶色	精良	良好	底部外面に指圧痕が見られる。残存部はヨコナデを行なう。	上層 1/3 残存
39	土師質皿	6.4	—	1.2	灰白色	良好	良好	残存部はヨコナデを行なう。	中層〜下層 1/3 残存
40	土師質皿	6.8	—	1.0	乳黄灰色	精良	普通	残存部はヨコナデを行なう。	上層 1/6 残存
41	土師質皿	11.3	—	1.8	淡黄茶色	良好	普通	内外面ともにヨコナデを行なう。体部外面に1ケ所、口縁部内面に2ケ所指圧痕が見られる。	セクション内 1/6 残存
42	土師質皿	10.8	—	1.4	淡灰黄色	良好	普通	残存部はヨコナデを行なう。	セクション内 1/11 残存
43	土師質皿	11.4	—	1.5	外面淡茶黄色　内面淡黄灰色	良好	良好	残存部はヨコナデを行なう。	セクション内 1/7 残存
44	土師質皿	13.2	—	1.9	淡黄茶色	普通	良好	残存部はヨコナデを行なう。	セクション内下層 1/7 残存 黒色の煤化痕が見られる。
45	土師質皿	18.0	—	2.48	乳黄灰色	良好	普通	残存部はヨコナデを行なう。	セクション内 1/16　残存
46	土師質皿	16.4	—	1.6	乳黄灰色	普通 0.5㎜大の細粒を若干含む	普通	残存部はヨコナデを行なう。	セクション内 1/10　残存
47	土師質皿	15.0	—	2.35	乳黄灰色	普通	普通	残存部はヨコナデを行なう。	セクション内 1/10　残存

第5表　土壙墓内出土遺物Ⅱ

番号	器種	法量			色調	胎土	焼成	技法の特色	備考
		口径（底径）	器径	高さ					
48	羽釜	—	—	—	茶褐色	良好 細砂粒を含む	良好	外面及び口縁部はヨコナデ、内面は刷毛目を施す。羽より上部と下部は別々に作製したのち接合したものと思われる。	セクション内
49	羽釜	—	—	—	黄褐色	良好	良好	外面及び口縁部はヨコナデ、内面は刷毛目を施す。羽より上部と下部は別々に作製したのち接合したものと思われる。	上層
50	山茶椀	8.0	—	1.9	白灰色	良好 細砂粒を含む	良好	底部外面は不調整、内面及び体部外面はロクロナデを行なう。	上層 2/3　残存 口縁の一部に緑色の自然釉が見られる。
51	中国製磁器	—	—	—	青白色	良好	堅緻	底部外面以外に釉、底部内面にヘラ様の施文具で文様を描く。	上層 1/2 残存

（第3表中野　第4・5表土谷　分担作成）

調査報告

長尾山の古墳群(Ⅲ)

雲雀山西尾根古墳群

関西学院大学考古学研究会

はじめに

関西学院大学考古学研究会は、昭和５１年度より研究活動の対象地域を西摂平野北方に展開する長尾山丘陵に求め、過去２度にわたり当地域に所在する後期古墳の実測調査を主体とした報告を行なってきた（「長尾山の古墳群Ⅰ・Ⅱ」『関西学院考古』第４号　昭和５３年、第５号　昭和５４年）。しかしこの間にも長尾山丘陵の土地開発は急速に進行しており、かなり旧状を失なったところもある。今回は比較的後期古墳の多く遺存する雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群に着目し、その調査報告を行なうこととした。

なお、本年度はＢ支群の西寄りの５基を実測調査するにとどまったが、今回調査できなかった古墳については漸時調査を進め、次回に掲載を予定している。

Ⅰ　雲雀山西尾根古墳群の概要

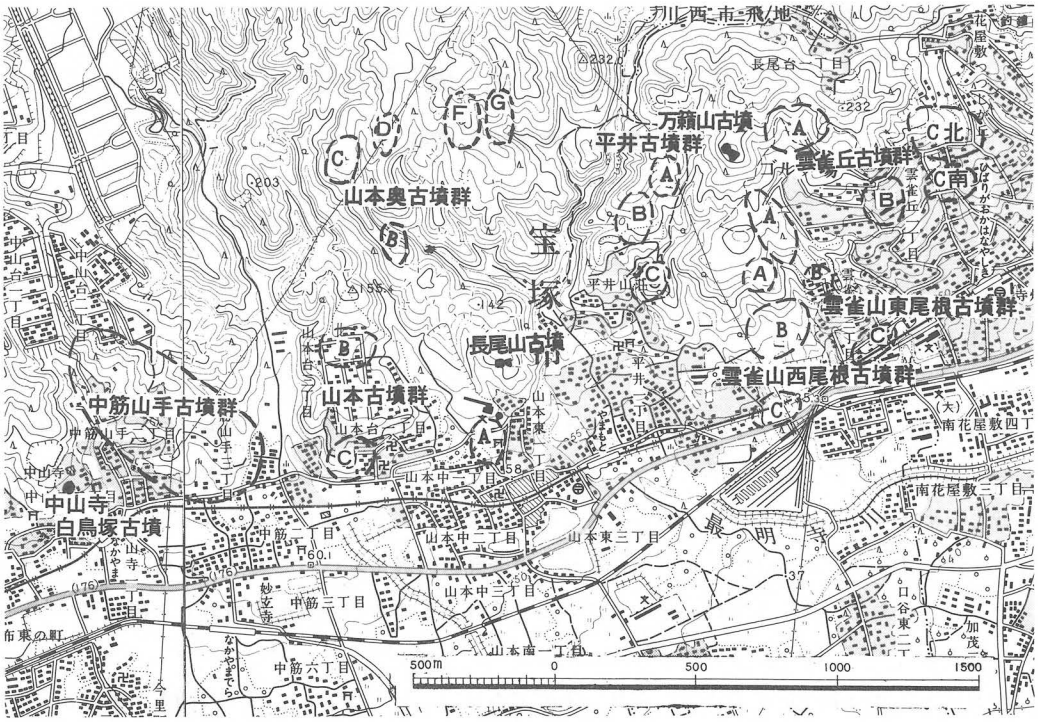
雲雀山西尾根古墳群は７古墳群と１単独墳から構成されている長尾山の古墳群の１つである。長尾山丘陵には古くから古墳が造営され、古墳時代前期には竪穴式石室をもつ前方後円墳として著名な万籟山古墳がある。この万籟山古墳は長尾山丘陵の東寄りの尾根の端部に存在する。この古墳より南へ下る尾根は標高１５０ｍ前後の地点から東西に分岐しさらに南へ延びる。その西側の尾根筋に分布する古墳群を雲雀山西尾根古墳群という。なお、当古墳群の眼下の台地には、弥生時代の石器を多量に出土したことで有名な加茂遺跡がある。

当古墳群は標高などによりＡ支群、Ｂ支群、Ｃ支群に分けられている。

Ａ支群は１５９.８ｍの標高を有する丘陵の南斜面の比較的なだらかな斜面（標高１２０～１３０ｍ）に東西６０ｍ、南北７０ｍの範囲にわたって分布している群である。測量調査が行なわれていないため、他の支群に比べて詳細は不明であるが、現存する古墳は１７基でいずれも７世紀型古墳である。

Ｂ支群はＡ支群のある尾根の下のほとんど段丘面に近い標高６０～７０ｍに分布している群であるが、古墳の分布状態によってさらに３つの群に分けることができる。

１つはＡ支群の下方の標高７０ｍ前後に存在する２基で、Ｂ支群の中では東寄りに位置する。



第1図　雲雀山古墳分布図

1つは池の上方の標高６５ｍ前後に存在する３基で、Ｂ支群の中では中央に位置する。もう１つは今回地形実測を行った５基で、標高６０ｍ前後の山麓部一帯に分布している。Ｂ支群の中では西寄りに位置する。

Ｂ支群は宅地開発が行なわれていないため旧地形をよくとどめている。

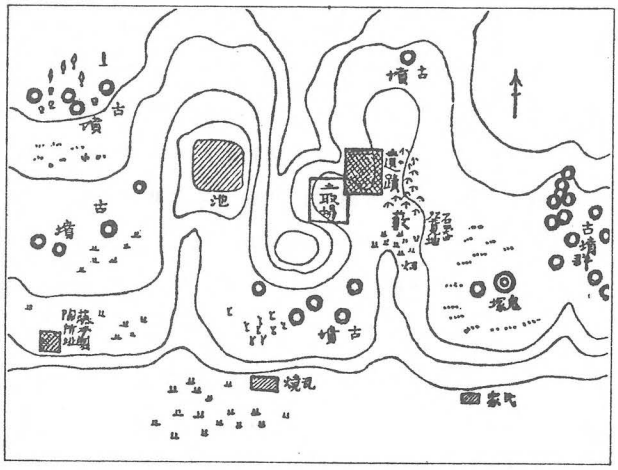
Ｃ支群は標高４５ｍ前後の平坦面上に分布している群である。現在の雲雀ケ丘学園グランド付近にあたり、その建設に伴う開発工事の為、古墳はすべて消滅した。石野氏の報告によると２基存在したとされているが詳細は不明である。　（木谷）

Ⅱ　過去の調査記録

長尾山丘陵に多くの古墳が分布していることは、早くから人々の注目するところであった。明治におけるウイリアム・ゴーランドの白鳥塚古墳などの調査以来、現在に至るまで数多くの古墳の調査が実施され、その記録の蓄積も膨大なものになった。

調査記録を雲雀山西尾根古墳群に限ってみると、大正４年に「考古学雑誌」に発表された笠井新也氏の論文が最も古いといえる。[1] この論文は、おもに平井窯跡の報告であったため、古墳群についての詳細な論述はない。ただ、付図に平井窯跡周辺の古墳群が併記されており、最初の古墳

分布図である（第２図）。この図によれば、雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群には８基の古墳が記載されており、現在からみてもかなり正確なものと考えられる。



第２図　平井遺跡図「考古学雑誌」５巻９号より

さらに、この時期の調査記録として注目されるものに、坪井良平氏の「酔古雑録」がある[2]。これは『宝塚市史』編さんのため、坪井氏が提供された資料で、大正２年ごろから５年にかけて、氏自身が実地踏査された各地の遺跡の実測図を主とした記録である。『宝塚市史』に記載された写真には、「摂津国河辺郡中山以東池田ニ至ル石槨」として、３基の横穴式石室の断面図・平面図が記されている[3]。さらにその図の横に注記がなされ、「コノ辺一帯ノ南方山腹ニ無数ノ古墳石槨アリコヽニソノ一部ヲ示ス、麓ニ近キ程巨大ニシテ精巧ナルモノノ如シ、山本村松尾神社及寺畑村後方山腹ニ殊ニ多キヤニ聞ク、石積悉ク梯形ヲナス」とあり、注目に値する。

昭和に入ると、梅原末治氏らを中心として西摂地方における著名な古墳が数多く発掘調査ないしは実測調査が行なわれた。尼崎市の池田山古墳、大塚山古墳、川西市の勝福寺古墳、宝塚市の安倉古墳、豊中市の鉢塚古墳などであるが、当該地域に関連するものとしては、宝塚市万籟山古墳[4]があげられる。

しかし、長尾山丘陵における群集墳の研究は、戦後にまたなければならなかった。『宝塚市史』に指摘されているごとく、群集墳研究の本格化と、宅地開発の拡大が軌を一にしたことは、遺憾ながら事実といわざるをえない。

まず、昭和２６年には、大久保基夫氏らによって、雲雀山東尾根古墳群Ｃ支群の３基の横穴式石室墳が実測調査されている[5]。このうち２号墳は、昭和４９年、発掘調査が実施されているが[6]、１・３号墳は比較的早い時期に消滅したため、大久保氏らの実測図は今日では貴重なものといえる。

昭和２７年には、長尾村によって、「長尾山古墳（横穴式）分布図」が作製されている[7]。これは、長尾山丘陵一帯にわたる古墳の分布図で、当時のこととて若干の誤認はあるものの、現在消滅した古墳も多く記載されており、注目される。

昭和２９年、武藤誠先生・村川行弘氏らによって雲雀ケ丘古墳群Ｃ支群の発掘調査が行なわれた[8]。調査されたのは横穴式石室墳３基で、須恵器・土師器・鉄刀・金環などが出土している。

昭和３４年には、石野博信氏らによって、雲雀山東尾根古墳群Ｂ支群の発掘調査が実施されている[9]。この調査の報告は、昭和４５年に「宝塚市文化財調査報告書　第１集」として公刊されているが、長尾山丘陵の古墳群研究史上、最も画期的なものといってよかろう。

まず、長尾山丘陵の古墳群の名称がほぼこれによって定まったことがあげられる。次にＢ支群の２３基の古墳すべてが完掘されたことで、のちに群構造の問題が提起されるにいたった[10]。しか

し、最も注目されるのは、B支群の２３基がすべて７世紀の古墳であることが明らかになったことであろう。しかも古墳の大きさによりA～D型の４つの型式に分け、平井古墳群から雲雀山東尾根古墳群にわたる小型横穴式石室墳研究の基礎となった。

このころから長尾山丘陵全域にわたり宅地開発が進み、これにより消滅した古墳も数多い。そのため、古墳の分布を確実に把握する必要が生じ、昭和４０年と４３年に分布調査が実施されている⑪。とくに、昭和４３年の調査では、高井悌三郎氏を中心とするチームにより、平井古墳群、雲雀山西尾根古墳群において、従来に倍する古墳の存在が明らかにされ、さらに詳細な調査が必要となった。

そこで、昭和４６年には、同じく高井氏を中心として、平井古墳群と重点的にした分布調査および実測調査が行なわれた⑫。この調査では、古墳の数、位置などについて若干の疑問もあるが、平井古墳群の群構造を明らかにしえたことは注目される。

昭和４７年には、武藤先生の御指導により、関西学院大学考古学研究会が、雲雀山東尾根古墳群A支群の古墳７基、同西尾根古墳群B支群の古墳２基を発掘調査した⑬。この調査の結果、雲雀山東尾根古墳群では、A・B・C支群の全ぼうがほぼ明らかになった。また、雲雀山西尾根古墳群では、従来、横穴式石室墳のみで構成されていると考えられていたが、小横穴式石室墳１基が検出され、問題を将来に残した。

関西学院大学考古学研究会では、昭和４７年の調査を契機とし、毎年のごとく長尾山丘陵の古墳群の分布調査・実測調査を実施している⑭。

＜註＞

① 笠井新也「摂津国川辺郡に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物」（『考古学雑誌』第５巻第９号・第１１号　大正４年）

② 『宝塚市史』第４巻（宝塚市役所　昭和５２年）による。

③ ②の１０９ページ

④ 梅原末治「摂津万籟山古墳」（『日本古文化研究所報告』第４　昭和１２年）

⑤ 大久保基夫「摂津川辺郡の三古墳を実測して」（『古代学研究』２１・２２合併号　昭和３４年）

⑥ ②に同じ

⑦ ②に同じ

⑧ ②に分布図と石室実測図が記載されている。

⑨ 石野博信「宝塚市長尾山古墳」（　宝塚市文化財調査報告書　第１集　昭和４５年）

⑩ 兵庫県教育委員会編『兵庫県遺跡地名表』　昭和４０年

⑪ 文化財保護委員会編『全国遺跡地図』（兵庫県）　昭和４３年

⑫ 高井悌三郎『平井古墳群分布調査報告書』（ 宝塚市文化財調査報告書　第２集　昭和４７年）

⑬ 『宝塚市雲雀山古墳群』（　宝塚市文化財調査報告書　第６集　昭和５０年）

⑭ 関西学院考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅰ・Ⅱ」（『関西学院考古』第４号、第５号　昭和

５３年、昭和５４年）

以下、本文中における註記番号は上記した番号に準ずるものとする。

Ⅲ　調査の経過

当研究会は昭和５４年５月１２日に分布調査を行なった後、現存する古墳の実測調査を実施した。調査対象とした古墳は６号墳・７号墳・８号墳・９号墳・１０号墳の５基であるが、１０号墳を除く４基は墳丘実測のみにとどめた。調査の経過は以下のとおりである。　（中村）

調査日誌抄

昭和54年５月20日

平板ポイント、レベルポイントを設定する。

５月26日

１０号墳の平面図及び１０号墳添の道付近の墳丘実測を行なう。午後は雨のため作業中止。

６月２日

１０号墳西側の墳丘実測を行なう。

６月９日

１０号墳の天井石平面プランの実測と９号墳の石室内を清掃する。

６月24日

１０号墳の東側壁の実測を行なう。

７月７日

１０号墳東側の墳丘実測及び東側壁の実測を行なう。

10月６日

１０号墳の墳丘実測をほぼ終了する。

10月14日

９号墳の墳丘実測を行なう。

10月21日

９号墳の墳丘実測及び付近の地形実測を行なう。

10月27日

８号墳の墳丘実測を行なう。

10月28日

７号墳南側の墳丘実測を行なう。

11月４日

７号墳北側の墳丘実測を行なう。

11月10日

６号墳の墳丘実測の予定であったが雨のため中止。

11月12日

６号墳の墳丘実測及び１０号墳の墳丘の未実測だった部分を完成させる。

11月18日

１０号墳の断面図作成の予定であったが雨のため中止。

11月24日

１０号墳の断面図を作成する。

12月１日

宝塚市教育委員会の坂井氏の協力により写真撮影を行なう。

12月７日

坂井氏の協力による写真撮影をもって現地での作業を終了する。

Ⅳ　調査の概要

(1)　位置と現状

雲雀山西尾根Ｂ支群は北から南に延びる雲雀山西尾根に存在する３支群のうちその中央に位置する。地形的には西尾根の中腹部に緩斜面がありその裾部に沿って立地している。

今回の調査はＢ支群のうち西寄りに位置する６・７・８・９・１０号墳の５基について現状実測調査を行なった。

＜分布確認調査＞

実測調査に先だって雲雀山西尾根Ｂ支群を踏査し分布状況を再確認した。

分布調査にあたり主に『宝塚市雲雀山古墳群』[13]の分布地図を参考にし、記載されている雲雀山西尾根Ｂ支群の１０基全てを確認した。更に国の昭和４３年度調査の記録がある４号墳の北西部の２基、『平井古墳群』[12]にＡ３６号墳の北方の１基、そして新たに２号墳の南方に１基を確認した。

現在のところ『宝塚市雲雀山古墳群』に記載されている西尾根Ｂ支群の１０基について東より１号墳から１０号墳まで古墳番号がふられている。しかし上記の４基にはなされていないため今回新たに古墳番号をつけ、１１・１２・１３・１４号墳とした。このうち１１・１２・１４号墳については古墳でない可能性もある（第２図参照）。

今回の分布調査でこれまでに報告されていて確認できなかったのは、兵庫県教育委員会の昭和４０年度調査の記録[10]にある９号墳西方の１基、及び大正４年の笠井新也氏の報告による[1]１０号墳南西部の３基である。この両地点は現在削平されており、畑等に使用されている。

以上、現存確認できる古墳及び古墳の可能性のあるものは総計１４基である。

また現状が観察できる１４基については、１・３号墳が小型無袖横穴式石室を有するいわゆる７世紀型の古墳であり、１３・１４号墳についても７世紀型の古墳である可能性が強い。他の10基は６世紀型の古墳であると思われる。　（三谷）

(2)　古墳の調査結果

(a)　雲雀山西尾根Ｂ支群６号墳

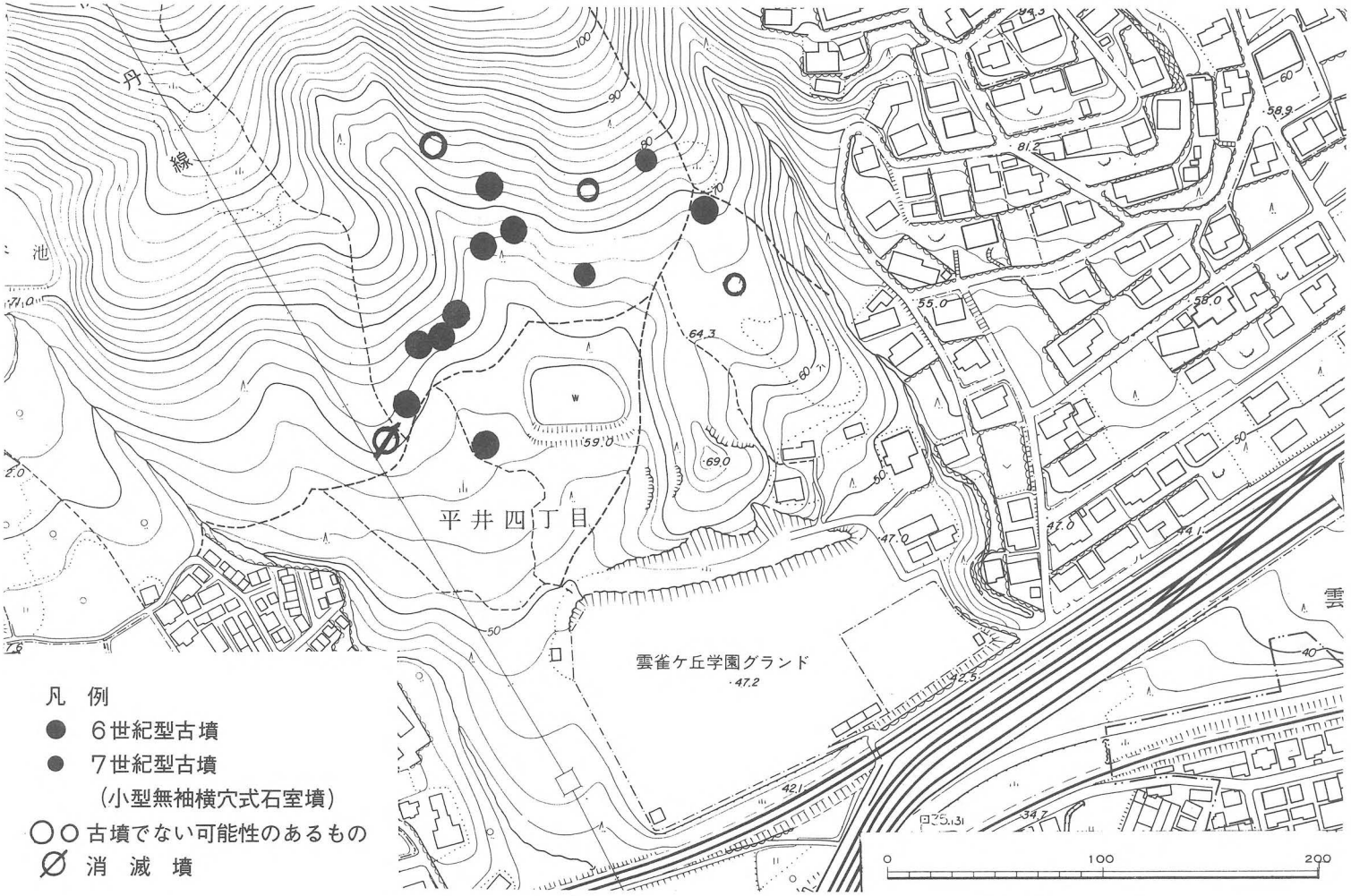
＜墳丘＞

当古墳は標高約６２ｍに位置している。

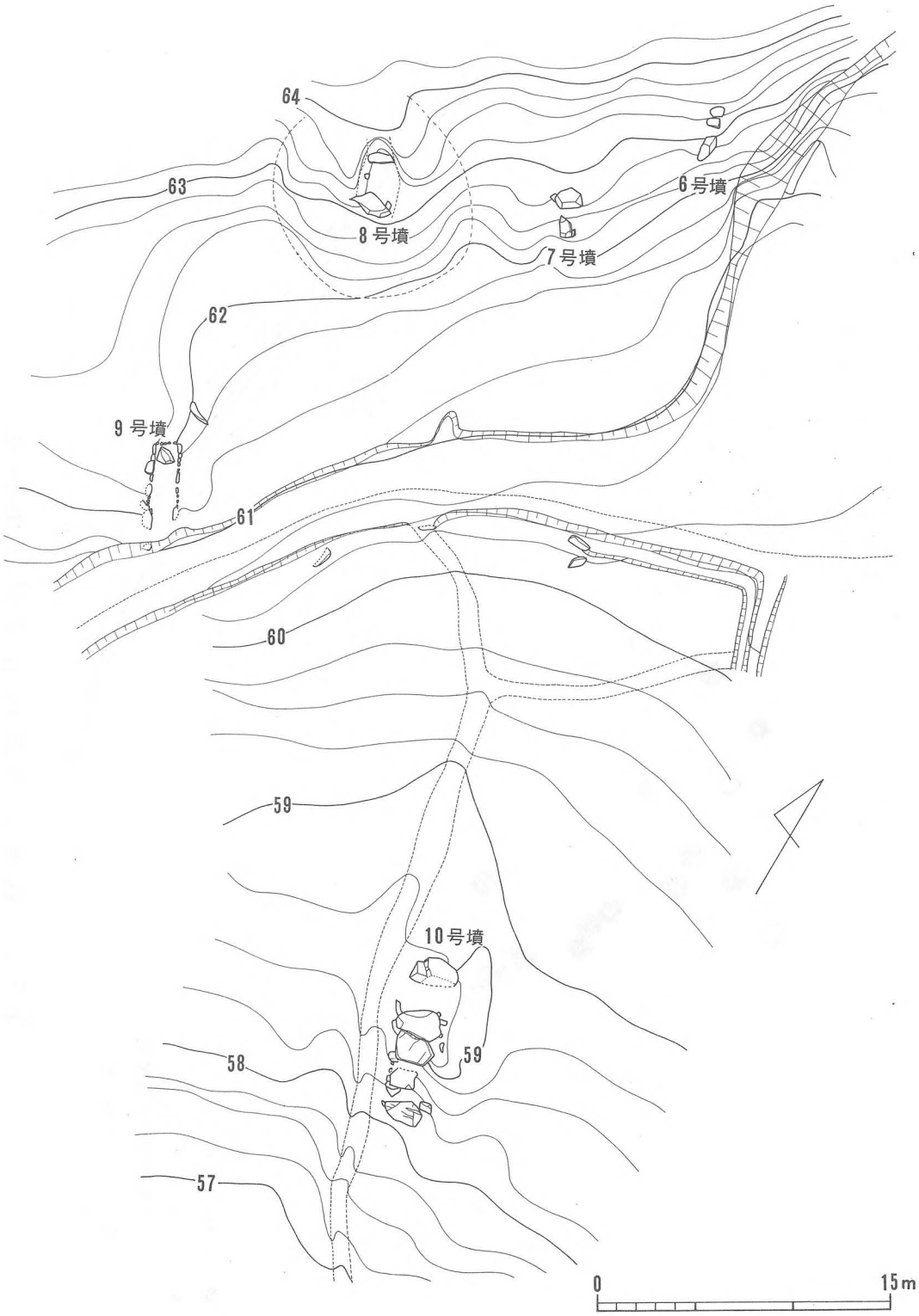
墳丘は封土の流出が著しく旧状を把握することは困難である。また墳丘裾部も東側に削平を受けて急斜面を呈しており旧状を保っているとは言い難いため、墳丘規模は不明である。

＜石室＞

石室は人為的改変あるいは自然流出のため残存状態は極めて悪い。奥壁、東側壁の石材はすでに抜き去られており、現在天井石４枚と西側壁１石が露出するのみであるが、ボーリング棒での



第3図 雲雀山西尾根B支群古墳分布図



第4図　雲雀山西尾根B支群6・7・8・9・10号墳地形実測図

探査によると西側壁は地中に遺存していると思われる。天井石は4枚確認できるものの封土の流出とともに崩落、移動しており石室規模は不明である。（木谷）

(b) 雲雀山西尾根B支群7号墳

＜墳丘＞

当古墳は8号墳に西側で接する標高約62mに位置している。

墳丘は封土の流出により南側、西側がわずかに旧状を保つ他は崩壊状態であり、墳丘規模は不明である。

＜石室＞

残存状態は極めて悪く天井石2枚、側壁2石が露出しているのみであるが、いずれも移動しているものと思われるため石室規模は不明である。（中村）

(c) 雲雀山西尾根B支群8号墳

＜墳丘＞

当古墳は7号墳の東側に隣接する標高約62mに位置している。

墳丘は封土流出による変形がみられるが人為的な削平は認められず、ほぼ旧状をとどめると思われる。今回の地形実測調査によると径約11mの円墳で、墳丘高は約1.5mであると思われる。

＜石室＞

石室上半部における石材は大半が抜き去られており、現在天井石2枚と側壁数石が露出しているのみである。しかし、ボーリング棒での探査によると東西側壁は地中に遺存しており、玄室幅は約1.1mであると推測される。また奥壁部、羨道部については明確にできなかった。（三谷）

(d) 雲雀山西尾根B支群9号墳

＜墳丘＞

当古墳は標高約61mに位置している。

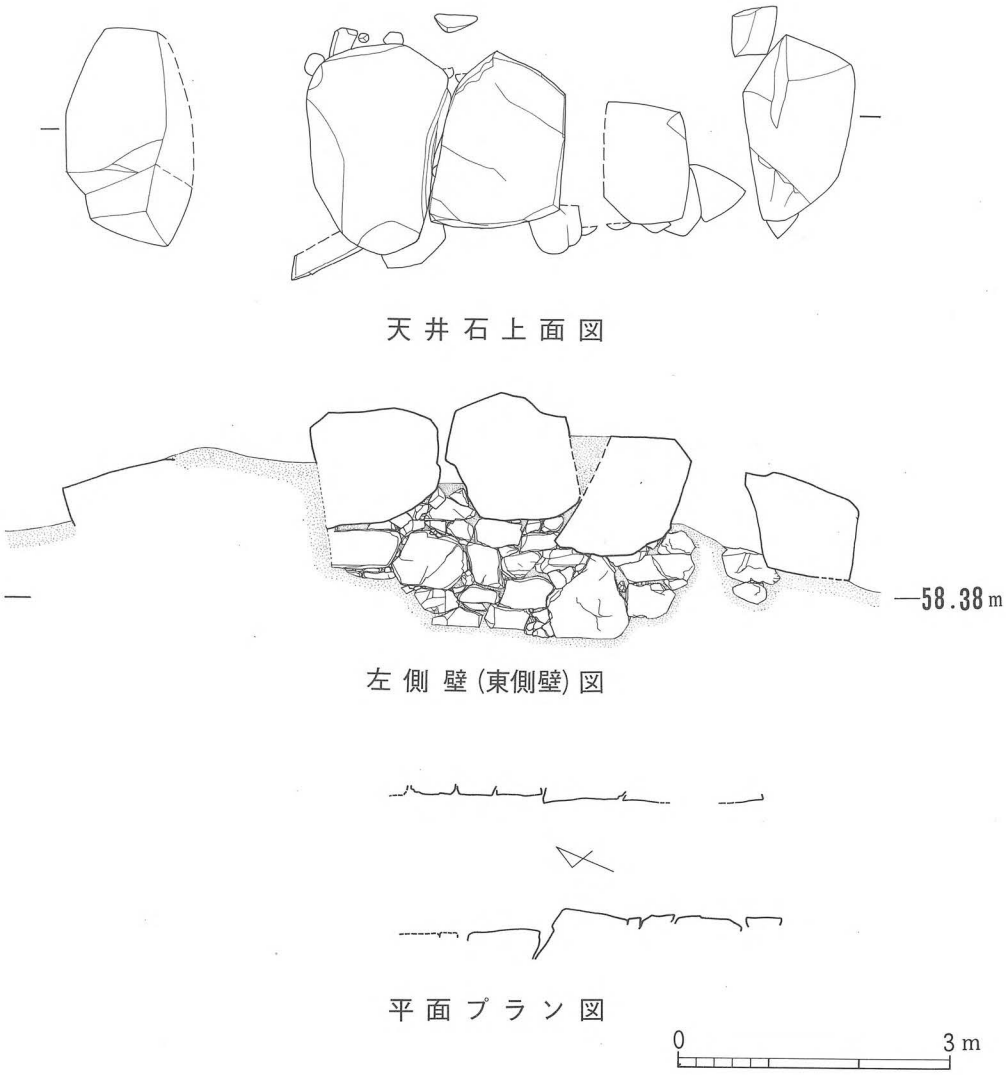
墳丘は全体に削平を受け旧状を保っているとは言い難く、墳丘規模は不明である。

＜石室＞

石室は主軸をN－26°－Wにとる両袖式の横穴式石室で、現在土砂の堆積のため石室上面のみを露出している。石室現存長約4.7m、残存する玄室長3.7m、玄室幅は中央部で1.34mを測り、玄室幅指数は36である。羨道部は小径によって切断されており、残存する羨道長約1.0m、羨道幅は玄門部で1.17mを計り、羨道幅指数は87である。

石室の構築は不明である。また、石室内に側壁に使用されたと思われる石が、付近には天井石と思われる石が点在している。羨道を切断する小径の脇には羨道に用いられたと思われる石も存在する。（土谷）

(e) 雲雀山西尾根B支群10号墳（第3図）



第5図　雲雀山西尾根B支群10号墳石室実測図

＜墳丘＞

当古墳はB支群中で最も南の標高約５８ｍに位置している。

墳丘は封土の大半が流出しているために旧状は知り難い。かって当墳周辺が畑として利用された際に削平を受けたものと思われる。従って墳丘規模の計測は不可能であるが、石室の全長が５ｍ以上あることなどから、墳径は１０ｍ以上になると推定される。

＜石室＞

封土の流出により現在天井石５枚が石室に架された状態で遺存し、側壁の一部も露出している。

天井石のうち南端と北端の２石はそれぞれ南北に動いている。また右側壁で２石程失われているが、石室全体としての残存状態は良好である。

石室は主軸をＮ－１６°－Ｗにとる両袖式の横穴式石室である。石室内には大量の土砂が堆積しており全体の規模等の計測は困難であるため、以下現状での計測値及び表面観察の結果を若干記すこととする。

玄室現存長約 2.3 m、羨道現存長約 2.4 m。床面からの高さは玄室部で約 1.2 m、羨道部で約 0.9 m であり、当墳築造当時の床面にかなりの土砂が堆積していると考えられる。石室内の現状の床面での幅は玄室部で約 1.5 m、羨道部で約 1.3 m を測る。側壁には自然石と割石が使用されているが、左側壁には右側壁よりも比較的小さい石が用いられており、石を多く積むことによって全体としての高さのバランスをとっている。また側壁では持ち送りがほとんど見られない。（納谷）

(3) 小結

上記した５基の古墳は、北から南に延びる雲雀山西尾根の緩やかな南斜面の標高５８ m～６３ m に存在している。６・７・８・９号墳の４基は尾根が一旦緩やかになる裾部に沿って東西に位置し、比較的規模の大きな１０号墳のみが他の４基の南に離れて存在する。

内部主体はいずれも横穴式石室である。９・１０号墳は両袖式であることが確認できるが、６・７・８号墳については遺存状態が良くなく明確にしえなかった。使用されている石材の多くは凝灰岩である。

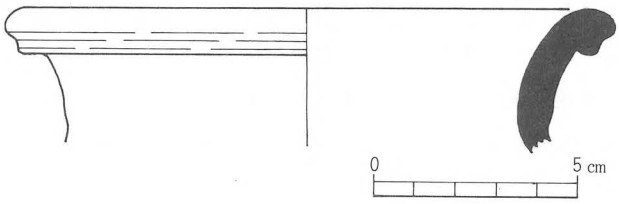
墳丘の形態は６・７・８号墳については、土砂の自然流出により現状が著しく改変を受けているが、円墳であろうと推定できる。しかし、９・１０号墳については現在削平をうけており不明である。

築造年代は石室形態・規模などより、いずれも６世紀後半に比定できよう。　（三谷・中村）

Ⅴ　採集遺物

今回の調査中に若干の遺物が表面採集されたのでここに報告する。

採集された遺物は須恵器、サヌカイトであるがいずれも小破片であり、実測が可能なものはわずか９号墳付近で採集した須恵器の甕口縁部の１点にすぎない。



第６図　採集遺物

須恵器は合計4片である。1点は1号墳の玄室横から表採され、杯の一部と思われる。10号墳の羨道部横の小径で表採された1点は内面に同心円文叩目、外面に平行叩目がみられ甕の胴部と思われる。9号墳羨道部前の小径で表採された1点は甕の口縁部であり、時期としては6世紀後半に比定できよう（第6図）。

平井窯跡の付近で表採された1点は、わずかに自然釉を呈する厚手のもので甕の体部と思われる。大正4年に笠井新也氏が報告した平井窯跡[1]は7世紀後半の須恵器の窯とされるが、この遺物が同窯の製品とするには留保せざるをえない。

サヌカイト片は10号墳南方の小径で表採された。石器の破片ではなく、石器製造時の剝片と思われる。また、笠井氏の報告によると平井窯跡付近にて石鏃の未成品を表採したとあることより、付近には現在のところ弥生時代の遺跡は知られていないが、集落址の存在する可能性がある。

（三谷）

Ⅵ　まとめ

雲雀山西尾根B支群は兵庫県宝塚市切畑字長尾山に存し、雲雀山西尾根の中腹部に位置する。今年度は雲雀山西尾根B支群全体に関して分布確認調査を行なった後、西半の5基について地形及び石室実測調査をした。その成果は各章で示した通りであるが、次にその要点を列記しまとめとしたい。

(1)　分布調査において確認、あるいは古墳の可能性のあるものとされたものは総計14基である。

(2)　そのうち西半の5基（6・7・8・9・10号墳）について地形実測調査を行ない、石室保存状態の良好である10号墳においては石室実測調査を実施した。

(3)　内部主体はいずれも横穴式石室である。9・10号墳は両袖式であることが確認できるが、他の3基については埋没しているため不明である。また、開口方向は7号墳が南々西、9・10号墳が南々東である。他の2基についても現状からほぼ同方向に開口するものと推定できる。

(4)　墳丘形態は7号墳が円墳であることが明確に把握できる他、6・8号墳についても保存状態は良くないが円墳であると推定できる。

(5)　使用石材はほとんどが凝灰岩である。

(6)　10号墳は他の4基がほぼ東西に並んで隣接して立地するのに対して南に離れて位置する。また、その石室規模、使用石材については他の4基に対し、比較的大型であるといえる。

(7)　調査中、表面採集された遺物は須恵器、サヌカイト片である。うち時期が判るものは、9号墳羨道部前の小径で採集された須恵器の甕口縁部片で、6世紀後半に比定されよう。

(8)　5基の築造年代は、石室規模、形態、採集遺物等から、すべて6世紀後半に比定できよう。

（三谷）

宝塚市雲雀丘古墳群C北群4号墳出土の須恵器

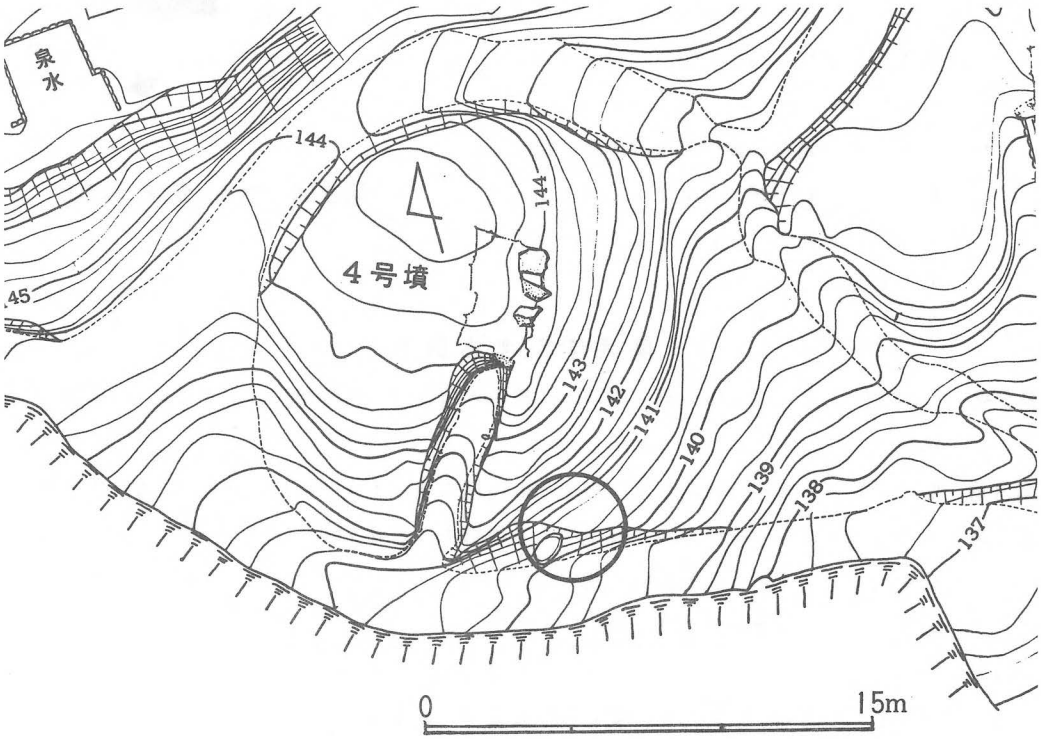
直宮憲一

ある機会で亥野彊氏（関西大倉高校教諭）の所蔵する須恵器が、雲雀丘古墳群C北群4号墳出土のものであることが判明したのでここに紹介する。

記録によるとこの須恵器は昭和38年12月26日に亥野氏の他石野博信氏らが古墳見学中に発見したもので、露頭していたものを採集した由である。完形品ではないが　胴部破片と台付壷が出土している。甕は胴部が残存するだけで明確なことは判明しない。

この古墳はその時の略測図から雲雀丘古墳群C北群4号墳[1]と判明したもので、この略測図がなければ出土地付近の現況に大きな変化をきたしているため明確にはなりえなかったであろう。出土場所は石室羨道入口右辺（南側）の墳丘裾部から出土しているが、石室内から出土したものではないので、ただちにこれをもって古墳築造年代を推することはできないが、遺物の出土が知られず手がかりのなかった古墳の年代を推せられる資料として貴重なものである。

形態の明らかなものは台付壷で、器高は不明である。胴部最大径17.6㎝を測る。肩部から胴部に入る所に一条の凹線を持ち最大腹部を経てなだらかに底部に至る。外面はロクロによる横ナデを施し仕上げている。また壷部の底部は粗いヘラケズリ後、布でナデて仕上げている。胴部下



第1図　須恵器出土地点（原図『関西学院考古』5）

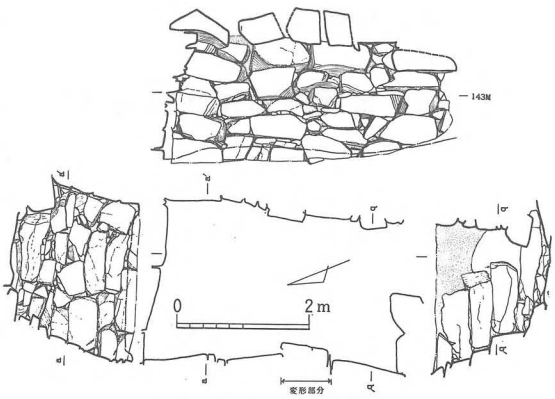
方に横ナデと刷毛による仕様痕を文様状に意識的に残している。台の脚部ははりつけで二段透かしを持っており、はりつけたあとナデて仕上げている。内面奥はしぼり上げている。透かしは外より刺突し切りこんでいる。二段の透かし中央に一条の凹線をもち表はロクロによるナデを行なっている。焼成は堅緻で、暗灰色（外面）、内面は灰色で胎土には石英等の細粒砂を含む。

時期は６世紀前半から中葉のものであろう。

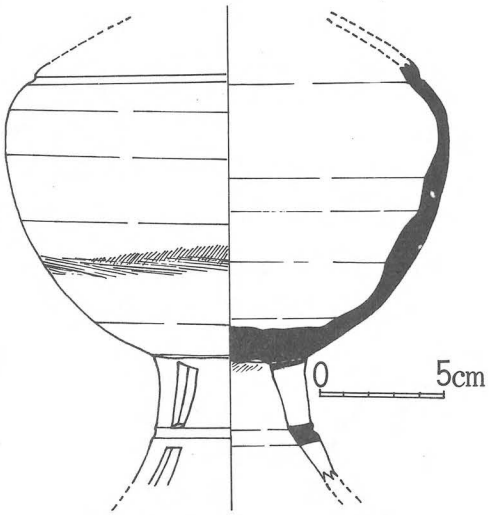
雲雀丘古墳群Ｃ北群４号墳は、方形に近いプランとその指数から従来６世紀前半頃の築造と考えられ②、雲雀丘古墳群中ではやや古式のタイプに属すると考えられており、雲雀丘古墳群の築造開始時期を考える上でポイントになる古墳であろう。今後の資料の増加がのぞまれる次第である。なお資料提供を御快諾いただいた亥野氏に謝意を表します。

註①関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群(Ⅱ)－雲雀丘古墳群－」（『関西学院考古』№５　１９７９年）

②白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一考察－河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として－」（『古代学研究』４２・４３合併号　１９６６年）



第2図　石室実測図



第3図　台付壺実測図

関西学院考古既刊

第2号　関西学院大学考古学研究会／関西学院構内古墳現状・遺物報告（本文３２Ｐ、図版７葉）絶版

第3号　関西学院大学考古学研究会／仁川流域の後期古墳（本文２４Ｐ、図版１３葉）　絶版

第4号　関西学院大学考古学研究会／長尾山の古墳群(Ⅰ)、折井千枝子・坂井秀弥／西宮市甲風園採集の弥生式土器、岡野慶隆／横穴式石室の平面形について（本文２８Ｐ、図版１７葉）頒価￥７００（〒共）　残部僅少

第5号　関西学院大学考古学研究会／長尾山の古墳群(Ⅱ)・西宮市獅子ケ口の須恵器・関西学院構内採集の須恵器、坂井秀弥／雲雀丘学園所蔵の長頸壺、岡田務／猪名県と畿内の県（本文３４Ｐ、図版８葉）頒価￥９００（〒共）

西宮市満池谷墓地内奥畑古墳について

古川久雄

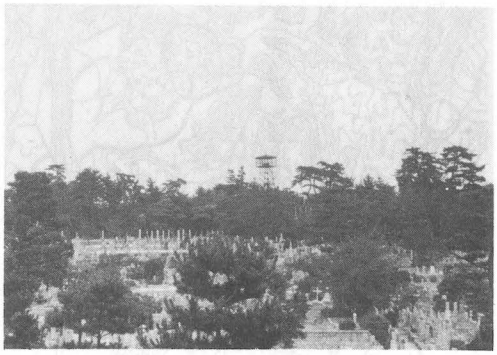
1　はじめに　――遺物採集の契機――

西宮市奥畑の満池谷墓地内に古墳が存在することは、かって田岡香逸氏が指摘している。昭和初年同氏がここで埴輪片等を採集し、氏の編集にかかる紅野芳雄氏の遺著『考古小録』の付図において古墳のマークを記したものである。ところが不幸にも、氏宅が戦災にあい、膨大な書籍類や多数の採集遺物とともにこの埴輪も焼失したため、その詳細を公にするにいたらなかった。このため、その後研究者の間で注目する者もなくほとんど忘れ去られた状態であった。

筆者は昭和４９年頃から前記『考古小録』を親しく読む機会があり、その中で付図にさりげなく記されたこの古墳のマークに強い興味をもった。折りから具足塚古墳の発掘調査が行なわれ、門戸天神裏古墳の出土遺物が注目された頃で、これらと同種の古墳が他にもっとあるだろうと思えたからである。しかし踏査の必要を感じていながらなかなか重い腰が動かず、翌５０年１０月に至ってようやく現地を訪れた。

付近は昭和３年より始まった満池谷墓地の造成と越水浄水場の建設によって、微地形的にはまったく本来の状況をうかがえない状態で古墳らしきものは見あたらなかった。しかし墓地東端の最高所において墓石の間に埴輪須恵器小片の散布する部分がみられ、かって古墳の存在したことをようやく認識することができた。

本稿ではこの採集遺物と、古墳の地理的・歴史的環境に重点をおいて報告してみたい。



第１図　古墳の遠望

2　周辺の遺跡―後期古墳の分布

古墳の概要を述べる前に歴史的環境として、やや視野を広げ付近の後期古墳の分布についてふれてみたい。

西宮および芦屋周辺においては前中期の古墳は顕著なものが少ない。ところが古墳時代後期（６世紀～７世紀前半）になると古墳の分布は濃密となる。これをやや詳細にみると群集墳の盛行する後期後半（６世紀後半以降）の古墳とそれ以前の古墳が立地環境に明瞭な差をもって分布する。

後者は上ケ原台地縁辺部の尾根上にそれぞれ占地する門戸天神裏古墳①・岡田山古墳・具足塚古墳②等を代表とし、夙川西岸丘陵上の王子ケ丘古墳や打出駒塚古墳③、上ケ原台地のほぼ中央にあった上ケ原車塚古墳と津門大塚古墳の２基の前方後円墳などあげられる。いずれも６世紀前半から

1. 朝日ケ丘遺跡
2. 甲風園遺跡
3. 仁川五ケ山遺跡
4. 仁川高台遺跡
5. 仁川百合野遺跡
6. 甲陽園東山遺跡
7. 甲陽園山王遺跡
8. 甲陽園大池遺跡
9. 六軒山遺跡
10. 甲東園天神社遺跡
11. 岡田山遺跡
12. 愛宕山遺跡
13. 越水山遺跡
14. 久出ケ谷遺跡
15. 西宮神社社頭遺跡
16. 打出地造り遺跡
17. 打出岸造り遺跡
18. 甲山銅剣出土地
19. 津門銅鐸出土地
20. 打出銅鐸出土地
21. 親王塚古墳
22. 津門稲荷山古墳
23. 金津山古墳
24. 奥畑古墳
25. 上ケ原車塚古墳
26. 門戸天神裏古墳
27. 岡田山古墳
28. 具足塚古墳
29. 王子ケ丘古墳
30. 打出駒塚古墳
31. 朝日ケ丘須恵器出土地
32. 津門大塚古墳
33. 仁川旭ケ丘古墳群
34. 五ケ山古墳群
35. 五ケ山西古墳群
36. 上ケ原古墳群
37. 神園古墳群
38. 八十塚古墳群
39. 高塚山古墳群
40. 翠ケ丘古墳群
41. 仁川入組野古墳
42. 広田No. 2 遺跡
43. 広田No. 1 遺跡
44. 越水城跡

第2図　遺跡分布地図

中葉の築造が考えられ、全体にみるとそれぞれが近接せずに散在的な分布状態がみられることと、その多くが地形的にきわだった前期古墳的立地をもつことが注目される。

今回報告する奥畑古墳もこの一群に属し、その中でも最も初期に築造されたものと思われる。

次に群集墳の分布をみると、仁川の流域から芦屋川の流域にかけての山麓部に多数の古墳群がみられ、それぞれいくつかのグループに分けることができる。

仁川流域にはその北岸にやや散在的な古墳分布をもつ五ケ山・五ケ山西・仁川旭ケ丘の古墳群があり④、南岸にはもと数１０基の古墳が濃密に分布していたと考えられる上ケ原古墳群がある。また打出丘陵地方の台地上には芦屋・西宮両市にまたがって本地域最大の八十塚古墳群⑤（所在確認数４３基）が展開し、その南には内容が不明ながら高塚山古墳群・緑ケ丘古墳群がある。さらに西方へゆくと、芦屋川の支流高座川をはさんで北東側には城山南麓古墳群、南西側には三条古墳群がある。ともにカマド形土器を出土しており、前者には玄室幅 3.15*m*に達する巨石古墳、山芦屋古墳を含むなど本地域の群集墳の中でも異彩をはなっている。

以上３群が複数の群集墳の集塊するブロックとして注目されるがこの他にも小規模な群集墳はいくつかみられる。まず、本稿に報告する奥畑古墳の西北西８００*m*の獅子ケ口に所在する神園古墳群⑥で、その特異な占地と近辺の群集墳から出土するものとはかなり違ったタイプの須恵器が特徴的である。芦屋川東岸の天神山丘陵⑦や、神戸市東灘区岡本周辺の山麓部にも小規模な群集墳が存在したらしいがこれらについては早くから破壊が進み、既に具体的状況を知り難くなっている。

このように本地域における後期古墳の分布および内容はきわめて複雑な状況を呈しており、以前に比べればかなりその実態が整理されわかってきたとはいえ、これらの政治的、社会的、経済的、文化的基盤を通して本地域の古墳時代を歴史的にうかびあがらせるところまでには致っていない。そのためにも個々の古墳および古墳群の正確な実態把握・再評価が必要であり、中でも消滅墳のそれは至上の急務といえよう。

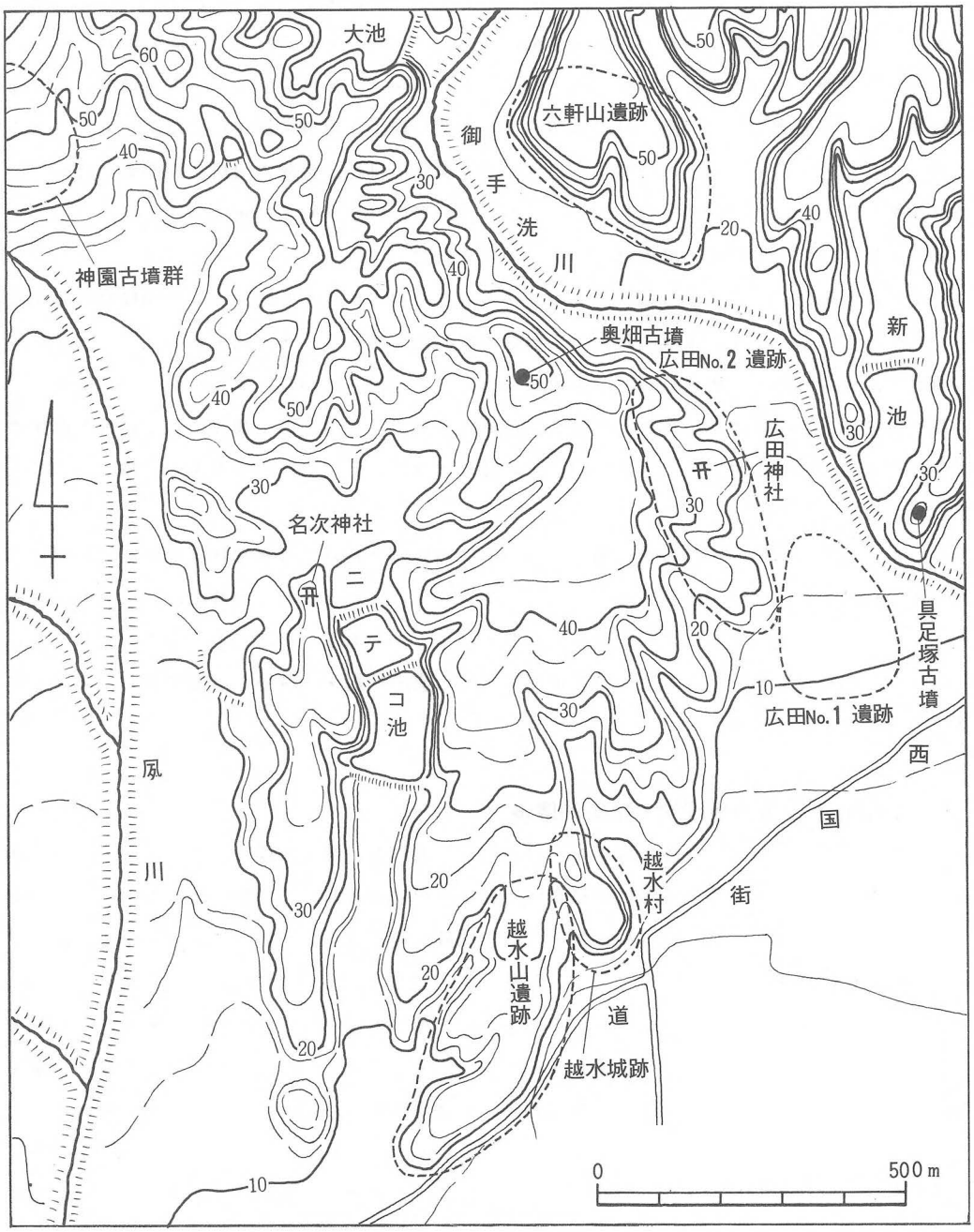
３　広田越水丘陵の地理的・歴史的環境

次に奥畑古墳の立地する丘陵に視点をくばってその地理的、歴史的環境をながめてみたい。西宮市の位置する六甲東南麓の地域は洪積台地・丘陵の発達が著しく、花崗岩からなる六甲の山地部と武庫川を代表とする河川の沖積平野との間に明確な中間地形を形成しており、前項で紹介した古墳や弥生遺跡の多くがこの台地および丘陵上に占地している。またこれらの丘陵（台地）は仁川・御手洗川・夙川・宮川・芦屋川などの中規模の河川によっていくつかに分断され、それぞれが明確な独立地形をなしている。主なものを東から列挙すると、上ケ原台地・広田越水丘陵・岩ケ平打出丘陵・天神山丘陵などで本編に報告する奥畑古墳はこのうちの広田越水丘陵に立地する。

広田越水丘陵は東を御手洗川、西を夙川に画され、北は大池の南側付近で北東から細くのびてきた尾根に連なり、南はいくつかの小さな尾根に分れて直接平野に臨んでいる。南北約 1.8 *km*東西約 1 *km*におよぶ独立丘陵であるが、詳細にみるとかなり複雑な地形をなしており、特に北部と

中央以南ではかなり状況が異なっている。現在満池谷墓地や大社中学校、神原小学校などがある北部は、今ではまったく旧状を知ることはできないが全体に大阪層群が露出しきわめて複雑に入りくんだ地形をなしていたらしい。戦前、三木茂博士によって発見され、ラリックス層と命名されて著名な植物遺体包含層はこの地形の最高所付近に保存されている。

これに対して中部以南は大阪層群の上部を覆う段丘礫層が発達し、これに伴う広やかな緩斜面



第3図　広田越水丘陵の地形復元図

が形成されており、台地と呼ぶにふさわしい地形をなしている。そしてその周縁、特に東から南にかけては開析が進み多くの小谷部が入りこんでおり、中でも中央やや西よりにはニテコ池の造られた南北１㎞、東西１００ｍにおよぶ大きな谷が存在し明確に台地を東西に二分している。

次に歴史的環境の面からこの丘陵を簡単に見てみると、先土器、縄文時代の遺物、遺構はこれまで確認されておらず、まず最初に人間が生活址をとどめるのは台地南端の越水山遺跡（弥生後期）⑧である。

古墳時代に入ると丘陵東麓の広田神社付近に広い範囲で須恵器・土師器（５世紀～７世紀のもの）の散布する部分がある⑨。特に広田山荘の周囲では埴輪片らしきものも採集しており⑩、地形からみて古墳の可能性もある。また、その東側の低地部に集落の存在も推定されるが、それらの検討は将来にゆだねたい。一方ではいわゆる延喜式内社がこの丘陵上に２座あることも注目される。広田神社と名次神社で、このうち広田神社の創建の場所は現在地より御手洗川をこえて北方の丘陵上だったといわれるがよくわからない。名次神社は現在ニテコ池の北西部に小石祠を残すのみとなっているが、もとは台地の南端、越水山遺跡のあたりに存在したらしい⑪。

平安時代になると都から中国・四国・九州へ通ずる幹線道路の西国街道が丘陵の南東麓をかすめて通る。この交通の要衝となったことと、丘陵南東麓に豊かな湧水があったことから越水の集落ができ、室町時代には瓦林正頼が越水城を築いた。また古代から中世の初期にいたるまで丘陵南東部の低地は広い範囲で入江あるいは沼沢地のまま状態が長く続いたらしく⑫越水山遺跡周辺でも漁民の存在を推定させる小型の土錘が多数採集されている⑬。

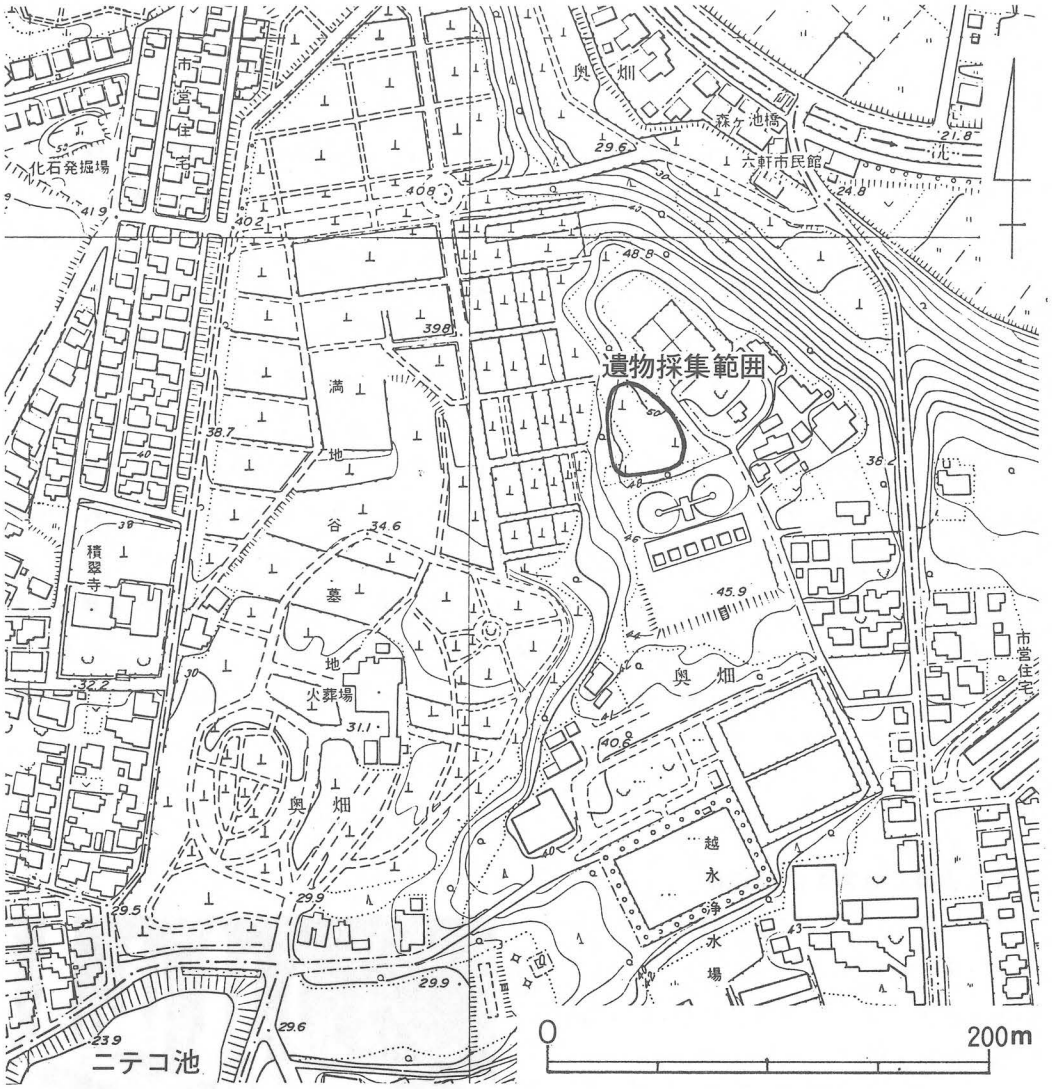
４　古墳の概要および現状

本稿に報告する奥畑古墳は前項に詳述した広田越水丘陵の中央からやや北東に扁した、標高後50ｍのピークに立地する。微地形を復原すると、北東側は比高２５～３０ｍの急斜面が御手洗川につづき、対岸に六軒山を望む。西側も比高約１５ｍのやや急な斜面があるが南東側はなだらかに下降する地形になり、概して上面はかなり広い平担地である。

第４図　遺物採集地の現状

しかし現状は西側の谷部分が大きく整地されて満池谷墓地となり、古墳の立地する緩斜面上にも大規模な越水浄水場ができて微地形は完全に改変させられている。したがって古墳の位置も遺物の分布範囲のみの手がかりであるため厳密には正確といい難い。

遺物採集地点は前述のピークの南西よりで、北・東・南を浄水場の敷地に囲まれ、西側の墓地より一段高い墓域となっているところである。よく見ると洪積層の地山が露出している部分もあり、かなり削平・整地されていることがわかるが、それでもなお林立する墓石の間のあちこちに須恵器・埴輪の細片が散布している。この遺物の破砕状態や無秩序な分布状況をみても古墳破壊



第5図　遺物採集地周辺の現況図

のすさまじいようすがうかがえる。

このように本墳については墳形や墳丘規模などまったく何もわからないが、ただ内部構造については極めて消極的ながら考える材料はある。つまり石室用石材がまったくみられないことである。いうまでもなく武庫川以西の地域には多数の古墳が分布するが、内部構造の知られているものは、すべてが竪穴式石室か横穴式石室であり粘土槨や木棺直葬などをもつ古墳はまったくない。これには粘土槨や木棺直葬が他地域で多く採用された古墳時代中期から後期前半にかけての古墳が総体的に少ないということと、横穴式石室の構築に適した花崗岩が極めて普遍的に存在することなどの理由が考えられるが、いずれにしろ本地域の古墳時代を通じてみられる大きな特色である。

この点からいえば本墳の内部構造も横穴式石室と考えることが自然ではあるが、それらしい石

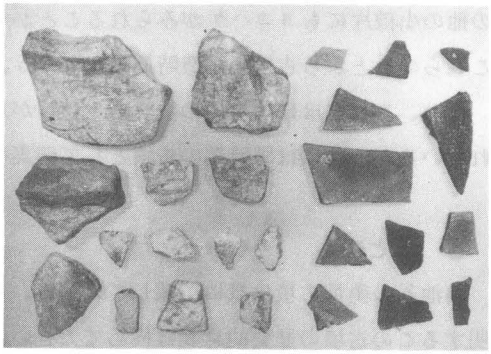
材が付近にまったくみられないという事実はやはり一考を要するだろう。もちろん大々的に破壊された古墳であるから石室用材をすべて抜き去り墓地内各所の石垣や墓石に転用したことも充分考えられるが、もともと石材を用いない粘土槨などの内部構造であったとしても、消極的ながら一応の説明はつく。

まず第１点として、付近に適当な石材が得られないことがあげられる。本地域の後期古墳はほとんどが段丘礫層上に占地し、礫層中の花崗岩をふんだんに利用しているが、本墳の南方に広がる礫層には大きな花崗岩塊を含んでいないため、横穴式石室の構築には不便であり、あえて石材のないところに古墳を築造したのは石材を不用としたからではないだろうか。第２点はその築造時期である。次項で述べるように本墳の築造時期は少量の遺物より、５世紀末から６世紀初頭の時期が考えられるが、その時期に属する横穴式石室として確実なものは本地域ではまだ知られていない。芦屋市三条岡山遺跡でほぼ同時期の須恵器、埴輪が出土して、古墳の存在が推定されているが、石室は確認されていない。[14] 現在わかっている最も初期の横穴式石室は具足塚古墳・門戸天神裏古墳の６世紀前半から中葉の時期である。本墳がこれより横穴式石室であったとしても不自然ではないが、横穴式石室採用の前段階に粘土槨などが採用されていたと考える方がより自然なように思える。

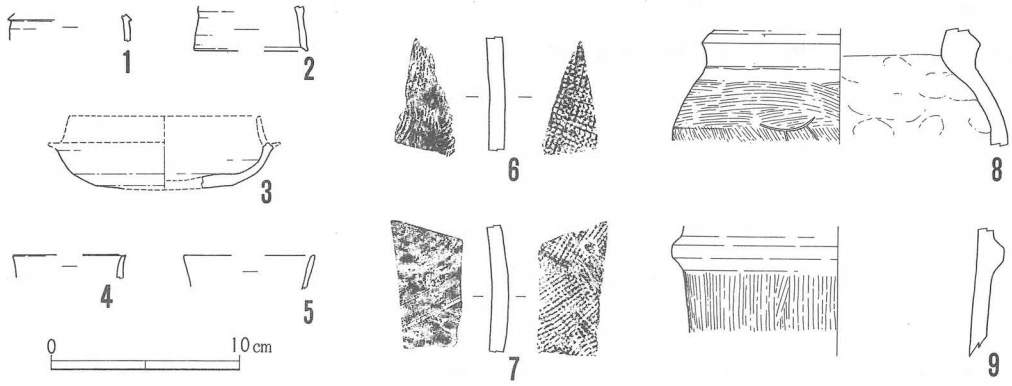
5　遺物の観察

採集遺物は須恵器片１９点と埴輪片１１点である。[15]

須恵器はいづれも細片でわずかに器形をうかがえる程度のものにすぎない。①は杯蓋肩部である。内外面とも強いロクロナデで調整され、肩の稜は極めて明確な段になっている。②は杯蓋口縁部で口端部内面に明瞭な端面をもつ。内外面ともロクロナデ調整。③は杯身であるが受部とたちあがりを欠損するため特徴をつかみにくい。内面から口



第6図　採集遺物



第7図　採集遺物実測図

縁直下にかけてロクロナデ調整がなされ、底部はヘラケズリ整形。④は杯身のたちあがりと思われる。やや外反し端部は中央のやや窪んだ端面をなす。内外面とも強いロクロナデ調整。⑤は何らかの口縁部片で、高杯かとも思えるがはっきりしない。やや外傾するようで、端部は少し丸くなる。内外面ともロクロナデ調整。⑥は甕の胴部片である。外面は明瞭な格子タタキ目文が残り、内面は同心円文をほぼ完全に擦り消した後一部刷毛目調整を施す。⑦も甕の胴部片で⑥と同じく外面は格子タタキ目が明瞭に残り、内面は同心円文を擦り消している。なお⑥と同一個体と思われる破片が他に3点あり同じく⑦の同一個体も4点ある。

埴輪片は全部で１１片あるが多くは極小片で図示できたのは2点のみである。⑧は朝顔型埴輪の肩部である。上部に断面3角形のタガがあり、その下から肩にかけて張りの少ない丸みをなす。タガとその直下はヨコナデ調整が施され、肩から下は外面2次調整のタテハケ、その間の斜面部分には1次調整のヨコハケを残す。内面は強いナデ調整で、下部には指圧痕が顕著に残る。タガ部分の径１4.6㎝、肩部の径１7.6㎝、残存高6.0㎝を測る。なお肩部にヘラ描きの記号文のようなものが見える。⑨は通常の円筒埴輪である。磨滅が著しいため細部の観察に堪えないが、タガはヨコナデ、その他はタテハケ調整で内面の調整は不明。タガ径は１7.5㎝を測る。

以上の遺物はいずれも小片あるいは細片であるため時期決定は困難であるが、須恵器は口縁端部の状況や杯蓋の稜、甕胴部外面の格子タタキ、同内面の同心円文擦り消しなどからＴＫ２３ないしＴＫ４７の時期が考えられよう。[16] 一方埴輪はタガが台形状をなすこと、⑧の朝顔型埴輪やその他の小破片にもヨコハケがみられることから、一応川西編年のⅣ期後半の時期が考えられる。[17] これらのことから古墳の築造時期はおよそ5世紀の末から6世紀初頭と推定しておきたい。

なお、これとほぼ同時期の須恵器・埴輪が芦屋市三条岡山遺跡から出土し古墳の存在が推定されているが、他には同時期の古墳として確実なものは本地域では知られていない。

6　まとめ

満池谷の奥畑古墳は既に消滅して久しい。しかし本稿で報告したわずかの遺物がその存在を証明するこの古墳の歴史的意義は極めて大きい。極端な言い方をすれば多分に中期古墳的内容をもちながら、本地域の後期古墳時代の開幕を告げるような性格をあわせもっていたかと思える。

今後の芦屋・西宮地区の古墳時代研究は、個々の古墳と古墳群の実態把握に努めるとともに、首長系譜の追跡、古墳と生産基盤・地域集団との関係など考えるべき問題は多いが、その中で奥畑古墳も見落すことのできない存在として位置づけるべきであろう。

＜註＞

① 坂井秀弥「門戸天神裏古墳」(『関西学院考古』№3　関西学院大学考古学研究会　1976年)

② 勇　正広・藤岡　弘他『具足塚発掘調査報告』（西宮市文化財調査報告第1集　西宮市教育委員会　１９７６年)

③ 村上欣三「摂津国打出村の古墳」(『考古界』8篇2号　日本考古学会　１９０５年)
古川久雄「芦屋市打出駒塚古墳について」(『武陽史学』第１５号　武陽史学会　１９７６年)

④　この三つの古墳群は一連の群集墳として把握した方が自然とも思えるが、遺存基数の少なくなった今日では、その是非は論じにくくなっている。

森岡秀人「書評　『関西学院考古』№３　－西摂地域群集墳解明への一布石」(『芦の芽』№３２　芦の芽グループ　１９７９年)

⑤　勇　正広・藤岡　弘「古墳時代」(『新修芦屋市史』資料篇１　芦屋市　１９７６年)

勇　正広・藤岡　弘・古川久雄『苦楽園の古墳』（西宮市文化財調査報告書第２集　西宮市教育委員会　１９７８年）

森岡秀人他「芦屋・八十塚古墳群岩ケ平支群の調査」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第４集　兵庫県教育委員会　１９７９年)

⑥　櫃本誠一他「夙川学院構内古墳調査報告」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第１集　兵庫県社会文化協会　１９７１年)

⑦　戦前、芦屋市域で精力的に遺跡の踏査を続けられた吉岡昭氏の採集遺物の中に、この天神山丘陵に属する笠ケ塚と記録された、新羅製と思われる有蓋高杯がある。

古川久雄「市内出土の古墳時代遺物」（『新修芦屋市史』前掲書）

⑧　大正から昭和初年にかけて、田沢金吾・紅野芳雄・田岡香逸・山田博雄らの諸氏がさかんに踏査しており、最近では勇正広氏・大機勝氏などが遺物を採集している。

紅野芳雄『考古小録』（西宮史談会刊　１９４３年）

森岡秀人「越水山遺跡」（『新修芦屋市史』資料篇１　芦屋市役所　１９７６年）

⑨　大機勝・藤川祐作・松井雅司・太田博英（いずれも芦の芽グループ）などの諸氏が多数の遺物を採集しているが、遺跡の実態はよくわからない。

⑩　昭和５４年９月２日、藤川・古川が付近踏査の際採集した。通常の円筒埴輪ではなく、何らかの形象埴輪の破片と思われ、また土師質陶棺片の可能性もある。これについては別に報告の機会をもつこととしたい。

⑪　田岡香逸『日本神信仰史の研究』（民俗文化研究会　１９７１年）

⑫　入江の状態については田岡香逸氏が地形復原を試みている。

田岡香逸「宮水」（『西宮市史』第１巻　西宮市役所　１９５９年）

⑬　紅野芳雄氏・山田博雄氏が多数採集しており、いずれも長さ３～４㎝、断面径１㎝内外の筒形をなす小型のものである。

⑭　石室用材の可能性が考えられる花崗岩塊は出土している。

村川行弘・森岡秀人他『三条岡山遺跡』（芦屋市文化財調査報告第１０集　芦屋市教育委員会　１９７９年）

⑮　３０点の遺物のうち一部については、山本明彦氏（西宮市一里山町在住、現在奈良大学文学部学生）の採集による。

⑯　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古学クラブ　１９６６年)

⑰　川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』６４巻２号　日本考古学会　１９７８年)

五色塚古墳出土の古式土師器とその編年的位置づけ

兼　康　保　明

1．はじめに

明石と淡路島の間に横たわる明石海峡は、別名明石瀬戸ともよばれその風景の美しさは、古くから多くの旅人の心をゆり動かしてきた。この美しい海峡の地形は、六甲山地とその延長である北淡路の津名丘陵との間が陥没してできたもので、幅約４㎞、船で横断すれば約２０分ほどの狭い場所である。したがって、大阪湾の入口を扼する海路の重要な位置を占めている。

五色塚古墳は、明石海峡を眼前にのぞむ神戸市垂水区五色山四丁目の、海岸線に近い洪積台地上に立地している。古墳は、総長約２２０ｍ（全長１９７ｍ、隍の幅約１０ｍ）を測る巨大な前方後円墳で、その規模は県下最大であるばかりでなく、畿内の代表的な大古墳に匹敵するものである。

こうした県下第一の規模をほこる五色塚古墳は、早くから考古学者や郷土史家などの注目するところであった。そうした人々が一度は抱く疑問に、五色塚古墳の築造年代があげられよう。

2．五色塚古墳の年代観

五色塚古墳の築造時期については、葺石におおわれた三段築成の巨大な墳丘と、それをめぐる周隍、千壷古墳の別名にふさわしい多量の埴輪の使用などから、古墳時代を前・中・後期の三期に分けた中期――最盛期の古墳と久しく考えられていた。また、古墳時代を前期と後期の二期に大別し、前期を四区分、後期を三区分して細かく各地の古墳の変遷を追った『日本の考古学』Ⅳでは、「墳丘の規模あるいは内部構造・副葬品の内容にもっとも巨大な権力の表示がみとめられる時期、つまり五世紀代前半に中心をおく」前・Ⅲ期の古墳として編年されている。[①] この前・Ⅲ期は、畿内では大阪府応神天皇陵古墳、仁徳天皇陵古墳、地方では岡山県造山古墳、作山古墳などの巨大な古墳を代表例として示していることから、三期区分と対比すれば中期前半に該当しよう。

ところが昭和４３年、笹倉忠雄氏によって一つの試みがなされた。笹倉氏は、五色塚古墳の墳丘実測図をもとに、上田宏範氏の計測点方法による前方後円墳の型式編年[②]を適用して、その築造年代にせまろうとしたのであった。また、墳丘の形態が類似する古墳として、大阪府和泉黄金塚古墳、奈良県崇神天皇陵古墳、神功皇后陵古墳、日葉酸媛陵古墳など、『日本の考古学』で前・Ⅱ期に分類された四古墳をあげ、五色塚古墳との比較もおこなっている。こうした検討から笹倉氏は、「（五色塚古墳は）形態上から和泉黄金塚古墳・日葉酸媛陵・神功皇后陵と類似の形態であり、立地条件その他においても（三期区分の）前期末の古墳と類似している。

また上田宏範氏説の計測点方法によって測定しても、Ａ群となって、前期的要素の強い古墳となるので、五色塚（千壷）古墳を前期末古墳と考察するものである。（一部筆者補註）」と結論づけ、従来の説よりさかのぼった四世紀末の年代観を提唱するに至ったのである。[③]

笹倉説より後の五色塚古墳の築造年代観は、神戸市教育委員会による復原・整備事業の中間報

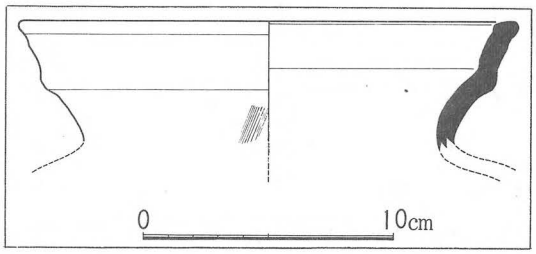
告[④]では、「五色塚古墳の築成方法は、丘陵上に築かれた前期古墳のそれよりも、むしろ平野部に周濠をめぐらして築かれている、いわゆる中期古墳の築成方法に近いということができる。」としながらも、「築造年代については、一応四世紀末から五世紀初頭と考えている。」と結んでいる。また、櫃本誠一氏の「兵庫県下における前方後円墳」[⑤]、『兵庫県史』における西谷真治氏[⑥]なども、五色塚古墳に四世紀末から五世紀初めの時期を比定している。こうした見解は、笹倉氏と時代区分上の前期と中期について多少ニュアンスのくい違いがあるものの、その年代観は笹倉説を大幅に変更するものではない。これとは別に西谷氏は、五色塚古墳出土の盒の時期について、四世紀後半から五世紀前半までの限定された期間の古墳に副葬されることをあげており[⑦]、笹倉説を遺物の面から傍証した結果となっている。

しかし、こうして決定された古墳の年代観と、各地で調査例の増加した古墳時代の集落の年代観と、はたして同じレベルで比較検討が可能かどうかについて、私は久しく疑問を抱いていた。と言うのは、前者の場合、副葬品や墳形、内部構造などが時期決定の要であるのに対して、後者は日常生活に用いられた土器を時期決定のよりどころにしているからである。ところが近年、古墳の調査方法の精密化、これまでの出土遺物の再検討によって、三期区分による前、中期の古墳から出土した土師器の様相がしだいに明らかになってきた。また、集落より出土する土師器の編年が整備されてきたことにより、古墳出土の土師器を媒介として、従来とは別な角度から古墳の相対年代を決定することが可能となってきたのである。

3．五色塚古墳出土の土師器

五色塚古墳から出土した土師器としては、復原・整備工事に伴う調査によって後円部頂上から発見された、高杯と小型の壷の破片などがすでに知られている。[⑧]しかし、ここに紹介する土師器は、それらとは別に、五色塚古墳が荒れるにまかせていた昭和２５、６年頃、現在県立兵庫高校に勤務しておられる磯明男氏によって採集された埴輪片の中に混っていたものである。この土師器が私の目にとまったのは、今からおよそ１０年も前のことであろうか。当時、ふとしたことから拝見した磯氏採集の資料の中に、埴輪の破片とするにはあまりにも異った形態をした遺物が混っていたことから、五色塚古墳整備工事現場事務所におられた諸氏に、いろいろと意見をうかがったりもしたようであった。だが十分な結論を得ぬまま、「土師器の口縁部か？」として観察を備忘録に記し、久しく箧底に眠っていた資料である。

この土師器は、実測図に示すように二重口縁の壷形土器で、口径の約 1/8 ほどの破片である。形態は、いったん外反した口頸部が外側に鈍い稜をつくり、さらに上方にむかってゆるく外反して口縁部を形作っている。また、内側にはゆるやかな段が形成されており、口縁端部は、外側に



粘土を折曲げやや肥厚している。整形は、内外面とも横ナデで仕上げているが、頸部外面の下半にわずかに縦方向の刷毛目の痕跡が認められる。土器の残り具合は良好とは言い難く、内面の下半部は器壁の剝脱が著しい。色調は、明黄褐色。胎土は、3～4㎜ほどの砂粒を含むが比較的良好で、焼成もよくしまって硬い。各部の寸法は、復原口径20㎝、頸部までの残存高4.8㎝、厚さ約9㎜を測る。

この土師器の採集地点は、磯氏の談によれば「かって五色塚古墳の東側にあった道を登った平坦地 ── 頂上」と記憶されている。しかし、「そこが後円部の頂上であったか、前方部の頂上であったかは、はっきりとは覚えていない。たぶん道から考えて、後円部の頂上であったように思う。」とのことであった。

復原・整備事業に伴う調査では、前方部、後円部ともに頂部は精査されている。その結果、前方部では埴輪以外の出土は現段階では報告されていない。それに対して後円部では、先にも記したように埴輪と土師器の出土が報告されている。こうしたことを考えあわせると、おそらく磯氏採集の土師器も後円部の頂上に散布していたものと推定してよいであろう。

4．出土状況の復原

五色塚古墳出土の二重口縁をもつ壺形土器の役割を検討するため、各地の古墳から出土している類例についてみてみよう。

古墳出土の二重口縁をもつ壺形土器として著名な例は、何といっても奈良県桜井茶臼山古墳の土師器であろう。[9] 桜井茶臼山古墳では、後円部の頂上に竪穴式石室を方形に囲んだ状態で、大型の壺形土器が多数配置されていた。この壺形土器の底部は、焼成前に穿孔されており、仮器化したものであった。そのため、出土状況や形態から円筒埴輪 ── とりわけ朝顔型円筒埴輪の祖型と考える説もある。こうした桜井茶臼山古墳の調査が契機となって、古墳から出土する二重口縁をもつ壺形土器が注意されるようになった。その結果現在では、北は茨城県から、南は熊本県にまでその分布がおよんでいることが明らかになっている。

これら古墳出土の二重口縁をもつ壺形土器を出土状況から大別すると、副葬品と墳丘上での儀礼に関係して埋置されたものに二分される。しかし、前者の場合は、京都府尼塚古墳、島根県松本1号墳などに例があるのみで、後者の目的をもったものが出土例の大半を占めている。

さてそれでは、墳丘上の儀礼に関係して埋置した土器についてさらに詳しくみてみよう。この場合も、A・主体部上あるいは墳頂部に供献されて残されたものと、B・くびれ部や墳丘の段上、墳裾など墳丘全体にかかわる場所に位置するものとの二者がある。桜井茶臼山古墳出土例にみられるような、底部穿孔のいわゆる茶臼山式の壺形土器のほとんどは、後者 ── Bに該当する。そのため小林三郎氏は、底部穿孔の壺形土器を、儀器化されて墳墓で使用されるために特別に作られた土器と考えている。[10] たしかに小林氏の言うように底部穿孔の土器は、桜井茶臼山古墳例を代表として、大阪府御旅山古墳、同将軍山古墳、佐賀県銚子塚古墳など定式化して、埴輪的な様相を示している。それに対して前者 ── Aの供献土器の場合は、二重口縁をもつ壺形土器も先にみた茶臼山式の壺形土器のようには、儀器として定式化していない。また、千葉県北作1号墳、同能満寺古墳で見られたように、他の器形の土器と共に供献されているようである。

五色塚古墳の場合は、埴輪が整然と墳丘を囲繞しており、桜井茶臼山古墳に見られるような、埴輪的な様相をもった定式化した壷形土器の入りこむ余地は無い。この場合、磯氏採集品や発掘によって出土した土師器は、やはり墳丘上の儀礼に伴う供献土器と考えるのが妥当であろう。ただ岡山県金蔵山古墳で見られたように、後円部頂上の埴輪の中に二重口縁をもつ壷形土器が埋置された例もあり、本資料が表面採集品であるという制約からも、旧状の復原には多少の含みをもたせておく必要があろうかと思う。

こうした土器の供献された時点とは、墳丘上 ── とりわけ後円部頂上といった位置から考えて、やはり葬送儀礼が行われてそう時間的なへだたりのない時期と考えられる。

5．土器編年上の位置づけ

それでは五色塚古墳出土の二重口縁をもった壷形土器が、土器編年の中でどのような時期に置かれるのか検討を加えてみよう。

この特色ある口縁をもった壷形土器の変遷を、畿内の集落跡から出土した資料で見ると、弥生時代後期の畿内第Ｖ様式の段階で登場し、古墳時代前・中期の庄内式、布留式の時期まで認められる。この内、弥生時代後期のものは、畿内第Ｖ様式の中では末期に位置づけられるもので、代表例としては奈良県唐古遺跡第４５号竪穴上層出土の資料[11]があげられよう。県下では、尼崎市田能遺跡６Ｙ地区第２溝出土資料[12]が同様な時期に該当しよう。古墳時代に入ると庄内式の時期には、奈良県纒向遺跡[13]、大阪府東奈良遺跡[14]などをはじめとして、各地にその分布が認められるようになる。またこの時期には、弥生時代後期以来の装飾のないものとは別に、口縁部を櫛描きの波状文や竹管円形浮文で飾る装飾性豊かなものも登場する。田中琢氏が、かって庄内式の壷形土器の指標として例示した大阪府庄内遺跡出土の壷形土器も、後者の装飾された二重口縁をもった土器である[15]。続く布留式の時期では、奈良県纒向遺跡、同坂田寺下層遺跡、同上ノ井手遺跡、同藤原宮東外郭ＳＤ９１４[16]、大阪府船橋遺跡[17]、同小若江北遺跡[18]などやはり広い地域に分布が認められる。しかし、この段階になると、庄内式で見られた装飾されたものは衰退する。また、布留式も小型丸底壷や小型器台などを伴う早い段階では、従来の外反した口縁を踏襲しているが、それよりも後出的な船橋遺跡のＯＩ、ＯⅡ期の時期では、口縁部も直立気味になり、形態の変化が顕著になっている。

二重口縁をもつ壷形土器の終末は、布留式の小若江北遺跡と、須恵器を伴出する小若江南遺跡を比較すると、小若江南遺跡の段階ではもはや認められなくなっている。同様な傾向は、船橋遺跡でも指摘できる。このことから、陶邑古窯跡群のＴＫ２０８型式の須恵器が集落に供給される時期には姿を消していたと考えられよう。

こうした二重口縁をもつ壷形土器の変遷の中に、五色塚古墳出土例をあてはめて検討してみよう。まず庄内式の時期のものと比較すると、五色塚古墳出土例の方が、口縁部の外反、内面の段、口縁端部のつくりにシャープさがない。また整形も、庄内式のものが器面をヘラで美しく磨いて整えているのに対して、五色塚古墳出土例は、横ナデと刷毛目仕上げで、むしろ布留式のものに認められる。それでは布留式の中で類似した形態、整形のものを求めるなら、上ノ井手遺跡の井戸より出土した資料が一つの指標となろう。上ノ井手遺跡の井戸からは、上、下層の二層に分れ

て布留式土器が検出されており、共に二重口縁をもった壷形土器が含まれている。整形は、共に横ナデと刷毛目によるものであるが、形態は下層のものの方が口縁が広く外反しており、上層のものは開きがゆるく段も狭い。五色塚古墳出土例は、上層のものに類似するが、形態の細部では古相を示している。しかし、下層と比較した場合は、五色塚古墳出土例の方が明らかに新しい様相のものといえる。同様に船橋遺跡ＯＩ、ＯⅡ期のものと比較すると、五色塚古墳出土例の方が古相を呈している。

したがって以上の検討をまとめれば、五色塚古墳出土の二重口縁をもった壷形土器は、土器編年の上から布留式の範疇に含まれるものである。ただ布留式を細分した場合、庄内式に続く古い時期のものではなく、また「初期須恵器」と呼称される五世紀代の古い須恵器を伴うものでもない。むしろその中間に位置するものである。

6．古墳出土の土師器との比較

それでは、畿内の古墳から出土した土師器と、先に検討を加えた五色塚古墳出土例を対比し、編年的に位置づけるとどのようになるであろうか。

まず二重口縁の壷形土器という点で、奈良県箸墓古墳、桜井茶臼山古墳出土例と比較してみよう。このうち、桜井茶臼山古墳出土例については、庄内式よりもやや新しく見ようとする見解もあるが、両者は共に庄内式の段階に位置づけられるもの[20]であり、土器、古墳の編年観は、共に五色塚古墳より先行するものである。

次に、出土した土師器の器種は異るが、これまで五色塚古墳と前後する時期に位置づけられている古墳から出土した例と比較してみよう。例えば、『日本の考古学』Ⅳで前・Ⅱ期に編年されている、奈良県東大寺山古墳、櫛山古墳、京都府元稲荷古墳出土の土師器[21]は、土器編年の上でどのような時期にあたるのであろうか。このうち東大寺山古墳、元稲荷古墳出土の土師器は、布留式に編年されることがしばしば引用されている。ただ布留式のどの段階に置くかについては、現在二つの見解が提示されている。まず、安達厚三・木下正史両氏は、東大寺山古墳と元稲荷古墳の土器を、先にもあげた上ノ井手遺跡の井戸下層より出土した土器とほぼ同時期に比定している[22]。それに対して置田雅昭氏は、元稲荷古墳出土例を布留式の比較的初期のもの、東大寺山古墳出土例を布留式盛期のものと考えている[23]。だが置田氏の場合、布留式の細分が十分に確定していない現在、具体的な類例を示していないため、はたしてどの型式のものをさしているのか不明確さを含んでいる。一方、安達・木下両氏は、布留式の細分を試み、上ノ井手遺跡井戸下層に先行するものとしてさらに二型式の存在を想定しており、置田氏の編年観とややニュアンスの相違を見せているように思われる。また、安達・木下両氏が類似すると見た上ノ井手遺跡井戸下層と、元稲荷古墳、東大寺山古墳出土の土器の実測図を比較すると、東大寺山古墳出土例はともかく、元稲荷古墳例は置田氏の順序と同じく、やや古相を示すのではないだろうか。さらに東大寺山古墳例にしても、上ノ井手遺跡井戸上層中にも類似したものが見られ、編年の確立までにはまだ資料の集積が必要であろう。

櫛山古墳出土の土器は、類例を示しがたいが、高杯の形態などから見れば上ノ井手遺跡井戸や船橋遺跡ＯＩなどの土器よりも後出的に思われる。また石野博信氏は、纒向５式（布留式盛期）

か６式（広義の布留式の範疇に入り、この段階に須恵器が出現）に位置づけており、櫛山古墳の後方部が後に付加された可能性も含めて、同古墳の下限を示すものと考えている。したがって櫛山古墳出土の土器と東大寺山古墳出土の土器を比較した場合、東大寺山古墳の土器の方が櫛山古墳のものより先行するものと考えてよかろう。

以上の結果から、前・Ⅱ期の三古墳を土師器の編年観によって見るなら、元稲荷古墳→東大寺山古墳→櫛山古墳（後方部）の順となる。これらと五色塚古墳出土の土器と比較すると、東大寺山古墳例と近い時期に位置づけられる。ただ東大寺山古墳出土の滑石製台付坩（小型丸底壷と器台）を土器に置き代えて見た場合、五色塚古墳例と併行関係にある同器種の比較では、東大寺山古墳の遺物の方が型式的に先行するものであろう。

最後に、笹倉氏が五色塚古墳の時期決定に利用した墳形の類似する古墳のうち、崇神天皇陵古墳と日葉酸媛陵古墳について検討を加えてみよう。

崇神天皇陵古墳の築造時期について石野博信氏は、隣接する山田遺跡より出土する土器[24]のうち古式土師器が纒向４式（布留式の古い段階）を下限とすることから、山田遺跡を古墳築造前の遺跡と考え一つの時期決定のよりどころとしている。また、周湟、墳丘より纒向５式の土器の出土を記しており、これらのことがらから崇神天皇陵古墳の時期を、布留式 ── 纒向５式に比定している[25]。ただ纒向５式については、石野氏が編年の根拠とした『纒向』においても、具体的なとりあげがなされていない。しかし、纒向４式については報告書の中に整理分類されて明示されていることから、纒向５式は纒向６式の初期須恵器を伴うまでの段階として、例えば小若江北遺跡、藤原宮内裏東外郭ＳＤ９１２、ＳＤ９１４、あるいは上ノ井手遺跡井戸、船橋遺跡ＯＩなどを含む時期と理解している。五色塚古墳出土例も石野氏の提唱する纒向編年にあてはめれば、５式の範疇に置かれるものである。しかし、纒向５式はすでにみたように細分は可能であり、また現段階での崇神天皇陵古墳関係の資料では具体性が乏しく、詳細な比較検討は困難であるといえよう。

日葉酸媛陵古墳については、土器の面から検討を加えるには資料に欠けるが、隣接するマエ塚古墳[26]より出土した滑石製坩（小型丸底壷）は、東大寺山古墳より出土した滑石製坩に似ており、もし石製坩がほぼ同時期の土師器を模して作られたものであるなら、東大寺山古墳と同様な時期が考えられよう。このことは、マエ塚古墳の方が時期的には五色塚古墳よりも先行するものであるという可能性を含んでいる。その時期は、先に検討した崇神天皇陵古墳と五色塚古墳の比較で試みた纒向５式の範疇におさまるほどの差であろう。土器を模した石製品といえば、日葉酸媛陵古墳からも石製高杯の出土が知られているが、現在のところこれに類する土師器の例については不明確である。あるいは、今後の調査で資料が豊富になれば、類例の出土も考えられ、改めて検討の機会もあろう。したがって日葉酸媛陵古墳の時期を、隣接するマエ塚古墳とそう差のないものと理解すれば、やはり崇神天皇陵古墳に近い土器編年上の時期が求められるが、今一つ細部にわたっての明確さという点では問題を残している。

７．結び

以上五色塚古墳で採集された一点の土師器について検討を加えてきた。一言最後に付加えておくなら、この土師器が明確な出土状況や出土地点が判らない資料であるため、それが墳丘築造あ

るいは被葬者の埋葬に近い時点のものか、追祭祀によるものであるのかが問題として残るであろう。同様に、五色塚古墳の後円部頂上から調査によって発見された土師器についても、やはり同じ点が指摘されよう。ただ後者の場合は前者と違って、調査によって明らかにされたものだけに、古墳でのどの時点で行なわれた祭祀に伴う土器か詳細な報告に大いに期待するものである。筆者が磯氏採集資料の紹介に中心を置き、調査による出土資料との対比をひかえたのもこの点にある。本資料が今後の五色塚古墳研究の一助とならんことを願う。

（昭和５３年１月末日稿了、昭和５５年１月末日再稿了）

＜註＞

① 西川宏・今井堯・是川長・高橋護・六車恵一・潮見浩「瀬戸内」（『日本の考古学』Ⅳ、河出書房新社、昭和４１年）

② 上田宏範「前方後円墳における築造企画の展開」（『近畿古文化論攷』、吉川弘文館、昭和３８年）

③ 笹倉忠雄「前期末における前方後円墳の一考察」（『仏教大学通信教育部論集』第３号、仏教大学通信教育部、昭和４３年）

なお上田宏範氏も、６：2.5：２のＡ型式の古墳として五色塚古墳を紹介している。

上田宏範「前方後円墳」（『新版考古学講座』第１巻　通論上、雄山閣、昭和４３年）

④ 喜谷美宣『史跡五色塚古墳環境整備事業中間報告』Ⅰ（神戸市文化財調査報告１３、神戸市教育委員会、昭和４５年）

⑤ 櫃本誠一「兵庫県下における前方後円墳」（『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第２集、兵庫県社会文化協会、昭和４９年）

⑥ 西谷真治「盛期の古墳」（『兵庫県史』第１巻、兵庫県、昭和４９年）

⑦ 西谷真治「古墳出土の盒」（『考古学雑誌』第５５巻第４号、日本考古学会、昭和４５年）

⑧ 神戸市教育委員会事務局社会教育部文化課編『史跡五色塚古墳復元・整備事業概要』（神戸市教育委員会、昭和５０年）

⑨ 中村春寿・上田宏範『桜井茶臼山古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第１９冊、奈良県教育委員会、昭和３６年）

⑩ 小林三郎「古墳出土の土師式土器Ⅰ」（『土師式土器集成』本編２、東京堂出版、昭和４７年）

⑪ 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第１６冊、桑名文星堂、昭和１８年）

⑫ 尼崎市田能遺跡発掘調査委員会編『田能遺跡概報』（兵庫県社会文化協会、昭和４２年）

⑬ 石野博信・関川尚功他『纒向』（桜井市教育委員会、昭和５１年）

⑭ 田代克巳・奥井哲秀他『東奈良　発掘調査概報Ⅰ』（東奈良遺跡調査会、昭和５４年）

⑮ 田中琢「布留式以前」（『考古学研究』第１２巻第２号、考古学研究会、昭和４０年）

⑯ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」（『考古学雑誌』第６０巻第２号、日本

考古学会、昭和４９年）

⑰　田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真『船橋』Ⅱ（平安学園考古クラブ、昭和３７年）

⑱　坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』（岡山県高島遺跡調査委員会、昭和３１年）

⑲　註⑱に同じ。

⑳　註⑮に同じ。

この点については、問題も多いが報告の都合上昭和５３年１月の執筆時の見解のままとした。

㉑　上田宏範「櫛山古墳」（『桜井茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第１９冊、奈良県教育委員会、昭和３６年）

置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」（『考古学雑誌』第６３巻第３号、日本考古学会、昭和５２年）

㉒　註⑯に同じ。

㉓　註㉑（置田雅昭論文）に同じ。

㉔　清水真一「天理市柳本町崇神陵古墳南で採集した遺物について」（『古代学研究』６８、古代学研究会、昭和４８年）

㉕　石野博信「大和平野東南部における前期古墳群の形成過程と構成」（『横田健一先生還暦記念　日本史論叢』、横田健一先生還暦記念会、昭和５１年）

㉖　小島俊次『マエ塚古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第２４冊、奈良県教育委員会、昭和４４年）

研究ノート

横穴式石室の平面企画について

――長尾山丘陵における横穴式石室を中心として――

岡　野　慶　隆

1．はじめに

古墳時代後期の横穴式石室を扱う場合、その平面形に着目すべき重要性はすでに本誌４号で述べたとおりである。①

横穴式石室構築の要因としては、石室構築主体者の意図とともにその背景となる時代性、社会性等を考えねばならないが、それらは横穴式石室という構築物の採用をとおしてはじめて反映してくるものである。したがって、横穴式石室の構築自体について考えねばならない点が多い。たとえば石室形態と規模の決定、石室構築技術とそれにたずさわった者や構築の際必要とする労働力等の問題がそれである。この中でも石室形態と規模の決定は構築物としての横穴式石室の最も基本的な作業としてとらえられ、さらには当初に計画された企画が問題となってくる。この際現在得られる資料より当初に計画された企画の復元作業が必要となってくるわけであるが、自然石を積上げた一般的な横穴式石室を対象とした場合、当初の企画と資料の間に誤差が考えられることから、困難な作業となることが予想される。しかし構築時の最初に据えられた一段目の石の配列、すなわち石室の平面形は、現在得られる資料の中でも最も当初の企画を反映しているものと思われ、これを対象とすることより横穴式石室の企画復元作業も可能となるのである。

前回もこの点に注目し、兵庫県西宮市と宝塚市の境となる仁川流域に分布する２基の横穴式石室を対象として検討した結果、玄室幅を基準長とする平面企画を復元することができた。この両石室の平面企画法は玄室幅を一辺とする正方形を連続させた形をとっており、しかも両石室の基準長がほぼ一致することから、両石室間の企画上における密接な関係を指摘することができたのである。②

ここではこのような視点に基ずき、西摂平野北端の長尾山丘陵に群集する横穴式石室に対象を求め、当地域における横穴式石室の平面形について検討するとともに、その背景となる企画法の存在について論じていきたいと思う。

2．長尾山丘陵の横穴式石室（第１図）

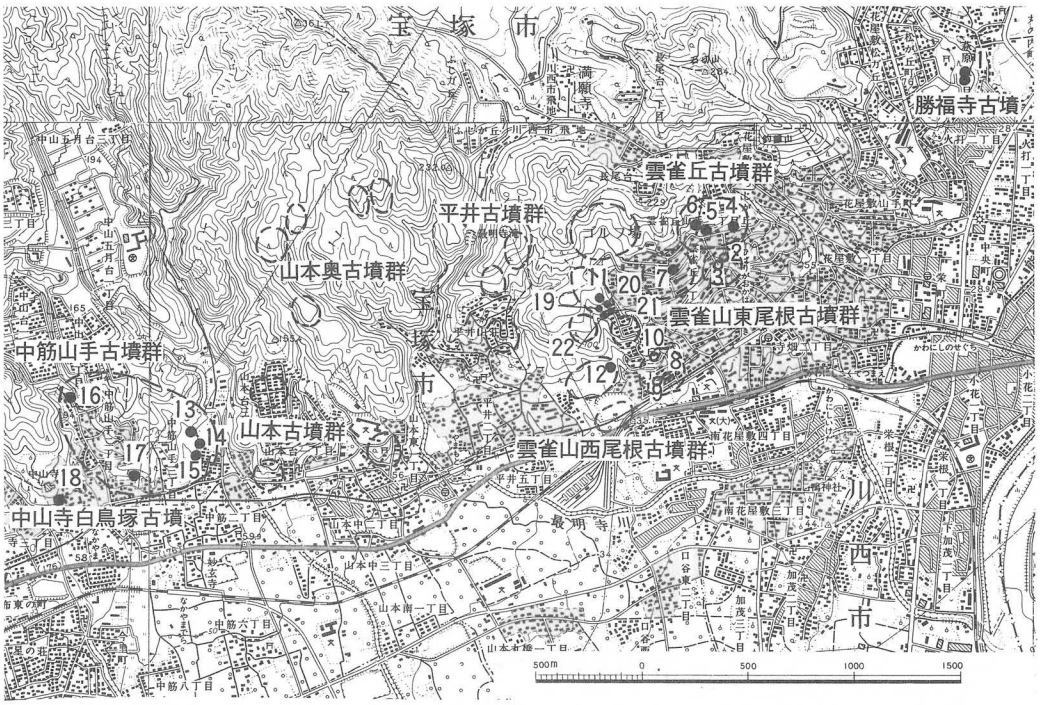
長尾山丘陵に分布する２００余基の後期古墳の大半は横穴式石室を有する。このうち発掘調査や実測調査が行なわれて平面形が知られるものは４８基存在するが、今回はこれらの平面形の明確な石室について検討してみたい。

これらの石室の平面形態はさまざまで、まず袖部について見れば、両袖式１５基、右片袖式２基、無袖式３１基となり、無袖式を除外すれば両袖式のものが片袖式に比べて多いことが注目される。また玄室の平面形について注目すれば、長方形のもの４基、玄室前幅に対して奥幅が狭ま

る台形状のもの８基、その逆で奥幅が広くなるもの１基、胴張状のもの４基、袖部が内側に突出し玄門を形成するもの２基、前室をもつもの１基等各種見ることができる。さらに規模の点においては、全長１５.２ｍ、玄室幅２.５ｍの中山寺白鳥塚古墳を最大とし、雲雀山東尾根古墳群Ａ、Ｂ支群の全長２～７ｍ、石室幅０.３～１.２ｍの無袖式石室を最小クラスとすることができる。

さてこれらの石室の平面形を考えるにあたり、前回の試みでは基準長となった玄室幅が各計測値とどのような関係をもつかを見てみよう。第１表はこの点について表示したものであるが、まず気のつくことは、やはり前回同様玄室長、羨道長、全長等の計測値に玄室幅の倍数値をとる例が多く見られることである。たとえば各割合の０.１の誤差を認めるとして、玄室幅に対して玄室長、羨道長ともに倍数となるもの３例、玄室長のみ倍数となるもの７例、羨道長のみ倍数となるもの３例、全長のみ倍数となるもの２例がそれぞれあげられ、羨道長が不明の２基を除くとすべての石室が玄室幅の倍数値を玄室長、羨道長、全長のいずれかにあてていることになる。また無袖式のものでも、ここにあげた６例のうち５例の全長が石室幅の倍数値をとることからすれば、当地域の横穴式石室の平面形における玄室幅の重要性が知られるとともに、石室構築に際してこれを基準長とした企画法の存在が想定されるのである。

ところで単に玄室幅が基準となり他の長さが決定されるとはいえ、各種の倍数値のとり方が見られる。たとえば玄室長では玄室幅の２倍のもの５例、３倍のもの６例、羨道長では２倍のもの２例、３倍のもの３例、４倍のもの１例、全長では４倍のもの２例、５倍のもの１例、６倍のもの１例となり、何種類かの企画法が存在したようである。次にこれらのうち特に玄室平面形を中心として企画法の分類を行なってみたい。



第１図　長尾山丘陵の後期古墳分布図（番号は資料番号）

3．玄室平面形を中心とする企画法の分類

上述のように、玄室の平面形は玄室幅に対して2、3倍の長さをとる例が多いが、玄室長を玄室幅で割って得られた数値をもとにすると、A―玄室長が玄室幅の2倍未満となり、倍数値をとらないもの、B―玄室長が玄室幅のほぼ2倍となるもの、C―玄室長が玄室幅の2倍から3倍までの間におさまり、倍数値をとらないもの、D―玄室長が玄室幅のほぼ3倍となるもの、以上4種に分けることができ、さらにE―無袖式で全長が石室幅の倍数となるもの、が加えられる。以下各企画法について検討してみよう。

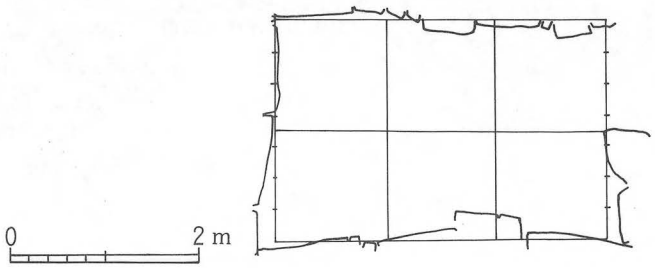
A　玄室長が玄室幅の2倍未満となるもの（第2図）

この型にあたる石室は少なく、わずかに雲雀丘C北4号墳と中筋山手東2号墳の2例があげられる。両者とも明らかに玄室長が玄室幅の2倍未満で、誤差により生じた数値ではない。

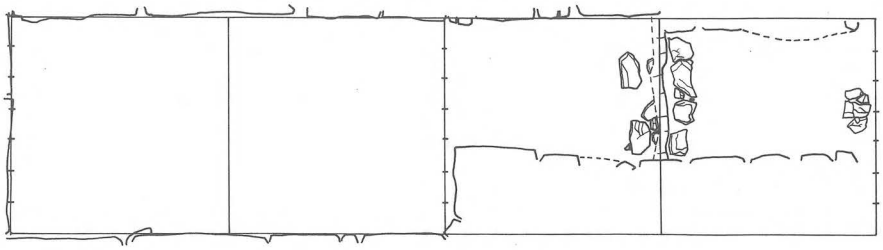
雲雀丘C北4号墳の石室は右片袖式で、玄室幅は前で2.25mに対して奥で2.40mと若干広がる形をとる。④これに対して玄室長は3.48～3.80mと短く、長尾山丘陵では最も方形に近い平面形となる。また羨道長は不明であるが、幅は玄室幅に対して狭く、全般的に古い段階の横穴式石室の要素をもっている。⑤

このように、この石室では玄室長が明らかに玄室幅の倍数ではなく、後にあげる他の企画法とは根本的に違った企画が為されていることも考えられる。ただし各計測値間の有機的関係を求めようとすれば、羨道幅が玄室前幅のほぼ半分になることや、玄室側壁長が玄室前幅のほぼ1.5倍になることがあげられ、玄室前幅及び羨道幅を基準長とした企画が考えられる。このことからすれば、玄室前幅の半分を一辺とする正方形を2列に3個ずつ並べたものが玄室にあたり、その正方形の一辺が羨道との接点にあたることになる。⑥

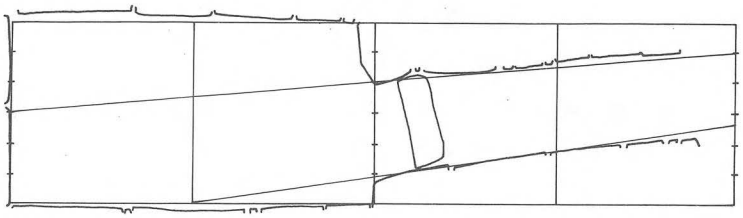
A型の他の1例は中筋山手東2号墳である。⑦この場合は内側に突出した玄門とともに前室をもつ両袖式の石室であるが、長尾山丘陵では特異な形態の石室である。玄室の規模は前幅1.70mに対して奥幅が1.50mと狭くなるが、長さは2.60mで、いずれの玄室幅をとっても倍数とはならない。ところが玄室前幅を基準とすれば、その3倍が玄室前側より羨道入口までの長さにほぼあたっている。したがって後に述べるC型の企画法と同様に倍数型の企画法としてとらえることができるが、同じA型でも羨道長が不明の雲雀丘C北4号墳とは別に考えた方がよさそうである。ただしC型では玄室長が玄室幅の2倍から3倍までの間におさまっていることに比べると、やや特異な企画法と言える。⑧



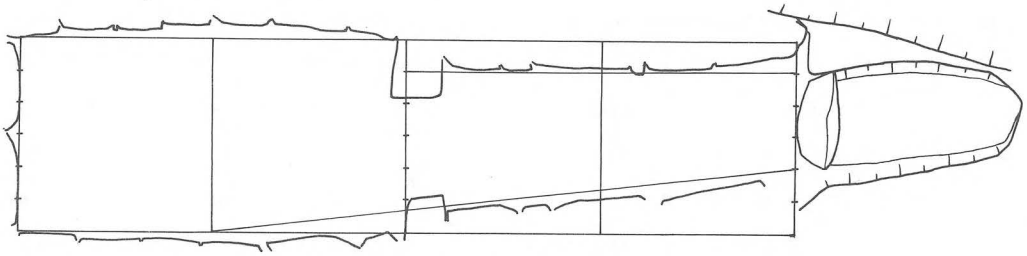
第2図　A型企画法の石室（資料6 雲雀丘C北4号墳）



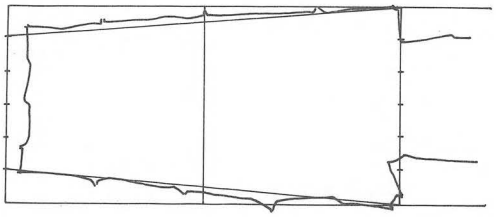
資料１　勝福寺古墳北墳



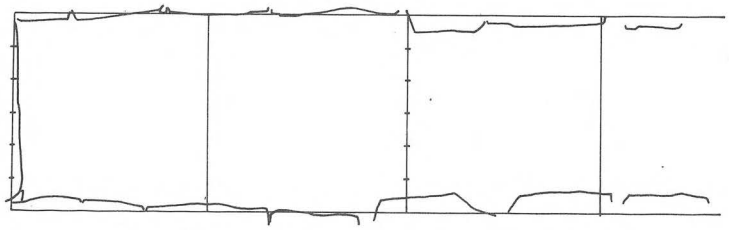
資料２　雲雀丘C南１号墳



資料１２　雲雀山西尾根B２号古墳



資料１６　中筋山手１号墳



資料１７　中筋山手４号墳

第3図　B 型 企 画 法 の 石 室

B　玄室長が玄室幅のほぼ2倍となるもの（第3図）

この企画法の代表例としては勝福寺古墳北墳があげられる。[9] この石室は右片袖式で、玄室は前奥幅とも約2.3 mのほぼ正確な長方形である。一方玄室長はこの玄室幅の2倍の数値をとり、羨道長もこれに近似する。このことから、この石室では玄室幅を基準長とし、これを一辺とする正方形を4個連続させ、そのうちの2個ずつを玄室と羨道にあてた企画法が考えられる。

玄室長が玄室幅のほぼ2倍となるものは他に4例あげられるが、その玄室形態は、やや胴張状の雲雀丘C南1号墳[10]、胴張状で内側に突出した玄門をもつ雲雀山西尾根B2号墳[11]、玄室前幅を基準長とするが奥幅が狭くなる中筋山手1、4号墳[12]等多様である。しかし羨道の企画も含めた場合、雲雀山西尾根2号墳では勝福寺古墳北墳同様基準長の2倍の長さをとることは注目される。また羨道長が不明の中筋山手1、4号墳は除外するとして、雲雀丘C南1号墳でも羨道長は基準長の2倍より若干短いが、やはり2倍の長さをとる企画によったのではないかと考えられる。

C　玄室長が玄室幅の2倍から3倍までの間のもの（第4図）

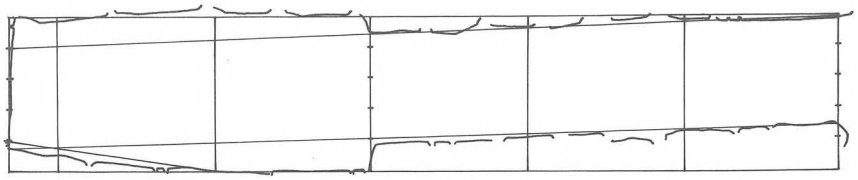
この企画法の代表例としてはまず雲雀丘C北3号墳があげられる。[13] この石室は両袖式で、玄室前幅1.66 mに対して奥幅が1.40 mと狭まる玄室をもっている。玄室長は3.82～3.70 mで、玄室前幅を基準長とすると玄室長はその2倍よりも0.5～0.3 m長くなり、明らかに倍数とはならない。ところが羨道長はこの玄室前幅のほぼ3倍にあたり、基準長をもととする倍数型企画法がとられたことがわかる。

こうした例は同古墳群B1号墳でも見ることができる。[14] この場合も玄室奥が狭まる形の両袖式石室であるが、玄室前幅1.25 mに対して玄室長はその約2.5倍の長さをとっている。これに対して羨道長は玄室前幅のほぼ4倍となり、羨道長のみ基準長の倍数値をとっていたことが知られるのである。[15]

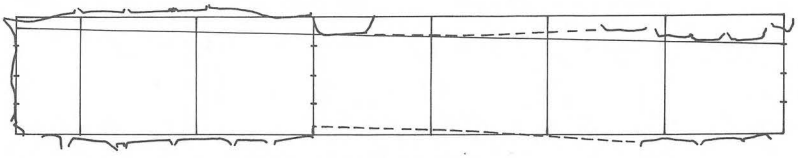
このように両石室の企画は羨道長と玄室長のとり方において不統一性が見られるが、玄室幅の倍数値をとる羨道長に対して玄室長はどのようにして決定されたのであろうか。この点については任意の長さをとったか、或いは何らかの尺度によった可能性も考えられる。しかし羨道長だけが倍数値をとり、しかもその基準長が羨道幅ではなく玄室幅であることは不自然であるから、玄室長も玄室幅を2倍した長さをもとにいくらかの延長を行なったと見るのが妥当ではないかと思われる。

この玄室長決定の問題に関して注目されるのは、前回とりあげた旭ケ丘2号墳の平面企画である。[16] この石室では玄室前幅1.66 mを基準長として羨道長はそのほぼ2倍、玄室長は2倍よりも約0.5 m長くとっており、上記の雲雀丘C北3号墳と比較すれば、羨道長が1単位分短くなっているほかは、企画法はもちろん基準長及び玄室長においてもほとんど同じ数値をとっている。このことから両石室は基本的に同一企画法によったことと同時に、玄室長に基準長と関連する一定の長さをあてた可能性が強いのではないかと考えられる。

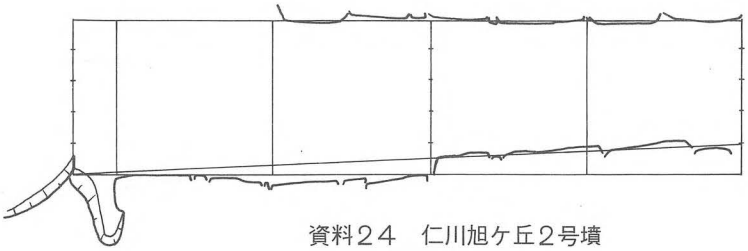
なお玄室のみに注目すれば中山寺白鳥塚古墳もこのタイプに入るが、全長だけが基準長となる玄室幅2.50 mの6倍の倍数長をとる点が異なっている。[17] また現存しないが雲雀山東尾根C1号墳も玄室幅2.15 mの2倍より約1 m長い玄室長をとっている。[18] ただし羨道長は不明で、上記の



資料５　雲雀丘Ｃ北３号墳



資料７　雲雀丘Ｂ１号墳



資料２４　仁川旭ケ丘２号墳

第4図　Ｃ型企画法の石室

両石室と同じ企画法であるのかはわからない。

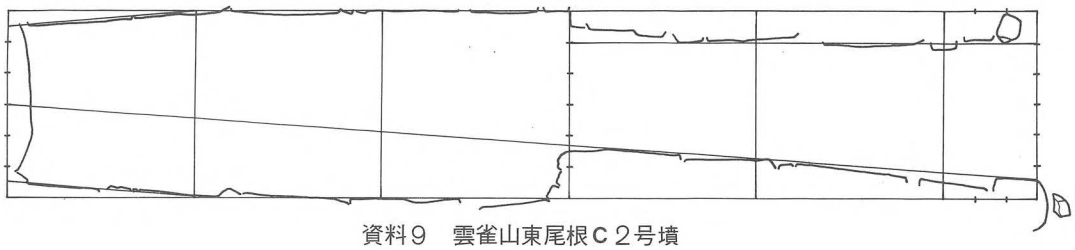
Ｄ　玄室長が玄室幅のほぼ３倍となるもの（第５図）

この企画法の石室は袖を有する石室の中で最も狭長な玄室をもつことになる。代表例としてはまず雲雀山東尾根Ｃ２号墳があげられるが、玄室奥幅に対して広くなる玄室前幅1.96ｍを基準長として玄室長は３倍の数値をとっている。[19] 羨道長については玄室前幅の2.4～2.5倍の長さをとるが、玄室から羨道にかけての側壁一段目の巨石に注目すれば基準長のほぼ２倍の長さのところでおわっていることに気がつく。したがってこの石室では玄室前幅を一辺とする正方形を５個連続し、その３個と２個を玄室と羨道にそれぞれあてた企画法が基本になっていることが考えられる。羨道長については何らかの基準による延長が考えられるが、このことを除けば前回とりあげた関西学院構内古墳と規模こそ違えまったく同じ企画法であることが注目される。[20]

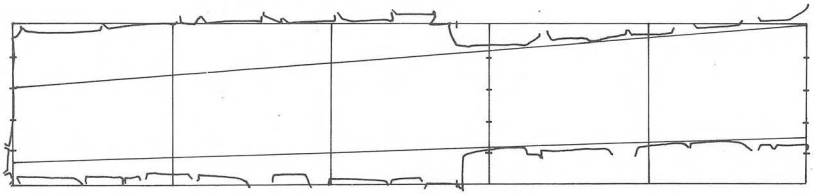
ところで長尾山丘陵では、玄室羨道ともにこの企画法をとるものが他に２例存在する。その一つは雲雀丘Ｃ北１号墳であるが、玄室奥幅より広くなる玄室前幅1.68ｍを基準長とすれば全長はそのほぼ５倍となる。[21] ところが玄室長はその３倍よりもやや短く、羨道長は２倍よりも長くなり、それぞれ基準長の倍数値をとらない。ここで注目すべきは前回とりあげた関西学院構内古墳で、両石室の計測値を比較すると、玄室長、羨道長を除けば、基準長となる玄室前幅だけでなく

玄室奥幅、羨道前、奥幅もきわめて近似している。[22] このことからすれば、雲雀丘C北1号墳では関西学院構内古墳と同様に基準長となる玄室前幅を1.66～1.68mにとり、その3倍を玄室長に、2倍を羨道長にあてる企画法を採用したが、構築時の何らかの事情により現在見る数値をとったものと考えられる。

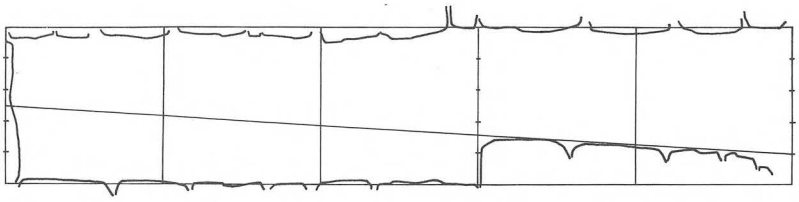
これと同一企画法をとる他の一例は雲雀山東尾根A9号墳で、同古墳群に群集する無袖式の小型横穴式石室の中で最も規模の大きいものである。[23] この場合は無袖式であるが、石室平面形は長方形ではなく、まっすぐな右側壁に対して左側壁では奥から3.92mのところまで外側にひらき、あと入口までは内側に狭まった形をとっている。しかも石室幅が最も広くなる左側壁部には袖らしき痕跡が見え、ここの石室幅を3倍すればこの部分より奥壁までの長さと一致する。あとの入口までの長さについてはこの幅の2倍よりも若干長くなるが、基本的には上記2例と同様の企画法によったと見て間違いないであろう。



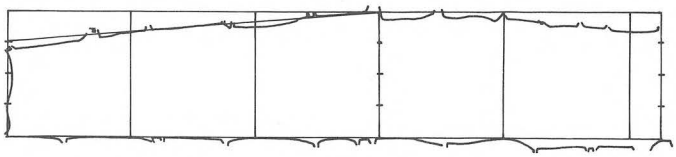
資料9　雲雀山東尾根C2号墳



資料4　雲雀丘C北1号墳



資料23　関西学院構内古墳



資料11　雲雀山東尾根A9号墳

第5図　D型企画法の石室

このように上記の３例は羨道も含めて同一企画法によったことがわかるが、玄室形においてもいずれも両袖式で、基準長となる玄室前幅に対して奥幅が狭くなる形をとっている点も見のがせない。

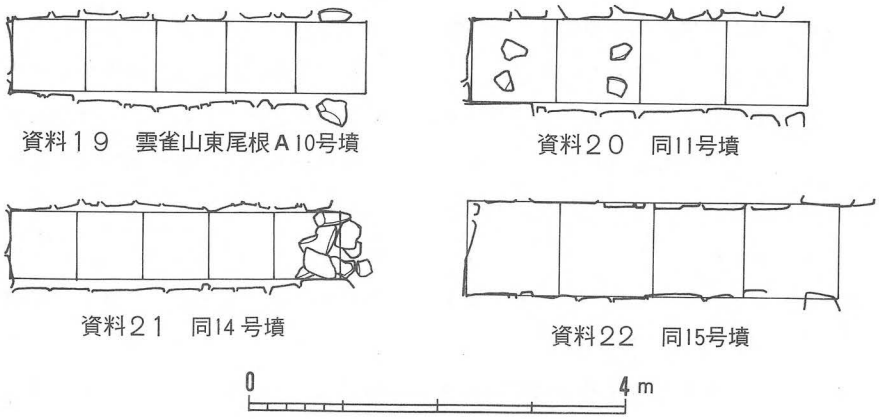
これに対して中筋山手東１、３号墳は、それぞれ胴張状の玄室をもつ両袖式石室であるが、１号墳は玄室中幅 1.４０ｍ、３号墳は玄室奥幅 1.３６ｍをそれぞれ基準長としてその３倍のほぼ同規模の玄室長をとっている。[24] また羨道長は１号墳では不明であるが、３号墳では玄室長とほぼ同じ長さをとることから、玄室幅を一辺とする正方形を６個連続し、その３個ずつを玄室長と羨道長にあてた企画法が考えられる。

なお現存しないが、雲雀丘Ｃ南２号墳[25]は玄室幅 1.１０ｍ、雲雀山東尾根Ｃ３号墳[26]は玄室幅 1.32ｍをそれぞれ基準長としてその３倍の玄室長をとっている。このように見れば、玄室長を玄室幅の３倍にとる企画例は７例を数え、袖をもつ石室の中では最も多くの実例をもつことになる。

Ｅ　無袖式で石室長が石室幅の倍数となるもの（第６図）

長尾山丘陵における無袖式の横穴式石室は、雲雀山東尾根古墳群Ａ、Ｂ支群、同西尾根古墳群Ａ支群、平井古墳群Ａ、Ｂ支群、山本奥古墳群等に特に集中して見られる。それらは袖を有する石室に比べて小型で、時期も７世紀初頭より中頃にかけて築造されたものと考えられている。ここでは近年調査された雲雀山東尾根古墳群Ａ支群の５基について検討してみたい。[27]

このうち９号墳は前述のように最大級のもので、無袖式ながらもＤ型企画法をとっている。これに対して他の４基は小規模で、石室幅 0.７０～0.９８ｍ、石室長 3.１４～3.９６ｍの間でほぼ一定している。これらの石室平面形を検討すると、１０号墳は奥幅 0.７５ｍ、１１号墳は奥幅 0.８９ｍ、１５号墳は奥幅 0.９８ｍを基準長としてそれぞれほぼ４倍の石室長をとっている。また１４号墳では前幅 0.７０ｍを基準長としてほぼ５倍の石室長となっており、やはり倍数型の企画法がとられていたことがわかる。ただし同古墳群Ａ、Ｂ支群の他の石室の計測値について見れば、倍数型企画法をとったらしいものもあるが、そうではないものも多く存在する。[28] この点については実測図をもとに検討せねばならないが、必ずしも倍数型企画法をとったものばかりではなかっ



第６図　Ｅ型企画法の石室

たようである。

ところでこのような小型の石室を対象とする場合、推定される基準長も短くなることから、偶然に倍数となる危険性も考慮せねばならない。また前述の袖を有する石室に比べると、構築技術や必要とする労働力の面でかなりの差が考えられ、企画自体の性格についても慎重に考えねばならないであろう。

4．長尾山丘陵における横穴式石室平面企画に関する問題点

以上のように長尾山丘陵における横穴式石室の平面企画を検討した結果、ここにあげた石室のほとんどが玄室幅を基準長とし、その倍数値を玄室長、羨道長にあてる企画法をとっていることが明らかになった。この企画法は玄室を中心に見れば上述のように5種類にわかれ、羨道の企画も含めるとさらに何種かにわけることも可能である。ところで個々の横穴式石室の構築は、石室形態の中でも最も基本的な平面形の企画をどのようにとるかということから始まったと考えられるが、その企画法決定の背後にはさまざまな要因が関係していたものと思われる。ここでは長尾山丘陵における横穴式石室の平面企画とその採用に関する問題点を若干あげてみることにしょう。

(1) 各企画法の時期について

まずA型の雲雀丘C北4号墳は出土遺物がないため石室形態より考えねばならないが、少くとも6世紀初頭から前半にかけての時期に築造されたものと考えられる。一方中筋山手東2号墳の場合は7世紀前半頃の須恵器が出土していることから、少くともその頃には築造されていたものと思われる。[29] したがってA型企画法の採用は6世紀初頭から7世紀前半に及ぶことが考えられるが、両石室の企画法が前述のように根本的に異なっている点は注意しなければならない。また両石室がそれぞれ長尾山丘陵でも特異な平面形をとることや、中筋山手東2号墳がむしろC型企画法に近いことなどからすれば、同一に時期を考えることはさけるべきであろう。

B型では出土遺物よりすれば、勝福寺古墳北墳が6世紀前半頃、[30] 雲雀山西尾根B2号墳が6世紀中頃のものであることがわかる。[31] また中筋山手4号墳の場合無袖式に近い平面形をとることも含めると、B型企画法の採用は6世紀前半から6世紀末か7世紀初頭頃までの時期が考えられる。

C型では雲雀丘B1号墳が出土遺物より6世紀後半頃のものと考えられている。[32] 一方雲雀丘C北3号墳は出土遺物が不明であるが、前述のように旭ケ丘2号墳とほぼ同じ基準長と企画法をとることから、同古墳と同じく6世紀末から7世紀初頭頃の時期が考えられる。したがって両石室から見た限りでは、C型企画法の採用は6世紀後半から6世紀末か7世紀初頭頃までの時期が考えられるが、他の2例についてもこの時期に入るものと思われる。

D型では雲雀山東尾根C2号墳が出土遺物より6世紀末頃の築造と考えられている。[33] 他はいずれも発掘調査が行なわれていないが、雲雀丘C北1号墳の場合は前述のように関西学院構内古墳と基準長及び企画法においてほぼ一致することから、同じ時期の6世紀後半頃のものと考えられる。したがってD型企画法の採用時期は6世紀後半以降となるが、無袖式ながらも雲雀山東尾根A9号墳の例も考えると、7世紀前半あたりを下限とすることができる。

E型については雲雀山東尾根古墳群A、B支群の調査結果より、7世紀初頭から中頃の時期に

限定することができる。[34]

このように各企画法の時期を見てみると、無袖式のE型が最も新しい段階のものとしてとらえられるのに対して、他の企画法は当地域において後期古墳の築造量が増加する6世紀後半から7世紀初頭頃を中心として多く採用されたことがわかる。ところでこの中でも注目されるのは、B型企画法の勝福寺古墳北墳が6世紀前半頃に出現することである。長尾山丘陵ではこの時期が横穴式石室の導入期にあたっており、他にA型の雲雀丘C北4号墳もこの頃のものと推定される。したがって長尾山丘陵の横穴式石室ではA型とB型の企画法が最初に採用されたことになる。しかしその後B型は6世紀末から7世紀初頭頃まで継続して採用されるが、A型でも雲雀丘C北4号墳の企画例は他に例を見ないことから断絶したものと思われる。一方C型とD型の企画法はともに6世紀後半頃に現われるが、B型と同じく6世紀末から7世紀初頭頃に終り、その後は無袖式のE型のみとなる。

横穴式石室の平面企画法のこのような前後関係については、その要因を考える必要があるが、まず気のつくことは新しく出現する企画法ほど石室全長、玄室長、羨道長にあてる基準長の倍数を多くとっている点である。すなわち最も早くから採用されたB型企画法では、基準長をもとに玄室長を2倍にとるのに加えて羨道長2倍、全長4倍といったとり方が多いのに対して、D型では玄室長を基準長1倍分多くとり全長を5倍とする例や、羨道も1倍分加え全長を6倍にとる例がある。またC型でも玄室長を2倍分よりやや長くとるとともに、羨道長を3倍、或いは4倍にとる例や、全長を6倍にとる例等が見え、石室長全体を長くとっていることがわかる。

このように見てみると、C、D型企画法の出現は石室長を長くとるという意志の表れであり、時期的に見てもB型の全長を4倍にとる企画法を祖型としたのではないかと考えられる。ただこう考えた場合、A型でも時期のおくれる中筋山手東2号墳の例や、最も新しい無袖式のE型に基準長の4倍の石室長をとる例があること等が問題となる。前者についてはC型企画法の一つの変形であり、後者は横穴式石室の構造自体の変化にともなうものと見てよいのではなかろうか。[35]

なおこのような企画法の変遷の中で玄室の平面形態を考えた場合、各企画法ともさまざまな形態を含み、特に限定された組合わせは見出せない。したがってこれらの形態についてはここにあげた企画法とは別の要因により決定されたものと思われるが、一応長方形や胴張状のものに比べると、玄室奥幅が前幅より狭くなる台形状のものが新しい時期に集中する傾向にあるようである。

(2) 企画法と石室規模について

本論において復元した企画法の大半は玄室幅を基準長とし、石室全長、玄室長、羨道長等をその倍数にとったものである。ここではその基準長の何倍の長さを玄室長にあてるかにより、5種の企画法に分けることができた。これにより導き出されたものは、基本的には基準長を一辺とする正方形の連続形で、実際の長さを持たない企画の原型ともいうべきものである。したがって石室構築時には、いずれの企画法を採用するかとともに、基準長をいくらにとるかを決めることにより石室規模を割出していったのではないかと考えられる。

実際各石室の基準長を見ると、最大2.50mから最少0.70～0.98mまでさまざまな数値をとっており、この基準長の数値と各企画法の関係について見ると、第2表のように表すことがで

きる。この表においてまず気のつくことは、B型では勝福寺古墳北墳が2.３２ｍをとるほか、2.１０ｍから1.９３ｍの比較的大きい数値でまとまっているのに対して、C型では2.５０ｍから1.２５ｍ、D型では1.９８ｍから1.１０ｍ、E型では１ｍ以下の数値をとる点である。E型の石室が小型であるのはいうまでもないが、C、D型の基準長はB型よりもかなりの幅のある数値をとるとともに、全般的に小さくなっていることは注目される。前述のようにC、D型企画法はB型に対して石室長を長くとるが、このように基準長となる玄室幅について見れば、狭くなる傾向も見出せることになる。したがって先に指摘したB型からC、D型への企画法の派生は、石室の狭・長化を求めた結果としてとらえられるのではなかろうか。

ところで次に問題となるのは、石室平面規模を決定する際における何らかの尺度使用についてである。従来より横穴式石室の平面企画に用いられた尺度の復元作業については、石室の各平面計測値より妥当な数値を割出す尾崎喜左雄氏の方法[36]、各計測値より割出された推定尺度をさらに方眼状に組み、その妥当性を検討する柳沢一男氏の方法等が見られる[37]。したがってここでも両氏の研究に見られるように、まず各計測値の検討を行なわねばならないであろう。しかし前述のように、自然石をもっぱら用いた石室においては当初の予定との間にかなりの誤差が生じるものと思われ、特に使用尺度の扱いは企画法の復元以上に困難な作業とならざるを得ない。

ところが本論で復元した企画法は、その型の決定とともに基準長の長さが決まれば、石室の平面主要規模が割出されるという性格をもつものである。したがって石室の平面規模を何らかの尺度を用いて決定したとしたならば、まず基準長にその何尺分かをあてたことが考えられるのではなかろうか。この点について第２表を見ると、企画法の違いにもかかわらず基準長が近似する例が多く、しかもいくつかのかたまりを形成することに気がつく。それは2.２５～2.３２ｍの２基、1.９３～2.１５ｍの５基、1.６６～1.７０ｍの３基、1.２５～1.４０ｍの５基等の４グループであるが、それらは何らかの共通する尺度の使用により形成されたと見てよいのではなかろうか。

では実際にはどのような尺度が用いられたのであろうか。まず尾崎喜左雄氏が群馬県の横穴式石室において使用されたとした１尺３５㎝の高麗尺をあてはめてみると[38]、1.９３～2.１５ｍのグループのうち雲雀山東尾根Ｃ１号墳（2.１５ｍ）、中筋山手１、４号墳（2.１０ｍ）、雲雀山西尾根Ｂ２号墳（2.０５ｍ）等の４例が６尺＝2.１０ｍに、1.２５～1.４０ｍのグループのうち山筋山手東１号墳（1.４０ｍ）、同３号墳（1.３６ｍ）等の２例が4尺＝1.４０ｍにそれぞれ近似ないしは一致するという結果が得られる。しかしこれらはあくまでも各グループの一部であり、該当しないグループも存在することからすれば、この尺度により各グループが形成されたとすることはできない。

そこで注目されるのは1.６６～1.７０ｍのグループで、いずれも１尺３５㎝の５尺分1.７５㎝より少ない値をとる。しかし各数値は他のグループに比べて近似しており、他の地区における関西学院構内古墳（1.６６ｍ）、旭ケ丘２号墳（1.６６ｍ）等の存在を考えれば、ほとんど同じ尺度によったと見て間違いないものと考えられる。仮にこの1.６６～1.７０ｍの基準長を５尺とすれば、１尺が約３３～３４㎝となるが、この尺度でいけば４尺＝1.３２～1.３６ｍ、６尺＝1.９８～2.０４ｍ、７尺＝2.３１～2.３８ｍ等の値が得られ、各グループの大半が近似することになる。

このように見た限りでは、基準長による各グループの形成は1尺が約３３～３４㎝、一部では約３５㎝とする尺度の使用によるものとするのが妥当ではないかと考えられる。しかもこれらの各グループは4尺、5尺、6尺、7尺と、きわめて整然とした形でとらえられることや、雲雀丘Ｂ１号墳の羨道幅（1.００ｍ）、雲雀山東尾根Ｃ３号墳の羨道幅（1.００ｍ）、雲雀山西尾根Ｂ２号墳の玄門幅（1.０４ｍ）、中筋山手東３号墳の羨道奥幅（1.０４ｍ）等が3尺に、勝福寺古墳北墳の羨道幅（1.３２～1.３６ｍ）、雲雀丘Ｃ北１号墳の羨道前幅（1.３２ｍ）、関西学院構内古墳の羨道前幅（1.３６ｍ）等が4尺に、雲雀山東尾根Ｃ２号墳の玄室奥幅（1.６４ｍ）、中筋山手４号墳の羨道奥幅（1.７２ｍ）等が5尺にそれぞれあたることからすれば、この尺度によった可能性が強いと思われる。[39]

このように長尾山丘陵における横穴式石室の平面企画には1尺を３３～３５㎝とする尺度の使用が考えられるが、実際には尺度自体の不正確性や構築時の誤差によりこれだけの幅も十分おこり得るものと考えられる。またＣ、Ｄ型企画法の大半に３３～３４㎝の比較的小さい尺度をとる傾向が認められることからすれば、この尺度の幅は企画法の変化とともに時期的な要因により生じた可能性も考えることができるのではなかろうか。ただしこの３３～３５㎝の尺度については、高麗尺によるものか、または高麗尺が変化したものか、或いは全く別の尺度によったものか等問題も多く、今後の検討を要する。

(3)　企画法と石室構築について

以上のように、長尾山丘陵における横穴式石室の大半がその平面形に倍数型企画法を採用したことを知ったが、実際の石室構築時にこの企画法がいかにかかわったかを次に考えてみたい。

そこでまず石室構築の時点を想起すれば、全般に比較的大きな自然石による構築物であることから、構築に関する専門的技術や石材の選定と運搬技術等が当然要求される。したがって石室構築主体と実際の石室の間には、石室構築技術者ともいうべきものの介在が十分考えられるのではなかろうか。また企画法について見てもここで復元したように整然とした形をとり、しかも一定の尺度を使用した可能性も強いことからすれば、構築主体者よりも構築にあたった技術者とまず関連させて考えた方がよいものと思われる。

この技術者はまず何らかの要因により企画法を決定し、その後に規模や形態を決めたものと考えられるが、その基礎となる企画法は長尾山丘陵では大半がここにあげた基準長をもととする倍数型企画法によるものであった。この企画法は実際の数値が与えられる以前の企画の原型ともいうべきもので、石室構築時に技術者がすでに用意していたものと見られる。

またこの企画法は周辺地域の関西学院構内古墳や旭ケ丘２号墳にも見られるほか、Ｂ型では奈良県勢野茶臼山古墳、同鳥土塚古墳[40]、同天王山古墳[41]、大阪府山畑２２、３３、３６号墳[42]、同塚脇１０、１２号墳[43]、同鉢塚古墳[44]、Ｄ型では山畑３５号墳[45]等の例もあげられ、今後の検討も要するがかなり広範囲に及んでいたことが知られる。ところが、企画法のこのような普遍性にもかかわらず、できあがった石室は長尾山丘陵の中においてもさまざまな形態をとり、時期的要素や地域性が大きく反映していることも見のがせない。この企画法と石室構築との関係における二つの面については、企画法を用いた技術者が広範囲の地域の中でそれぞれ何らかの関係をもっていたこと

と同時に、地域性をもったものとしてとらえられるのではなかろうか。[46]

ではこのような地域性にもかかわらず、同じ企画法が長尾山丘陵の各古墳群とその周辺や他地域においても採用されていたということはどのように考えるべきであろうか。この点については、この倍数型企画法の性格自体について検討せねばならないであろう。

この倍数型企画法は、すでに尾崎喜左雄氏が群馬県の横穴式石室において復元されたものであるが、同氏はこの企画法とともに玄室幅を基準として玄室長をその$\sqrt{2}$倍による方法や、一定の尺度により玄室幅、長を決定するが倍数型にはならない企画法も考えられている。[47] この倍数型とは別の企画法は柳沢一男氏も北九州地方の横穴式石室において復元されており、[48] 倍数型企画法以外にいくつかの企画法が存在したことも十分考えられる。これらの企画法の中には横穴式石室がわが国にもたらされた際に入ってきたものもあるであろう。またこれに対して当地で新たに生出されたものや、横穴式石室採用以前からあったものも考えることができる。ここにあげた倍数型企画法がこのうちいずれにあたるかは不明であるが、その中で簡単な企画法の部類に入ることだけは間違いないであろう。それはこの企画法の原型が基準長を一辺とする正方形の連続形という単純な形でとらえられ、作図されていたか抽象的なものであったかは別として、容易に理解される性格をもつことからいえることである。また実際の構築時においても、基準長さえ定まっておれば簡単に玄室長、羨道長等も割出せ、多くの点で用いやすい企画法であったと考えられる。

長尾山丘陵の横穴式石室においてまず採用された企画法は、雲雀丘C北4号墳のA型でも倍数型にはならないものと勝福寺古墳北墳の倍数型企画法B型であった。前者はこの1例のみにとどまるが、後者の倍数型企画法は多くの石室に受継がれ、これを基本型とした新しい企画法も出現する。このことから考えれば、長尾山丘陵における多量の横穴式石室墳築造はこの倍数型企画法の採用をとおして行なわれたとしても過言ではなかろう。またこの企画法のもつ普遍性と簡易性もこのような横穴式石室墳の築造量増加と築造地域の拡大という時期的背景の中でとらえられ、さらにはこれにともなったであろう石室構築技術者の需要増加と関係するものとして考えられるのではなかろうか。

5．おわりに

以上のように、本論では長尾山丘陵における横穴式石室の平面企画の復元を試み、それによって得られた倍数型企画法に関するいくつかの問題点について論じてきた。しかしここで扱った資料が長尾山丘陵における横穴式石室約２００基のうちのごく一部にすぎないことや、資料の不統一性等まだまだ今後の詳細な検討を待たねばならない点も多い。またここで復元した企画法を他地域と関連させていくには論証も不十分で、今後の課題が多く残されている。

ところで近年における後期古墳の研究は、群集墳における群構成や形成から衰退に至る過程等が対象の中心となり、そこに見られる各被葬者集団の消長やその背景となる社会、政治的側面について論じられることが多い。実際最近における資料の増加と研究方法の発展は、このような視点からの研究を可能としており、いくつかの斬新な試みも見ることができる。[49] ところが横穴式石室の構築については、その被葬者及び構築主体との関連において論じられることが多く、石室構

築そのものについてはあまりふれられることはなかった。この点については、かって近藤義郎氏が『佐良山古墳群の研究』において、後期古墳築造に必要とする労力を「恐らく１０数人の人々の２、３ケ月の労働によって、建設され得るものとされる」と表現し[50]、また喜谷美宣氏が築造技術者集団を想定して以来[51]、ほとんど進展が見られなかったといってもよいのではなかろうか。

本論において横穴式石室の平面企画をとりあげた目的は、最初にも述べたように、この横穴式石室の構築自体を明らかにしていくことにある。それはここにあげた企画法と技術者以外にも、立地条件や石材の確保とその運搬、さらにそれに費した労働と期間等の多くの問題を含んでおり、これらについて明確にしていくことが古墳築造の意義を知る上で重要な一視点となるのではないかと考えられる。ここではこういった意味において、若干ではあるが一つの問題提起とした次第である。

最後に、資料をお貸しいただいた武藤誠先生をはじめとして、宝塚市教育委員会、関西学院大学考古学研究会の方々に感謝いたします。

＜註＞

① 拙稿「横穴式石室の平面形について」(『関西学院考古』第４号)

② この平面企画法復元については、尾崎喜左雄氏『横穴式古墳の研究』（吉川弘文館　昭和41年）、同「横穴式石室平面図形の企画」(『考古学雑誌』第４８巻第４号）によるところが多い。

③ この表に示した計測値は、資料番号１、２、１１、１２、１９～２２については各古墳調査時の実測図に、４～６、１６、１７、２３、２４については関西学院大学考古学研究会による実測調査時の図面にそれぞれよった。また第２図～第６図についてもこれらの実測図に基ずくものである。しかしこれ以外は後にあげる各報告によるもので、資料の不統一性はまぬがれない。

④ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅱ－雲雀丘古墳群－」(『関西学院考古』第５号)

⑤ 白石太一郎氏の型式分類によれば、本石室の玄室幅指数５９～６９より第Ⅱ型式にあてることができる。

⑥ これ以外にも比較的旧状を保つ墳丘の径約１５ｍが玄室左側壁長のほぼ４倍にあたることや、その円の中心が玄室前側右隅に求められることが指摘される。

⑦ 武藤誠・橋本久『宝塚市史』第４巻考古編（昭和５２年）

⑧ 玄室奥幅を基準長とすれば、全長はそのほぼ５倍となり、玄室長に玄門長を加えるとその２倍、前室長と羨道長の和がその３倍となる。このように考えればＢ型企画法の変形ともとれる。

⑨ 亥野彊『川西市史』第４巻考古資料（昭和５１年）

⑩ ⑦と同じ。実測図については武藤誠氏が作製したものを使用させていただいた。

⑪ 宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群東尾根Ａ支群・西尾根Ｂ支群の調査』（昭和５０年）

⑫ 関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅰ－中筋山手古墳群－」(『関西学院考古』第４号)

⑬ ④と同じ。

⑭　宝塚市教育委員会『長尾山の古墳群調査集報』（昭和５５年）
　実測図については本古墳調査時に作製のものを使用させていただいた。

⑮　これ以外にも玄室中幅の６倍がほぼ石室全長にあたることが指摘される。

⑯　①と同じ。

⑰　⑦と同じ。

⑱　大久保基夫「摂津川辺郡の３古墳を実測して」（『古代学研究』２１、２２号）

⑲　⑭と同じ。実測図については本古墳調査時に作製のものを使用させていただいた。

⑳　これ以外にも玄室奥幅の３倍がほぼ羨道長にあたることが指摘される。

㉑　⑫と同じ。

㉒　①と同じ。

㉓　⑪と同じ。

㉔　⑦と同じ。なお胴張状玄室の大半は玄室前幅か奥幅を基準長とするが、この中筋山手東１号墳では玄室中央の最大幅を基準長としている。

㉕　⑦と同じ。

㉖　⑱と同じ。本古墳の名称については大久保氏の論文の号数により仮称した。

㉗　⑪と同じ。

㉘　石野博信『宝塚市長尾山古墳群』（昭和４６年）
　⑦と同じ。

㉙　⑦と同じ。

㉚　⑨と同じ。

㉛　⑪と同じ。

㉜　⑭と同じ。

㉝　⑭と同じ。

㉞　⑪、㉘と同じ。

㉟　このように考えた場合、Ｂ型企画法でも羨道長を基準長の３、４倍にとる企画法の存在も想定できる。この例は長尾山丘陵では見られないが、他地域では後にあげる奈良県烏土塚古墳等に実例を見ることができる。

㊱　②と同じ。

㊲　柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開－平面図形と尺度について－」（『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会編　昭和５０年）

㊳　②と同じ。

㊴　なおこの尺度により各石室の基準長を分割してみると、このほかにも同尺度を基準長以外に使用したらしい例も多く見える。ただしこの尺度では７尺となる基準長をもつ雲雀丘Ｃ北４号墳については、基準長を２等分するという企画法と矛盾が生じることから他の尺度を使用した可能性も考えられる（第２図～第６図）。またＥ型企画法のものについては雲雀山東尾根Ａ14、１５号墳の基準長がこの尺度の２、３尺に合う。しかし他の点でこの尺度を用いたという確証

はつかめなかった。

㊵　奈良県教育委員会『烏土塚』（昭和４７年）

基準長は勢野茶臼山古墳で2.２５ｍ、烏土塚古墳で2.９０ｍとなっており、烏土塚古墳では羨道長がほぼこれの３倍となる。また勢野茶臼山古墳では基準長が勝福寺古墳北墳、雲雀丘Ｃ北４号墳と近似する点や、玄室長が勝福寺古墳北墳とほぼ等しいことが注目される。

㊶　京都帝国大学文学部考古学教室『大和島庄石舞台の巨石古墳』（昭和１２年）

基準長は約３ｍで、羨道長はこの３倍となる可能性が強い。

㊷　東大阪市教育委員会『山畑古墳群１』（昭和４８年）

基準長は２２号墳（1.６５ｍ）、３３号墳（2.２０ｍ）、３６号墳（約2.００ｍ）となり、２２号墳ではこれのほぼ４倍、３３号墳ではほぼ３倍の羨道長をそれぞれとっている。なお後にあげる３５号墳（基準長1.３５ｍ）も含めると、各石室の基準長は長尾山丘陵における基準長の各集中グループに一致ないしは近似する点が指摘される。

㊸　高槻市教育委員会『塚脇古墳群』（昭和４０年）

基準長は１０号墳（1.８ｍ）、１２号墳（2.１ｍ）となり、１０号墳ではこれのほぼ３倍の羨道長をとっている。

㊹　㊶と同じ。　基準長は3.２５ｍである。

㊺　㊷と同じ。　基準長は1.３５ｍである。

㊻　横穴式石室における平面形態のこのような性格については、ここでとりあげたある程度の普遍性をもつ企画法とは別のものとして考えるべきであろう。また羨道の開き方を見ても、倍数型企画法と一定の尺度にしたがった可能性のあるものもあるが、その形態はさまざまで、定まった企画法を見出すことは困難である。したがってここでとりあげたような企画法とこのような細かな平面形態の決定については、石室構築とのかかわりあいにおいて別の次元のものとしてとらえる必要があるのではなかろうか。

㊼　②と同じ。

㊽　㊲と同じ。

㊾　水野正好「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」（『古代研究』第４号）

広瀬和雄「群集墳論序説」（『古代研究』第１５号）

関川尚功「群集墳をめぐる諸問題－大和を中心として－」（奈良県立橿原考古学研究所編『桜井市外鎌山北麓古墳群』　昭和５３年）

㊿　近藤義郎ほか『佐良山古墳群の研究』第１冊（昭和２７年）

(51)　喜谷美宣「後期古墳時代研究抄史」（考古学研究会編『日本考古学の諸問題』昭和３５年）

第２表　玄室企画法と基準長の関係

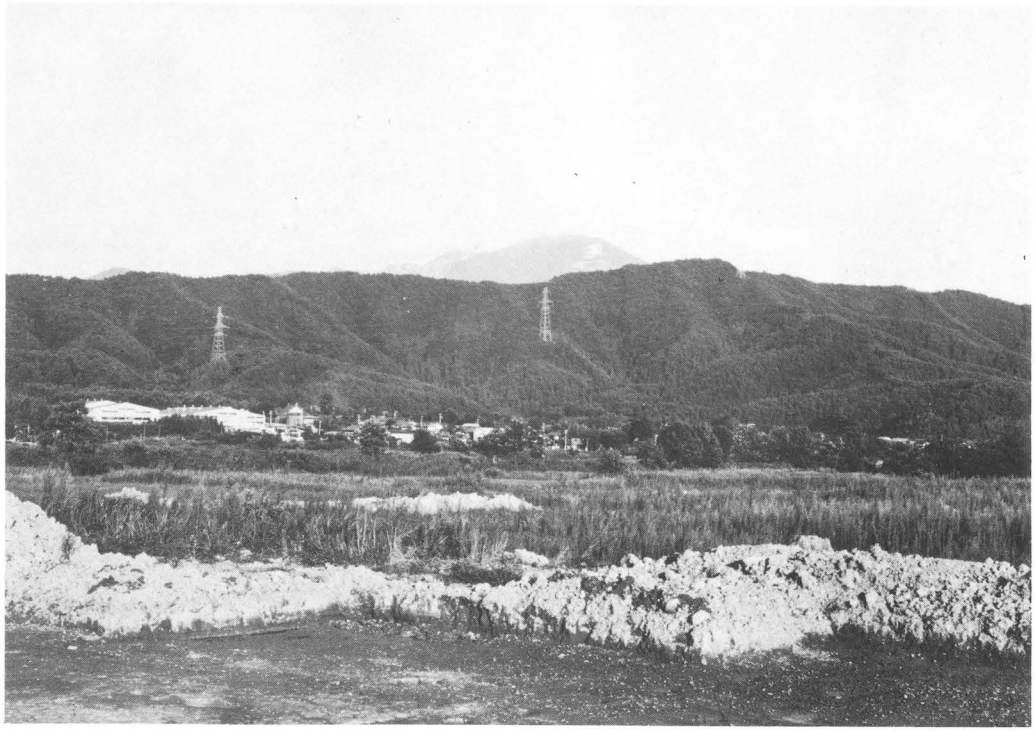
企画法 基準長(m)	A	B	C	D	E
2.5 0			中山寺白鳥塚		
2.3 2 ｜ 2.2 5	雲雀丘C北４号墳	勝福寺北墳			
2.1 5 ｜ 1.9 3		中筋山手１号墳 〃　　４号墳 雲雀山西尾根 Ｂ２号墳 雲雀丘C南１号墳	雲雀山東尾根 Ｃ１号墳	雲雀山東尾根 Ｃ２号墳	
1.7 0 ｜ 1.6 6	中筋山手東２号墳		雲雀丘C北３号墳 （旭ケ丘２号墳）	雲雀丘C北１号墳 （関西学院構内 古墳）	
1.4 0 ｜ 1.2 5			雲雀丘Ｂ１号墳	中筋山手東１号墳 〃　　３号墳 雲雀山東尾根 Ａ９号墳 〃　Ｃ３号墳	
1.1 0				雲雀丘C南２号墳	
0.9 8 ｜ 0.7 0					雲雀山東尾根 Ａ１０号墳 〃　１１号墳 〃　１４号墳 〃　１５号墳

第１表　長尾山丘陵の横穴式石室計測値表

（太字は倍数値とその一単位となる数値、太線の枠は基準長
（　　）は現存長または計測可能な数値を示す。）

資料番号	計測値(m) / 古墳名	A 玄室幅			B玄室長		羨道幅		C羨道長		D 全長		B/A	B′/A	B/A″	B′/A″	C/A	C′/A	C/A″	C′/A″	D/A	D′/A	D/A″	D′/A″	玄室形態	玄室企画法
		A 前	A′中	A″奥	B 右	B′左	前	奥	C 右	C′左	D 右	D′左														
1	勝福寺古墳北墳	**2.32**		**2.28**	4.70		1.32	1.36	4.30		9.00		**2.0**		**2.1**		**1.9**		**1.9**		**3.9**		**3.9**		右片袖式長方形	B
2	雲雀丘C南1号墳	**1.93**	2.06	**2.02**	3.85	3.71	0.91	1.00	3.48	3.40	7.33	7.11	**2.0**	**1.9**	**1.9**	1.8	1.8	1.8	1.7	1.7	3.8	3.7	3.6	3.5	両袖式若干胴張	B
3	〃　〃　2号墳	**1.10**			3.20		0.90		1.90		5.10		**2.9**				1.7				4.6				両袖式逆台形	D
4	〃　C北1号墳	**1.68**		1.50	4.78	4.66	1.32	1.14	3.66	3.72	8.44	8.38	2.8	2.8	3.2	3.1	2.2	2.2	2.4	2.5	**5.0**	**5.0**	5.6	5.6	両袖式台形	D′
5	〃　〃　3号墳	**1.66**		1.40	3.82	3.70	1.10	1.18	4.90	5.00	8.72	8.70	2.3	2.2	2.7	2.6	**3.0**	**3.1**	3.5	3.6	5.3	5.2	6.2	6.2	両袖式台形	C
6	〃　〃　4号墳	**2.25**		2.40	3.80	3.48		1.05	(0.48)		(4.28)		1.7	1.5	1.6	1.5									右片袖式逆台形	A
7	〃　B1号墳	**1.25**	**1.40**	1.20	3.20		1.00	1.00	5.06		8.26		2.6		2.7	B/A′ 2.3	**4.0**		4.2	C/A′ 3.6	6.6		6.9	D/A′ **5.9**	両袖式台形胴張	C
8	雲雀山東尾根C1号墳	**2.15**			5.21		1.25		(1.75)		(6.90)		2.4												両袖式長方形	C
9	〃　〃　2号墳	**1.98**		**1.64**	5.6	5.8	1.48	1.24	5.02	4.80	10.68	10.60	2.8	**2.9**	3.4	3.5	2.5	2.4	**3.1**	**2.9**	5.4	5.4	6.5	6.5	両袖式台形	D
10	〃　〃　3号墳	**1.32**			4.10		1.00		(4.80)		(8.90)		**3.1**				(3.6)				(6.7)				両袖式長方形	D
11	〃　〃　A9号墳	**1.34**		0.91	3.92	3.96	1.14	1.24	2.96	3.04	6.88	7.00	**3.0**	**3.0**	4.3	4.4	2.2	2.3	3.3	3.3	**5.1**	5.2	7.6	7.7	無袖式（左片袖）台形	D
12	〃　西尾根B2号墳	**2.05**	2.30	**2.05**	4.10	4.00	1.26	1.49	3.72	4.22	7.82	8.22	**2.0**	**2.0**	**2.0**	**2.0**	1.8	**2.1**	1.8	**2.1**	3.8	**4.0**	3.8	**4.0**	両袖式胴張	B
13	中筋山手東1号墳		**1.40**	1.14	4.00			0.88	(3.00)		(7.00)		B/A′ **2.9**		3.5										両袖式胴張	D
14	〃　2号墳	**1.70**		**1.50**	2.60		1.40	1.60	5.00		7.60		1.5		1.7		**2.9**		3.3		4.5		**5.1**		両袖式台形	A
15	〃　3号墳		1.68	**1.36**	3.90		1.04		4.00		7.90		B/A′ 2.3		**2.9**		C/A′ 2.4		**2.9**		D/A′ 4.7		5.8		両袖式胴張	D
16	中筋山手1号墳	**2.10**		1.52	4.00	3.96	1.22		(0.80)		(4.80)		**1.9**	**1.9**	2.6	2.6									両袖式台形	B
17	〃　4号墳	**2.10**		**1.82**	3.80	4.00	1.72		(3.00)		(7.00)		1.8	**1.9**	**2.1**	2.2									両袖式台形	B
18	中山寺白鳥塚古墳	**2.50**			6.00		2.00		9.20		15.20		2.4				3.7				**6.1**				両袖式長方形	C
19	雲雀山東尾根A10号墳	0.91		0.75							3.14	3.20									3.5	3.5	4.2	4.3	無袖式	E
20	〃　11号墳	1.04		**0.89**							3.53	3.28									3.4	3.2	**4.0**	3.7	〃	E
21	〃　14号墳	**0.70**		0.80							3.60	3.40									5.2	**4.9**	4.5	4.3	〃	E
22	〃　15号墳	0.94		**0.98**							3.94	3.96									4.2	4.2	**4.0**	**4.0**	〃	E
23	関西学院構内古墳	**1.66**		1.50	4.86	4.92	1.36	1.18	3.10	3.24	7.96	8.16	**2.9**	**3.0**	3.2	3.3	**1.9**	**2.0**	**2.1**	2.2	4.8	**4.9**	5.3	5.4	右片袖式台形	D
24	旭ケ丘2号墳	**1.66**	**1.70**		3.82		1.26	1.44	3.10	3.30	6.92		2.3		B/A′ 2.2		**1.9**	**2.0**	C/A′ 1.8	C′/A′ **1.9**	4.2		D/A′ **4.1**		右片袖式胴張	C

図版　一　浅井町北野遺跡



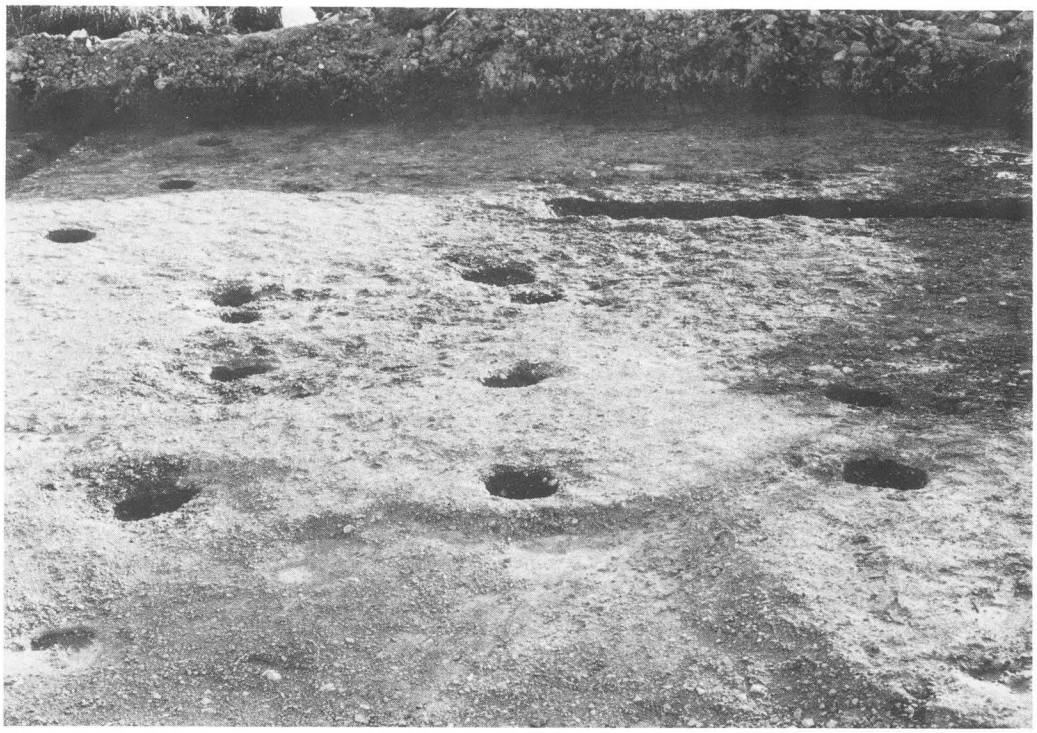
上　北野遺跡より伊吹山を望む　　下　北野神社遠景

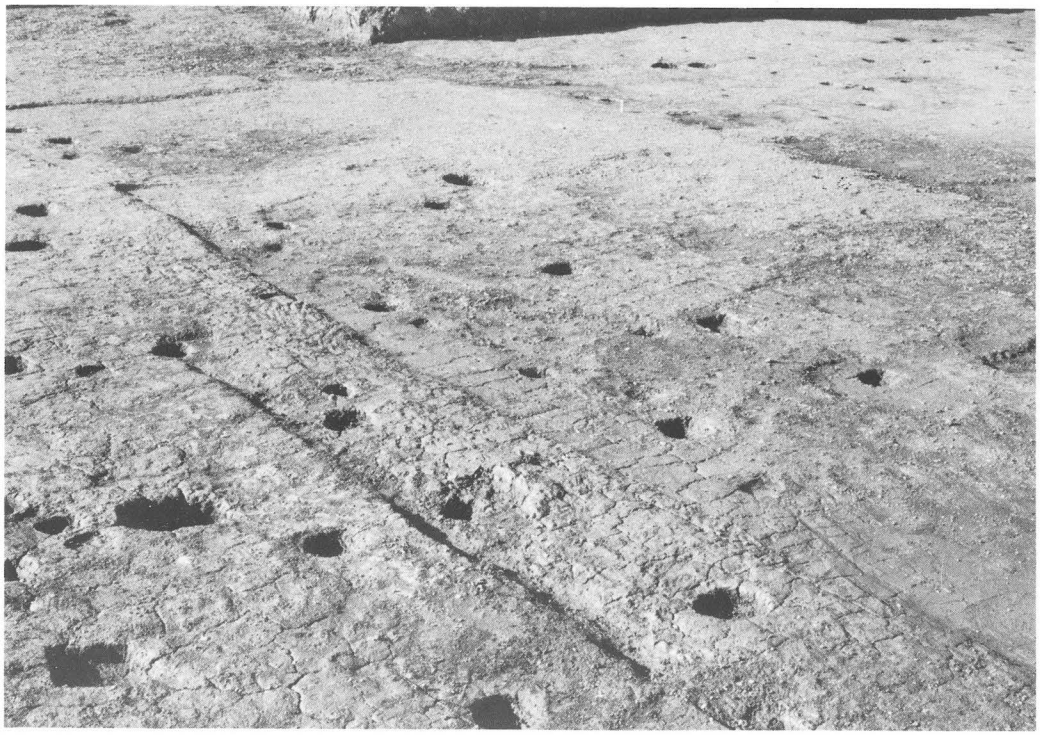
上　ＳＢ１（北より）　　下　ＳＢ２（北より）

上　B地区全景（西より）　　下　B地区全景（西より）

図版　四　浅井町北野遺跡

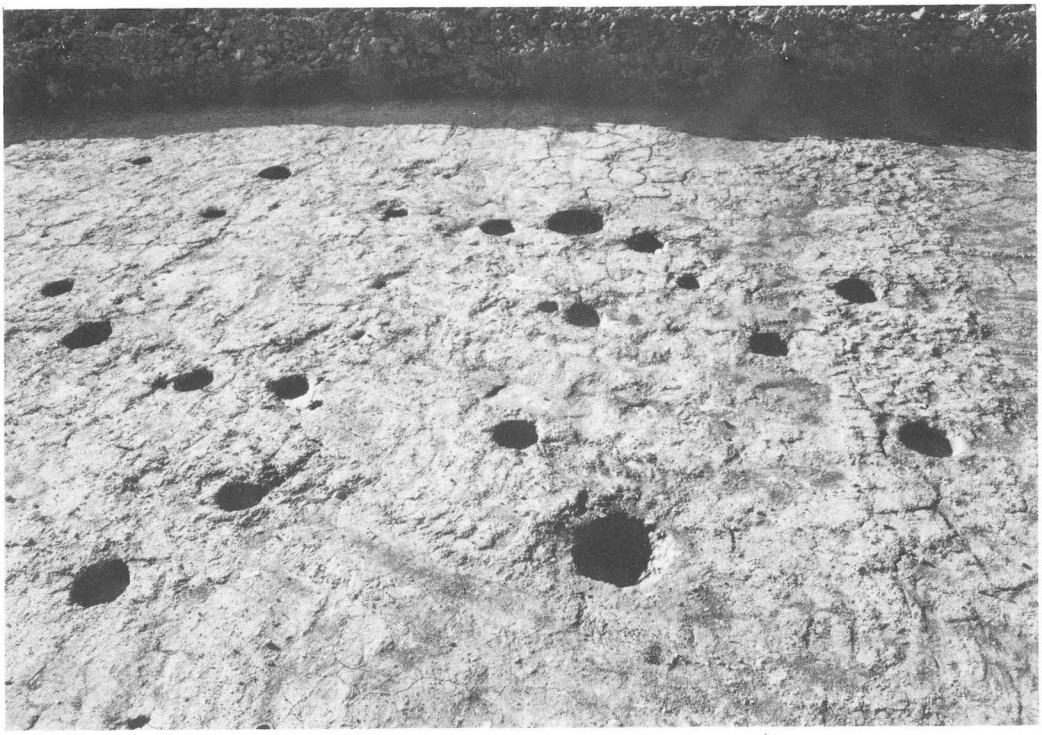
上　ＳＢ３（東より）　　下　ＳＢ３（南より）





上　ＳＢ４（南より）　　下　ＳＢ５（南西より）

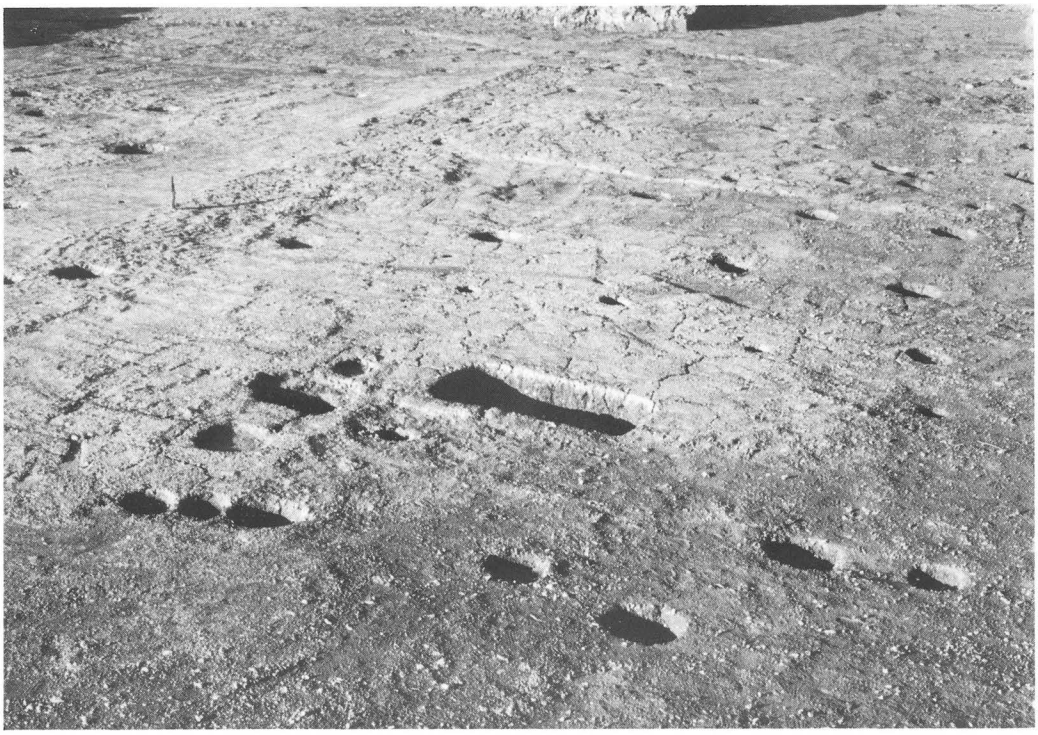
図版　六　浅井町北野遺跡



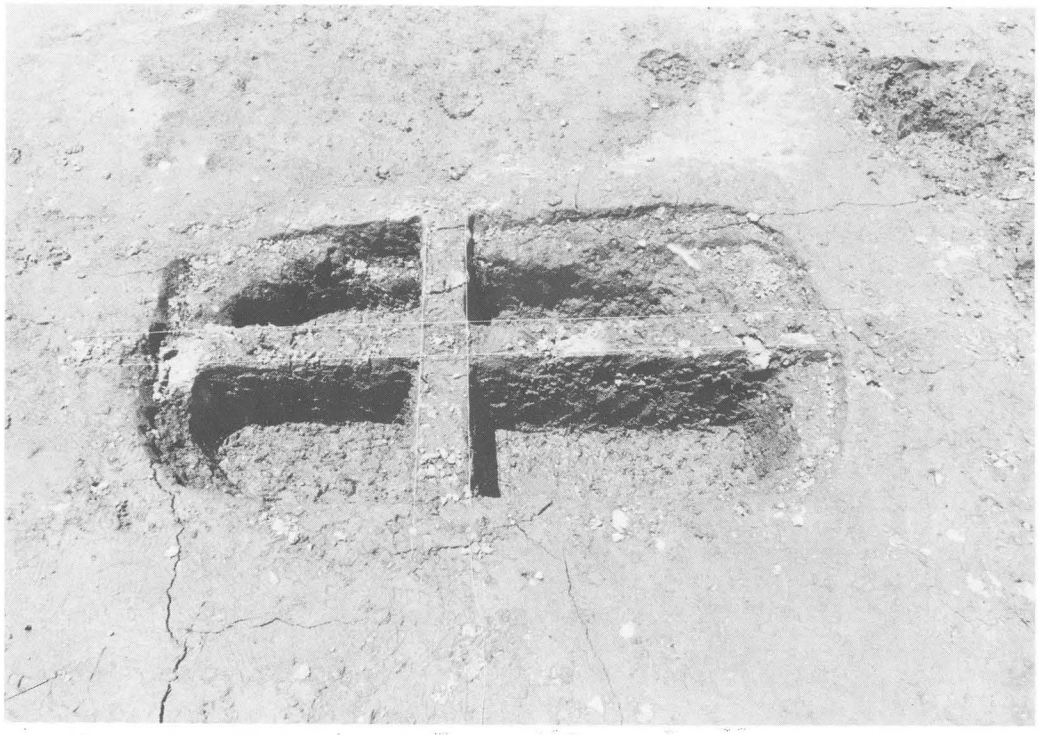
上　ＳＢ６（北より）　　下　ＳＢ７（西より）

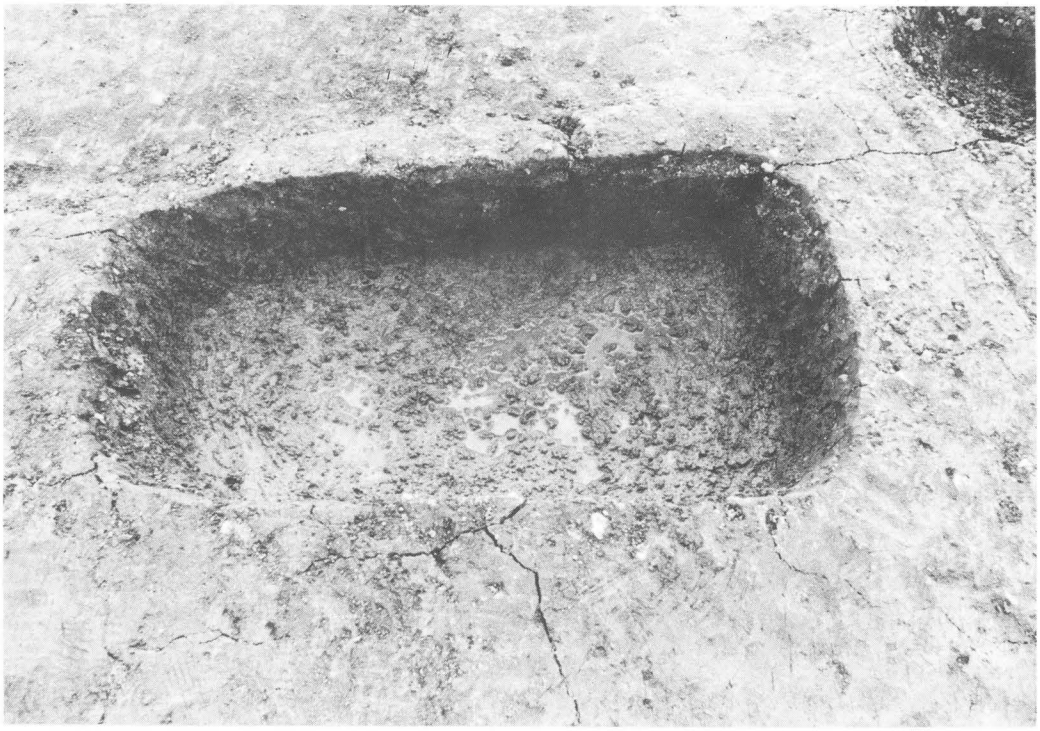
上　ＳＢ８（西より）　　下　ＳＢ８（東より）

図版　八　浅井町北野遺跡



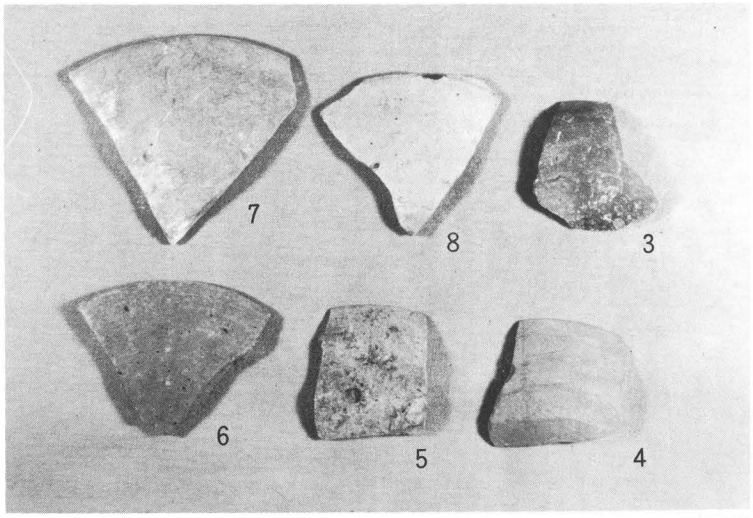
上　土師質皿出土状況　　下　ＳＫ５（北より）



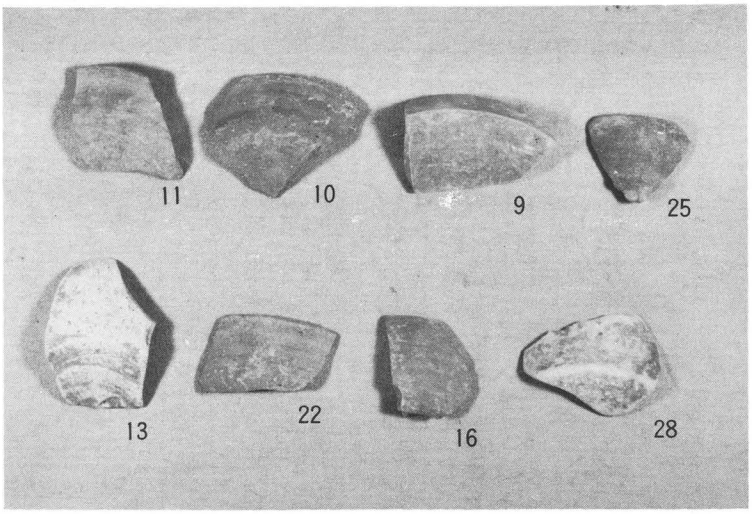


上　SK5　　下　SK5

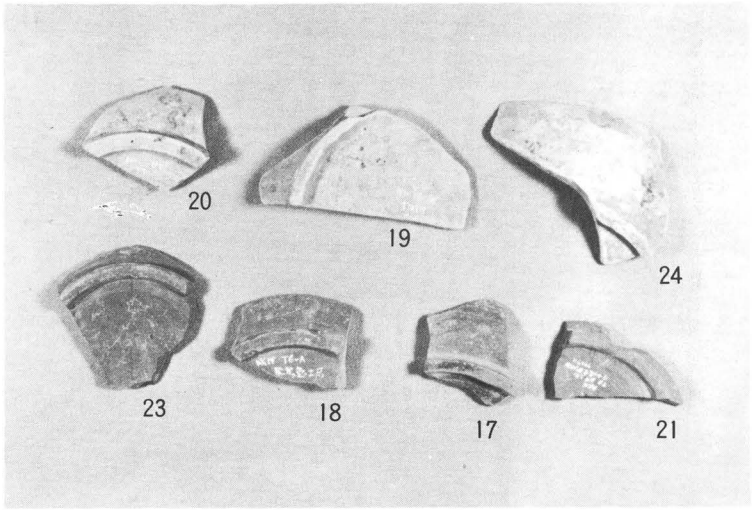
図版　十　浅井町北野遺跡



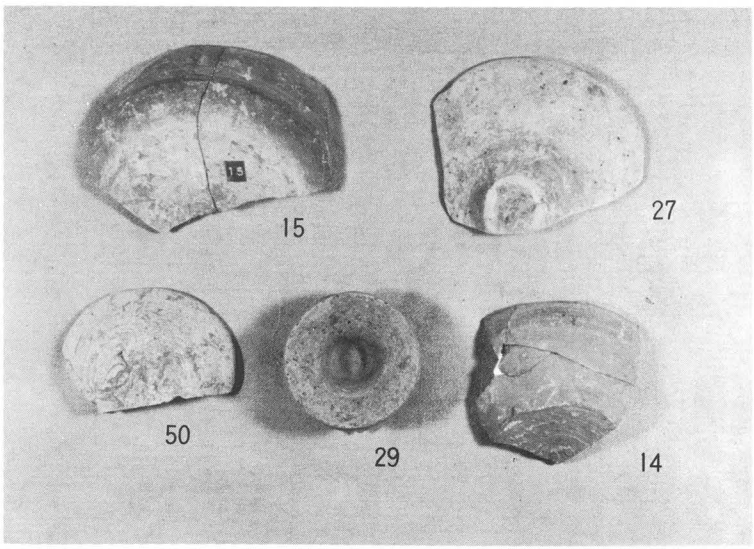
須　恵　器
（杯　蓋）

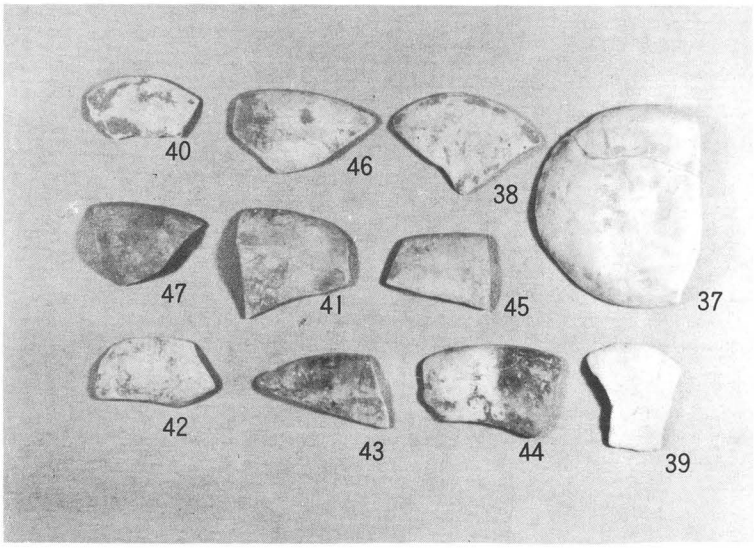


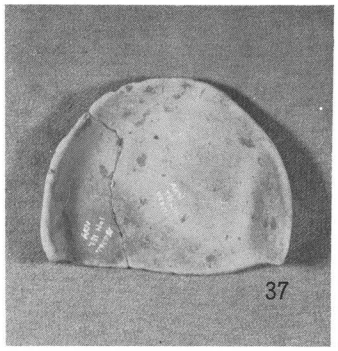
須　恵　器
（杯身・壺の蓋
・器種不明）

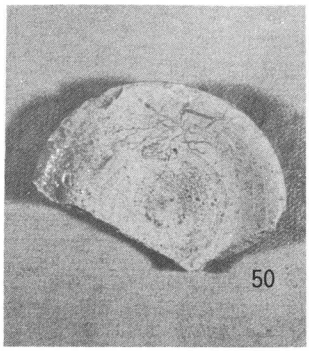


須　恵　器
（杯身高台部）





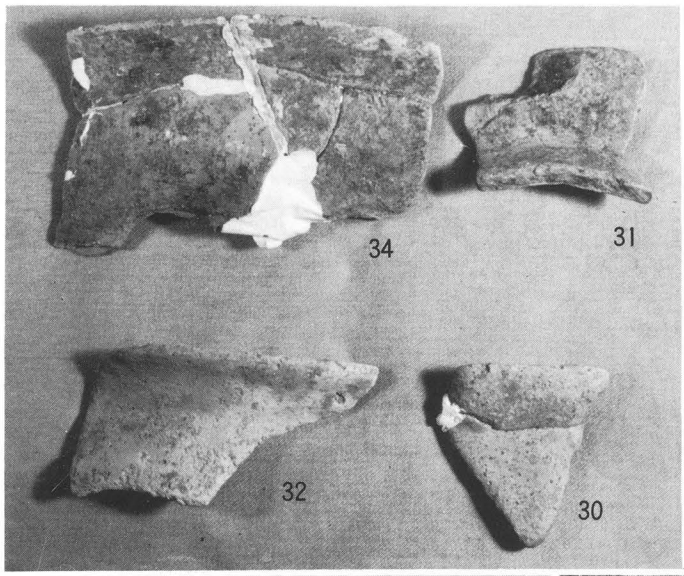


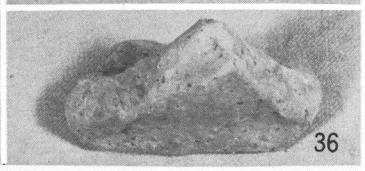


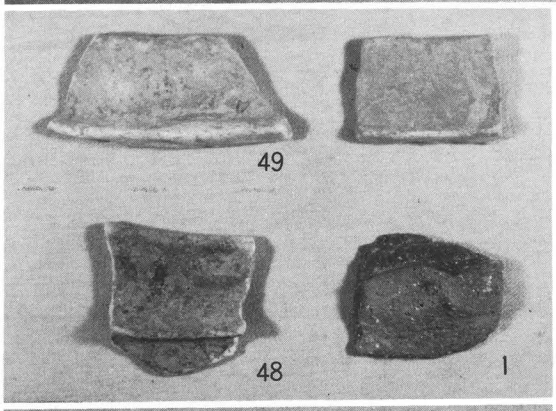
右　土師皿

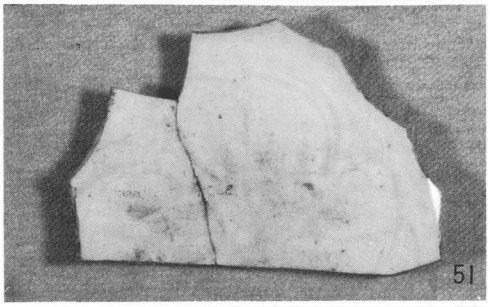
左　山茶椀

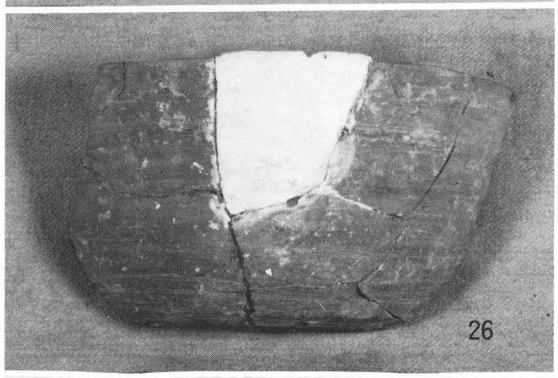
図版　十二　浅井町北野遺跡

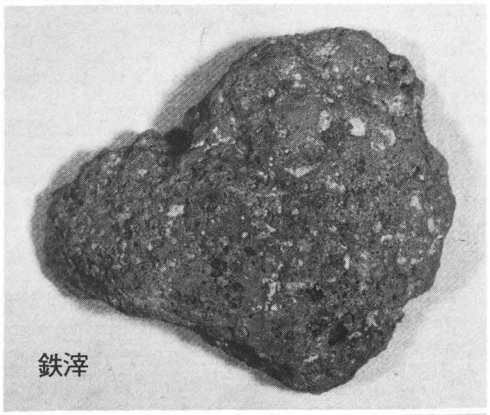


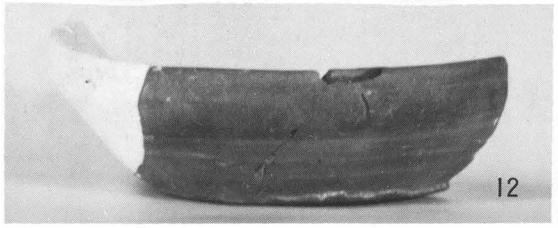


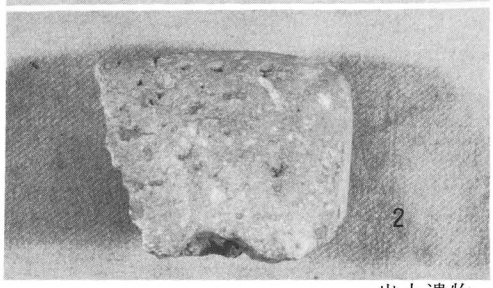




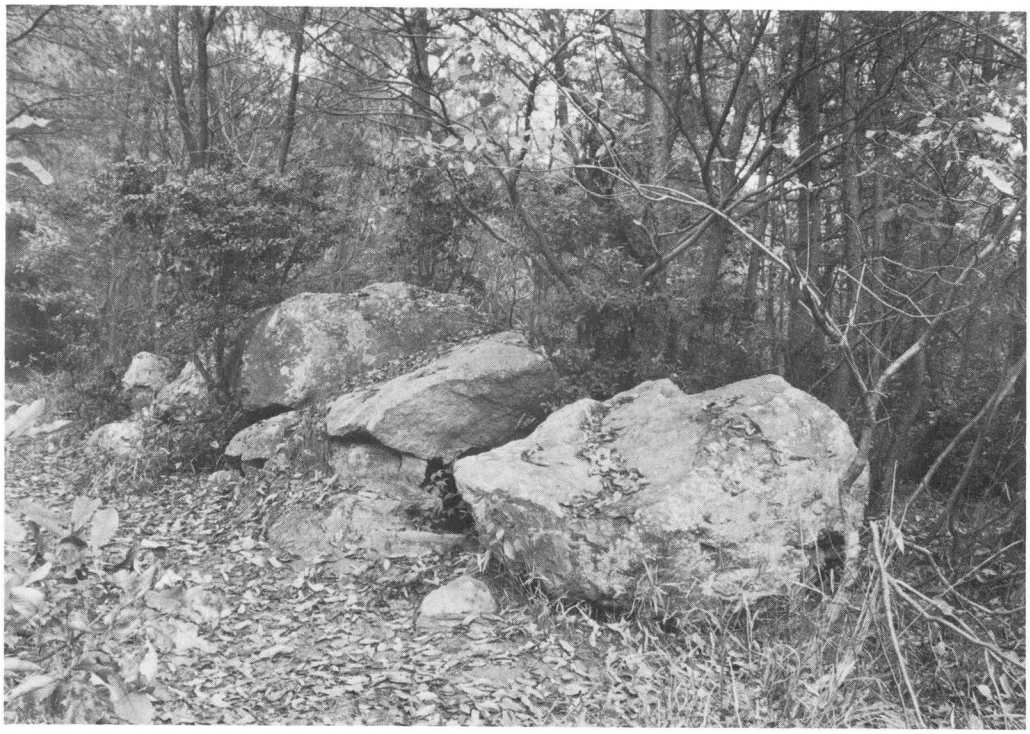








出土遺物



雲雀山西尾根Ｂ支群10号墳石室

編集後記

☆ '76年以来継続している兵庫県宝塚市長尾山の古墳群測量調査報告も３回目を迎えました。今回は'72年一部発掘調査された雲雀山西尾根古墳群Ｂ支群にとりくみ、その西半部について報告しました。測量調査ゆえに限界もありますが、後期古墳の歴史的意義を考察するうえでの基礎資料となりうると考えます。

☆ 当研究会は'79年夏、滋賀県浅井町北野遺跡の発掘を担当しました。阪神地方とは違って土地感のない近江での調査で、不安がありましたが、近江湖北地方の一地域の歴史の片鱗を明らかにできたと思います。

☆ 横穴式石室の平面企画についての研究ノートを寄稿していただいた岡野氏（川西市教育委員会）は、前回（本誌第４号）で提示した問題を、ここでは我々の研究テーマ長尾山の古墳群の資料から、さらに深化させ、漸新な視点から後期古墳を論じられています。

☆ このほか、本号では日頃から御指導いただいている直宮氏（宝塚市教育委員会）、古川氏（西宮市教育委員会）、兼康氏（滋賀県教育委員会）から、玉稿をいただきました。それぞれ重要な資料となりうることでしょう。関学関係者以外の方からの御寄稿は今回はじめてですが、今後とも各方面からの投稿をお待ちしています。

関西学院考古購入御希望の方は郵便振込みにてお願いします。
関西学院大学考古学研究会　　会計係　土　谷　　恵
〒662　西宮市仁川百合野町４－17　　池　田　方
振込番号　　神戸４３１５１

顧　問　：福島　好和（文学部・助教授）
坂井　秀弥（院・２）・中野　拓哉（法・４）・岡島　壮児（法・３）
高田　一雄（法・３）・三谷　重明（法・２）・木谷　秀次（文・２）
土谷　　恵（文・２）・納谷　守幸（文・２）・中村まどか（文・１）

関西学院考古　第６号

発　行　日　　昭和５５年３月３１日
編集・発行　　関西学院大学考古学研究会
西宮市上ケ原　関西学院大学文学部内
振替　神戸４３１５１
印　　刷　　冨士出版印刷株式会社